
こんなチートでもありですか？ そうですかい。

わいわい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなチートでもありですかい？そうですかい。

【Nコード】

N3752P

【作者名】

わいわい

【あらすじ】

目を覚めると、魂の管理者を名乗る幼女に『アンリ・ミュ』の討伐を頼まれてしまう。

地球人類の滅亡を防ぐため、我らがオリ主が例に漏れずにチートを選ぶのだが……

こんなチートありですかい？

この作品はオリ主最強を含む最低系要素満載なのでご注意ください。い。

主人公は似非関西弁を操りますので注意です。地雷らしい。

また、原作キャラ崩壊が激しく起こりますので、原作を大切にしたいお方は、まわれ右で宜しくです。
基本方針はギャグ&バトル。シリアスは苦手だけど頑張る。

プロローグ。変人、転生す。(前書き)

やってしまった感は否めない。それでも楽しんでくれたら嬉しいです。

プロローグ。変人、転生す。

は？

気がつくと四方が真っ白な空間に立っていた。

いや、立つという言葉が相応しいのだろうか？上も下も、奥行きでさえも限度がないような・・・まさに白い宇宙といったところだ。

ここまで考えた瞬間、自分は夢でないことに気づく。他人の夢はどうか知らんが、自分の夢とは基本、客観的に自分の姿が映るものだ。

<そつだ、夢ではない。>

突然声が聞こえてくる。自分は声の正体を探すために首を動かすと・・・何やらエラそつに佇む金髪の幼女を見つけた。

1・誰？

2・ここ何処？

3・なんで白いの？

4・なんで幼女？

5・つつかなんでエラそうにふんぞり返ってんの？

挙げればきりが無いほどの疑問が瞬時に思いつくが、とりあえず相手の反応を待つことにする。

「・・・」

「・・・」

何故か睨みつけられる俺。とりあえず何で睨みつけられるか考える。

おそらくあの顔は望んだ反応が得られなかった時の顔だ。んゝ質問して欲しかったのか？

「とりあえず、あなたは誰ですか？ Who are you? の方がいいか？」

「日本語で良いぞ。」

日本語でいいらしい。そうか。

「I see。」

「日本語でいいといつとるだろう。」

幼女はご立腹のご様子。

「それで？ 俺の質問には答えてくれるの？」

「ああ、そうだな。私は・・・神だ。」

神らしい。モ スターエン ンですわかります。おかしいな。俺はAV女優でも女子アナでもないのだが・・・

「違う。あんな陳腐な芸人と一緒にするな。私は神々の一柱。魂を管理する者。」

「死神じゃないですか。」

「そうとも言っな。」

ニヤリと口端を釣り上げる幼女神。あれ？ 幼女な神じゃなくて幼女の神みたいになっちた。別名ロリ神ですな。

「そんで？ その死神さんがなんのようですかい？」

「なに、ちよつと世界を救ってきてほしいだけさ。」

大きく出ましたね。魔王でも倒すのですか？

「魔王ではないさ。」

「違うのですか？」

「貴様にしてもらいたいのには異世界に赴き、あるものを討伐。その名は・・・『アンリ・マユ』」

「はあ、アリンコですか。」

キメラアントみたいのだったら辞退しようと思つ。うん。無理（キラ）

「違う！貴様、『Fate/stay night』を知らんのか！？」

「承知でございます。」

「では、アンリ・マユを知らんのか？」

「知らんでございます。」

Fateね〜懐かしい言葉を聞いた。たしか学生の頃だったよな。高校か大学かは忘れたがそんな頃だ。

ん〜アンリ・マユかー。…………全く思い出せん。思い出せるのはえ〜と…………

『ダメットさん』

もうダメぽ。これが最初に浮かぶ時点で、もはやダメな気がする。しかし言葉だけ。誰を指しているかわからん。

俺の拳が光って唸る。って感じの人だった気がする。手が早くて速い。あつ、名言思い出した。

じゃんけん・・・死ねっ！！！！

『なんかゴチャゴチャ理屈っぽい世界観』

ガイア、アラヤ、抑止力、アリストテレス、真祖、死徒、根源』、魔法。あれ？意外に覚えてるぞ？やるな俺。

『腹ペコ王』

なんか可愛い奴だった気がする。貧乏なんですね。王様なのに不憫な・・・

『ナントカアクマ』

たしかこんな感じで呼ばれてた気がする。大丈夫。顔は覚えているぞ。名前は忘れた。確かヒロインだったな。多分。Maybe。Perhaps。

『厨二っぽい主人公』

日本人だけど赤い髪。手から剣。弓も使うよ！色々だせるよ！鈍感なのだ！だった気がする。まあぶっちゃけよく覚えていない。

ああ、名前は覚えているぞ。エミヤだろ？漢字は忘れた。下の名前も忘れた。

「はあ。人選を間違えたかな」

「元気だせよ。そのうちいいことあるぞ。」

「あなたのせいで落ち込んでんの！」

お？エラそんな雰囲気になくなったな。そっちの方が可愛いぞ幼女。

「幼女言うな！！」

「これは失敬。」

うううう。と幼女はご立腹のご様子。

「まあ。仕方がないわ。もう選んじやったし。魂の色も当てにならないわね。」

「変人具合に定評のある自分です。」

「と！り！あ！え！ず！あなたには『アンリ・マユ』を倒してもらいます。」

「それって簡単に倒せるの？」

「簡単に倒せるならわざわざこんなことしないわ。」

「ですよね？」

「あなたホントに忘れてるみたいだし、簡潔に説明しておくわ。」

説明中

「ほんほん。この世の全ての悪を体現する悪魔ですかー」

「そうよ。人は『アンリ・マユ』からは逃れられないわ。聖杯の力を吸って完全に現界したら、滅亡ね。」

「ですが、だからって神様が何で介入するんですか？それに普通ゲ

「ムってハッピーエンドでしょ？ほつといても大丈夫じゃね？」

「普通ならね。あなたが行く世界は『アンリ・マユ』が何らかの形で現界することが分かっている世界よ。だから何とかして阻止しようとしているの。でないと、わざわざこんなことさせようとしないわ。」

地球人滅亡限定のバットエンドですか。何という世界。

「私は魂を管理する者よ。世界を管理する者からすればどうでもいいことでしょうが、私にとっては地球人滅亡は痛手よ。大量の魂を浄化しないといけなくなるから。」

「神様って色々いるんですか？」

「いるわ。役割、使命が様々にあることは人であろうが神であろうが同じよ。私の使命は新たな魂の作成と古い魂の浄化。世界を管理する彼は世界の存続。」

使命かーわかるぞー！自分もロボットを作ることが使命であった。まだ作れてないが……

「そう言えば自分は死んでるんですかね？」

「ここに居るってことはそうなるわ。普通なら浄化して色を落してから再利用するか、汚れ具合を見て新しい魂を作らせて貰っているけれどね。」

「さよですか。話を戻しますけど、どうやって倒すんですかい？」

「いまのあなたなら無理ね。でも大丈夫よ。色はあなたのままで魂をつくりかえてあげるから。」

魂を作りかえる？

「どう作るかを考える必要はないわ。要望があったら言ってね。」

「じゃ、ネコにしてください。」

「却下。」

「一言ですかい。」

「当たり前よ！あなた倒す気あるの！？」

「何言つとるんですか。あっ、猫だ。超ラブリー。悪ってなんだ？糞喰らえ。猫だ猫。今日から俺はこの世の全ての猫になる！ってなるんじゃよ」

「ならないわよー！ー」

「さいですかい。」

アリンコは猫が嫌いらしい。けっ！非国民めが！！

「普通さ。あの漫画やアニメの技とか能力を使える様にしてくれー
って言うんじゃないの？」

「ところがどっこいこの男、普通じゃないのさ。」

「それはもう分ってるわ。」

「つまり。勝てる様にどうにかしてやるから要件を言え。ってこと
？」

「そうよ。」

マジか。戦闘するの？別に殴る蹴るぐらいなら良いけどさ、呪い？
みたいなものどうやって勝つの？アレか、概念ごとブツ飛ばすって
奴か。

よし、なら・・・チートするか。

「じゃあさ。地球が生んだ真祖、星が作ったアリストテレス。って風にこの世界観って規模が大きくなると強くなっていくなきゃん？」
「まさか真祖に・・・いやアリストテレスにしるっていつの？」

呆れたように効いてくる幼女。所がどっこい違うのだよ幼女。

「・・・何が違うのよ。」

「なんだ、幼女発言にはツッコミ入れんのか？」

「そんなことどうでもいいのよ！！っていうかあんたも心読まれてることに何も感じないの!？」

「?特に何も。あつ、わざわざ声に出さないでもいいのかな?って感じるよ?でもしゃべりたいからしゃべる。」

「・・・あなたに普通の発言を求めた私がバカだったわ。・・・もういいから続けて。」

「ふむ。では、規模が大きくなる程って言うなら『宇宙を作った意思』が作る、人類の滅亡を防ぐ守護者ってのはどうだい？」

なんか幼女は口を開けて、アポーンと呆然としている。

「それってつまり・・・」

「まあ、とりあえず最強にしておいて?ってことツス」

「・・・正直言うと魂だけじゃなくて、世界の設定も変えないと

いけないから私の管轄外よ。」

「お？それって無理ってこと？」

「いや、世界の管理者に進言してみるわ。多分大丈夫よ。なにせあいつは世界の危機になるたびに私のところから魂を借りていくんだから。全く！」

ふむ。神様たちにも人（神か？）付き合いがあるんだな。

「じゃ、あいつに許可取って設定の変更が終わったらすぐに作成にうつるわよ。いったん意識を失うからね。」

「は〜い。」

「あと、魂をつくりかえたら人間の赤子の中に入れて成熟させないといけないから転生と言う形になるわよ。」

「え〜」

「文句をいわない！あとこの関係上、『宇宙を作った意思』が作る人類の滅亡を防ぐ守護者・長いわね。は、人間になるってことにしておくから心配しないでね？」

なんの心配があるのかわかんないけど・・・まあいいや。

「了解だ。問題ない。」

「・・・最後に、『宇宙を作った意思』が作る人類の滅亡を防ぐ守護者』は長いから

『大いなる意思の使徒』アポストロスでいいかしら。」

「了解だ。問題ない。（つつかどうでもいい）」

「（不安だ・・・果てしなく不安だ・・・）」

こうして私、晋吾は猫嫌いのアリンコ退治のため、異世界に赴くのであった。

「だからアリじゃないって言うてるでしょ！あんたほんとに分かってるの!？」

「肯定だ。問題ない。」

「（不安だ・・果てしなく不安だ・・・）」

プロローグ。変人、転生す。(後書き)

次はオリ主のステータスだとおもわれる。

変人のステータス（前書き）

f a t e 風ステータス。保有スキル多すぎ。しかも宝具がネタにし
か過ぎないw w w
チートだけど使えないのはギャグ物の宿命。しゃあないんや。

変人のステータス

名前 晋吾 しんご

属性 秩序・善

能力値

筋力 B + 魔力 EX

耐久 A + 幸運 B

俊敏 B + 宝具 EX

【保有スキル】

存在希薄 B：大きすぎる存在ゆえに認知されにくい。認知されても

胡散臭い存在に感じてしまう。

存在が大きい存在（真祖・アリストテレスなど）やカリスマB以上のスキル保有者には無効。

魔力放出C - : 武器ないし自身の肉体の『表面』に魔力を帯びさせることができる。発動には数秒かかり、身体能力の向上は望めない。つまり帯びさせるだけ

魔力硬化A : 自らの保持する魔力を固めることができる。その硬さはAランク以上の攻撃でないと破れない。

精神安定A + : いかなる状況にも取り乱すことはない。周りの人間にも絶対的な安心感を与える。

神性B - : 神が新たに作りし魂を所有する。肉体は人間であるためランクは半減。

【宝具】

大いなる意思の使徒^{アポストロス}

ランク：EX

種別：対人宝具

レンジ：0

最大捕捉：1

宇宙を作りし大いなる意思の使徒である証。能力解放時、幸運以外の能力が4ランクアップする。

全ての攻撃にアポストロスの起源である『始』と『終』を籠められているため『始』と『終』が同時に起こり、この矛盾から世界よりその存在を拒否される。

「貴様のようなのがいるから戦いは終わらないんだ！消えろ！！」

て感じ

はじまりのそら（ビックバン・ミゼン）

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1〜

最大捕捉：

宇宙の始まりに生じたエネルギーを相手に与える。その威力は語るに及ばず。と言うか、宇宙が出来るよ。

第1話 変人の弟。(前書き)

シリアスとか無理っす

第1話。変人の弟。

2度目の生を受け8年程の歳月が過ぎた。まあ幼少期なぞ基本走り回っているだけだが、この体マジでヤバい。

100m1秒とかそんなレベルとはではないが、今からでもオリンピックで世界記録つくれるよ。フルマラソンを1000m9秒間隔で軽く完走できそう。

42.195kmを1時間ぐらい。大手町から平塚に走っていくのに『どこ行くの?』『ちよっとそこまで!!』ってノリでいけるわ。

こんなチートボディで悪戦苦闘するのかと思いきや、案外力加減は容易であった。そのためにあの幼女はわざわざ赤子の中に魂を入れてくれたのかな?

まだアポロストロスとしての力(能力?)は試していない。つうか使っの怖い。いつ使うか?もう『アンリ・マユ』と対峙した時だけで良いんじゃない?どんなにかしらへんが。

まあ正直この体のことよりも大変なことが一点。

「ニイちゃん。」

およ?噂をすればなんとやらだ。バタバタと慌ただしく走り俺が寝ていたベットにダイビングヘッドをかます。

「バタバタ走んなくなっていったらどう?シロちゃんよ。」

「えへへ。」

ん。聞いてないですわ。

双子の弟であるシロちゃんは、気づいたらベッタベタのブラコンになっていた。どうしてこうなった……

前世では子供もいたし、始めての子供が双子だった我が両親が大変に思えたため、ついシロちゃんにあれやこれやとしてやってしまう俺。

聞き分けのいい良い子であったシロちゃんは、4歳になったころにはもう手のかからない子になっていた。

しかし、赤い髪毛が気に入らないから俺がペンキで黒に染めてやったらパキパキになっちゃって大泣きして

「ニイちゃんなんか大っ嫌い!!」

と顔を真っ赤にして怒ってたのに次の日にはニイちゃんニイちゃんと寄ってくるシロちゃん。何この子カワイイ。よしよしよしよし（ムツゴロウスタイル）

みたいなことを繰り返していたら、こんなニイちゃん子になってました。なんでや。

いじめるだけいじめて急に優しくする。

なにこれ調教？

と、まあ兄弟仲良く過ごしてます。でも10年後もこうだったら嫌

です。深紅のバラが咲いちゃうわ。

情ねっつの赤いバラ〜そしてジエ〜ラシィ〜

母親に作ってもらった朝食を美味しく頂き、今日は日曜日。よし、出かけるか。

「ニイちゃんどこ行くの？」

「ほよ？散歩ね。」

「じゃ！僕も行く！！！」

「ほな、いこか。」

日課となってる散歩と、ついでのついでのついので『アンリ・マユ』探し。まあこんなんで見つかると思ってないのですよ。

よって目的もなく歩き回る散歩だったりする。20kmぐらい歩いたこともあるよ。

家には近くの交番とか町中にある地図で、居場所を確認してから帰ります。日本でよかった！町中に交番や細かい町案内があるのは日本だけ！！

見慣れない景色を見るのとか好きなんですよ。ちなみにシロちゃんも僕の後ろをチヨコチヨコとちゃんといってきます。

小さい時から）と言つのも歩き始めてから（シロちゃんに合せて歩

く距離を増やしていったからか、アホみたいに健康足です。

たまに俺が衝動的に走り始めるので体力も6歳児のものではありません。シロちゃん、お前が日本の陸上界を支えるのだ！

話は変わるが、F a t e っっていつ始まるん？たしか主人公たちは高校生だったよな？

この間、タウンページで『エミヤ』を調べたら無かった・・・

なんやねん。他に覚えてる名前ないし・・・幼女に聞いておけばよかつたかのう？

なんとなく『ダメット』さんも探してみた。当たり前だが載ってなかった。残念。ダ キンならあったのに・・・

一日中歩き回ってご飯食べたらしロちゃんは眠くなっちゃってしまっただけ、船をこき始めたご様子。

「シロちゃん。そろそろ寝よか。」

「じゃ〜」

何この子カワイイ。

「ほな寝よか。」

「ふにゅ〜」

カワイイ寝顔で速攻で寝るシロちゃん。さて、今日も平和だった。明日も平和だろう。よし、寝よ。

目がされたら家が崩壊してた。具体的に言っと2階建ての家が1階建てになっていた。ふえ？何これ？

自分たちは2階に居たのだが、運よくベットごと物がない和室に落下したらしい。

周りを見渡すと火・火・火・火・火・火。まあ大火災な訳ですよ。全然平和じゃない。運がいいのか我が家は燃えてないようですが……

ベットの上のシロちゃんはいまだにスヤスヤとお休み中。おお、弟よ。お前は大物になるぞ。

「シロちゃん。起きて、シロちゃん。」

「う〜。おはようニイちゃん。ふえ？何これ？」

現状に対する俺と同じリアクションに血を感じた。

「家壊れちゃったの？」

「そうみたいやね。俺らは助かったみたいだけど……」

「！ニイちゃんあれ！！」

「ほ？」

シロちゃんが指差した所に目を向けると、何やらドロドロとした泥の様なものが近づいてくる。しかし、

「なんか恐る恐るって感じやな。」
「そうだね。」

何かにビビってる感が否めない。……とりあえず威嚇しておくか。

「ニャー……！！！」

泥みたいの（ビクウ！！）

一目散に逃げていく泥みたいの。はぐれメタルみたいだ。倒しておけばよかったかな？

「なんや、猫嫌いなんかい。」

「可愛いのにね。」

「ほんまニャー。」

「ニャー」

幸い家も燃えてないが、おそらく一階に居た両親は……。恐らく、助からないだろう。

俺は両親と言うよりも友人のような感覚だったからか、悲しい気持ちになるが、取り乱すほどではない。

しかし、シロちゃんは違うだろう。わざわざ教えて悲しませることなど俺には出来ない。

今の俺に出来ることは、シロちゃんを不安にさせないこと。だから俺は……

二人でにゃーにゃーと猫合唱をしながら救助を待つことにした。

「にゃーにゃーにゃーにゃー」
「にゃーにゃーにゃーにゃー」

side 衛宮切嗣

地獄とはこの事だろうか。

炎と煙で蔓延する死が目前に広がり、懸命な哀願、懇願、苦痛、悲鳴、叫びは耳にこびりつく。

こんな所に長くいれば、おそらくは気が狂う。

言峰綺礼により発動した聖杯は、この冬木の地に地獄をもたらした。言峰を撃ち、セイバーに聖杯を破壊させた後、自らの理念の元、生存者を捜していた。

『正義の味方』

幼いころに憧れた正義の味方になるべく、救い、そして殺してきた。

こんな大災害では生存者は望めないだろう。しかし、少しでも多くの人間を救いたい……

そんな思いを胸にこの地獄を走り回る。

「にゃーにゃにゃー」

「にゃーにゃー」

……なんだ猫か。猫？

怪しく思い鳴き声をする方に向かう。すると、二人の子供がいた。

「にゃーにゃー」

「にゃー……。やべ飽きてきたわ。」

「飽きちゃったの？じゃさ、わんわんやろっ。」

「やだ。犬嫌い。」

「え〜。」

平和だ・・・凄く平和だ・・・

S I D E O U T

猫祭りに飽きてきた頃、気づくと目の前に黒いコートをかきたおじさんがいた。

「助けに来てくれたん？」

そう聞くと目を見開いて驚き、すぐに元通りの後悔と希望が入り混じったような瞳に戻る。

「そうだよ。君たちを助けに来たんだ。」

「おお！やったぞシロちゃん、助かるぞ！！」

「やった〜〜。」

両手をあげて喜びを体で表現するシロちゃん。何この子カワイイ・・・

・・・

「・・・ここに長くいるのは危険だ、はやく離れよう。」

「分かったね。ちよつと待ってて今着替え・・・筆筒がないだ・・・と？」

「・・・ねえねえ、おじさん。」

俺が筆筈がないことに戦慄を抱いていると、シロちゃんがおじさんに話しかけている。

あつ・・・あの人見知りの激しいシロちゃんが自ら話しかけただど!?

「ん?どうしたんだい?」

「あのね・・・お父さんとお母さんも助けて欲しいの・・・」

おじさんは何とも言えない表情をしている。何やら、責任を感じているような・・・

「残念だが・・・この家には君たち以外の人の気配は感じない。」

「?お父さんとお母さんどこか行っちゃたの?」

「シロちゃん・・・」

俺はシロちゃんを抱きしめる。そうするとシロちゃんは気持ちよさそうに目を細める。

出来れば言いたくない。でも、ここで誤魔化してしまうのはダメな気がする。

覚悟を決める。この世界で得た愛すべき弟を悲しませる覚悟を・・・

「シロちゃん。お家、潰れちゃってるよね。」

「?うん。」

「お母さん達1階にいたよね?」

「・・・うん。」

理解したのか、体を震わせ目には涙が浮かぶが、奥歯を噛み締め、

ぐっと我慢するシロちゃん。

・・・強い子だね。シロちゃん。

「泣いて良いんだよシロちゃん。前に教えたよね？男が泣いて良い時は・・・」

「・・・愛する人を亡くした時と・・・ふっ・・・んぐっ・・・親を・・・うっ・・・ううーっ！」

シロちゃんの涙を隠すように恵みの雨が降り始め、この炎の地獄を浄化する。

この日から、衛宮切嗣とで会った日から、日常は去り、物語が始まる。

晋吾そして・・・士郎の物語が・・・

第1話。変人の弟。(後書き)

難産だった・マジで難産だった・・・
まあ、よい。乗り切った。次回は切嗣との会話。これ誰？って感じ。

第2話 変人と『魔法使い』（前書き）

止まらない勘違い。そして判明する驚愕の事実！・・・なんだそのことか。

第2話 変人と『魔法使い』

泣き疲れて寝てしまったシロちゃんを背負い、おじさん・衛宮切嗣と雨により焦土と化した町並みを歩く。

歩いている途中で切嗣さんのことは聞いた。曰く、『魔法使い』らしい。しかも『エミヤ』。主人公に関係あるのか？息子とか？でも髪黒いぞ？

しかし、魔法使いか。・・・確かこの世界には第一から第六の魔法があつたな。でも魔術師達が目指す最終到達地点だつたはず。

こんな簡単に魔法使いに会えるか普通？つうか魔法使いってFat eに居たっけ？そうか・・・イレギュラーってやつか。

「どんな魔法が使えるの？」

「色々使えるよ。」

色々使えるらしい。マジか。やべえなこの男。もしかして世界最強じゃね？俺が別に頑張らなくてもいいかもしれない。

後で『アンリ・マユ』倒してもらおう。てか俺ら保護してもらおう。この世界物騒だしな。

「そつえばどこに向かつてるのん？」

「僕が拠点としていた場所に向かうつもりなんだけど・・・」

「俺らは行く場所がないですからね。厚かましいですが、一緒に貰つてもええでしょうか？」

「いいよ。というかそのつもりだったし。」

第一関門突破！助けたからハイ、さようなら。だったら危なかった・・

こうして俺らは新都にあるという拠点に着いたのだが・・・。そこは安価なビジネスホテルといった場所だった。誘われるがままに中に入る。

703と書かれた扉を切嗣がノックすると、待ち構えたように扉が開かれ、一人の女性が立っていた。

美人なんだが、冷淡という言葉が真つ先に出てくるような顔。失礼極まりないのだが、そんな言葉がびつたりの女性だ。

女性が切嗣に視線を合わせると、切嗣は「終わったよ。」と一言言うだけで、女性の方もうなずくだけ。

何やこの空気・・・耐えられへん。

重苦しい空気に辟易していると、女性の方が俺を見てビククリした後、こちらをにらんでくる。な・・なんや怖いな姉ちゃん・・・

「ああ。彼らは僕が助けた子でね・・・」
「・・・」

ああ……なんか一層目つきが厳しくなってるわ。やめてっ、これ以上胡散臭い奴を見るような眼をしないでっ！

何故かは知らんがこの体になってから、始めて会う人のほとんどが俺のことを胡散臭そうに見てくる。なんて言うの？こう……眼の端がすっ……って細くなんねん。

なんや、俺がなんかしたんかい。存在が胡散臭そうってか？……やばい泣きそう。

「彼らをね。保護しようと思っただ。」

「……何故ですか？」

「彼らがこうなったのも僕が原因でもある。なんていうか……責任を感じてね。」

おお！マジか！！神は俺たちを見捨ててなかったようだ！！

「私はあなたの決定にどうこう言うつもりはありません。」

「……そうか。で……だ、君はどうする？」

「どうするって聞かれましてもね……」

「君たちには2つの選択肢がある。孤児院に預けられるのと、初めて会ったおじさんに引き取られるの。君達はどっちがいいかな？」

孤児院か……それもありだと思っが、なんかいじめとか酷いって話を聞いたことがあるから抵抗感がでかいんだよね。ハイパー偏見だけどさ。

一方始めて会ったこのおじさんは何と書いても……

『魔法使い』 何だよね。 『魔法使い』

大事なことなので2回言ってみました。ぶっちぎりでこっちでしょ。運が良ければ魔法教えてもらったりして……。そう上手くいかないか。

とりあえず返す言葉は決まってる。シロちゃんはまだ寝てるけど俺が決めちゃっていいよね？やはり子供だけじゃ衣食住は確保できないですよ。

「と、言う訳で宜しくお願いします。」

「・・・何がと言う訳なのか分からないけど、宜しく。」

こうして、俺たちは『衛宮 晋吾』『衛宮 士郎』になったのだった。

ん？エミヤシロウ？あれ？……………主人公じゃん。晋吾は目の前が真っ暗になった！！

気が付いたらホテルの一室から和室に変わっていた。ここ何処？

「気づいたようだね。」

体を起こすと切嗣がいた。切嗣曰く、その後俺は、疲労で倒れてしまったらしい。

いつ・・・言えない。シロちゃんが主人公であることに戦慄を感じていたらブラックアウトしてしまっただなんて・・・

マジかよ・・・あの厨二っぽい主人公が俺のシロちゃんだなんて・・・

・

やらせはせん！やらせはせん！やらせはせんぞー！！絶対に厨二にはさせん！

決めた。俺のシロちゃん教育方針。彼にはスポ根を目指してもらいたいもんだ。熱くなれよー！！

しかし、この俺が動じるなんて・・・俺の中ではシロちゃんはかなりの位置に居るらしい。・・・ってそうだ！！

「シロちゃんは!?!」

「大丈夫。隣の部屋でぐっすり寝ているよ。」

ほっ・・・よかった。ん？よくよく考えてみるとシロちゃんと離れて寝るのなんて記憶にないぞ？・・・別にシロちゃんだけがブラコンじゃなかったのか。俺も大概だな。

「二い・・・ニイちゃーん！！ニイちゃんどこー！！！！！！
ウワァー！！！！！！（大泣き!）」

「シロちゃ　　ん！今行くぞー！！！！！！」

らぶらぶだったたりする。

まあこうして切嗣・・・『親父』と暮すようになってから2週間が経つ。シロちゃんに親父と暮すようになることになることになると伝えたら、

「ニイちゃんと一緒ならいい。」

とのことなので、3人で暮らすことになった。戸籍とかの役所関係は親父がやってくれたようで、俺らは養子という扱いだそうだ。

よってシロちゃんと話しあった結果、『お父さん』と分けたいとのことなので、親父と呼ぶことに。

本来3人の家庭なのだが、いつの間にかにいびり立っている人物がいる。それは・・・

「こんにちはー あつそびに来たよー」

「やあ、いらっしやい大河。」

藤村 たいがー。その人である。

「むっ。何やら不穏な気配が・・・」

「気のせいッスよ。」

ばれてはいけない。なぜなら彼女は剣道4段の腕前。まさかの特段しかもこの間稽古を見せてもらったら、5段のおっちゃんを圧倒してた

いやいや、ドンだけだよ女子高生。それでいいのか女子高生……。
ぶつちやけいじられて突っ掛かるシロちゃんを見てみると、気が気でない。……やられそうになったら俺がシロちゃんを助けるんだ。

何故彼女が遊びに来るのかと言うと、切嗣に惚れてるのだ一番なのだが……実はこの家は彼女の実家・藤村組のものだったらしい。

そう……『組』なんだ。まさかヤのつく皆さまとお知り合いになるとは思わなかった。

しかも何故か知らんがやたらと気に入られてるし。何でやねん。まあ、顔は怖いけど気のいい人達ばかりだからええけどの。

それにしても気になんのわ。親父だわ。時々帰ってこんし、帰ってきたら帰ってきたらでめっちゃめっちゃ落ち込んでるし、今度聞いてみるか。

「と、言うことで聞きに来たで。」

「……晋吾は急にくるね。」

「思い立ったらなんとかや。で、どうしたん？なんかあったん？」

親父は苦笑いしながら、困ったような顔をする。

「・・・実はね。君たちのお姉ちゃんに当る子がいるんだ。」

「ほ？親父子供いたん？」

「そつだよ。」

「マジか。じゃ、なんでいないん？」

「実は・・・おじいちゃんが返してくれなくてね。」

どんだけ孫好きなおじいちゃんや。

「それで落ち込んでたん。」

「まっ、そんなとこだね。」

「なんや。親父、爺ちゃんと仲悪いんか。ようわからんけどもしかして婿養子つて奴か？」

「ちよつと違うけど・・・似たようなものさ。」

はー、なんかゴチャゴチャとした家庭の事情があるんかのー

「正直言つとおじいちゃんの家も魔法使いでね。ちよつと会えないように悪戯されてるんだ。」

「マジか。意地悪やな爺ちゃん。」

茶目つけあふれるってレベルじゃねえよそれ・・・あつ、魔法使いで思い出した。

「そつや。魔法。魔法や。」

「？」

「俺に魔法教えてください。（土下座）」

「・・・教えて欲しい？」

「むっちやくちャのめっちやくちャ。」

「・・・辛いよ？」

「痛いのはやや。けど丈夫やで？これでも我慢強いほうや。シロちゃんも。」

親父は目をつぶり、そうか・・・と頷き。

「じゃ、明日から魔法を教えてあげる。士郎も望んだら教えてあげるつもりだ。」

「おお！あんがと親父！！俺、頑張つて姉ちゃんを爺ちゃんから取り返したるわ！！そんでみんなで暮らそうぜ！！」

親父は今度は目を細め、何か幸せの風景を見ているかのように・・・

「ああ・・・そうだね。みんなで一緒に・・・」

微笑むのであった。

第2話 変人と『魔法使い』（後書き）

誤解を解く気は・・・・・・・・ない!!

第3話 変人の得物 (前書き)

剣とか槍とかではない。

第3話 変人の得物

「で、なにからやるん？」

「なにからやるんー」

「うーん。なにからやる？」

考えてないんかい。大丈夫か？この魔法使い。

今日から親父に魔法を教えてもらうことになったんだが、なにやら
幸先不安な予感。

「とりあえず、魔術回路を作るか。」

「適当やなおい。」

大丈夫か本当に……やはりシロちゃんには止めさせたほうが良
かったかも。

今日の朝、昨日親父がしてくれた話をしたら、優しいシロちゃんは
『お姉ちゃんを助ける！』と張り切っていました。

はじめ親父はシロちゃんに魔法教えんの嫌がってたんやけど、ニイ
ちゃんも習うんだから僕も習う！といって譲らないシロちゃん。

結局親父が、晋吾といれば遅かれ早かれ関わることになる。なら、

早いに越したことはないか。的なことを言って、二人とも教えてもらうことになった。

「で？魔術回路ってなによ？」

「魔術を扱うための擬似神経みたいなものさ。」

親父曰く、生命力を魔力に変換する為の「路」であり、基盤となる大魔術式に繋がる「路」でもある。

また、魔力を電気とするなら、魔術回路は電気を生み出すための炉心であり、システムを動かすためのパイプラインでもある。

回路を励起させ魔力を生成すると、人である体からは反発により痛みが生じる。

とのこと、長げえよ。普通に電気回路みたいなもんさー。で終わせよ

47

「まあ大なり小なり、みんな持つてるからね。まずそれを開くことから始めよう。」

「だから、どうやって開くんじゃ。」

「うーん。人それぞれだからこればかりは……。」

マジかよ……

「親父。」

「ん？なに？」

「言われたくないだろうが、これだけは言わせてくれ。……使

えんな。（失笑）」

「使えんな。（失笑）」

「がーん……。」

シーン

「あれ？」

「シロちゃん、シロちゃん。餃子じゃダメだよ自爆しちゃって。」
「あつ、そうか。」

「天津飯のことかぁ——————！！！」

「いいんだ。いいんだ。どうせ俺なんかニイちゃんの足元にも及ばないよ〜だ。」いじいじ

「シロちゃんー！ーん！ー！シロちゃん！別に魔法なんて使えなくても人間の価値は変わらないよ！ー！だから立つんだシロちゃん！熱く為れよ！もつと熱くなれよ！ー！」

「なんか魔術と違う道に行ってるように感じるは気のせい？」

結局シロちゃんは土蔵に描いてあった陣の上で、魔術回路を作るための瞑想をすることにしたらしい。

シロちゃんガンバ！！やればできる子なんだよ！！

そんなこんなで1年が経った。変人具合に定評のある俺は、周りも変えてしまふ才能もあるらしく、親父は大分愉快な人にかわった。

どのぐらい変わったかと言うと、久しぶりに会った久宇舞弥（冷淡な人。）姉ちゃんが

あの鉄仮面をひくひくと引きつらせていた。

やるな親父。俺、まだ舞弥姉ちゃんを笑わしたことないのに……
くっ！これじゃ関西人の名折れやで！

せやから、ひさつぶり〜って言ったたら目線で殺されそうになった。

絶・対・零・度！！

ちなみにシロちゃんはまだ魔術回路を作れてないらしい。でもこの間手ごたえを感じたって言ってたからもう少しだろう。

俺に至っては体の表面にユラユラと揺らめく魔力に向かって、動くなドアホ！って言ったたら固まった。

うん。俺も何言ってかようわからん。なんか魔力がかちんこちに固まっとなよ。

親父も舞弥姉ちゃんも頭が痛そうだった。え？なに親父？頭痛が痛い？さよでつか。

とりあえずなんかめっちゃ固まっとなよ。あと魔力放出って持つてる物も魔力を覆えることができるからその練習ばっかしてたわ。

始めのころは集中してへんとちゃんとできへんかったけど、最近はおげくとしながらも魔力で覆えることができる様になったんよ。

ここまで来ると、なんか一端のもんになった気がしてきたの、固くなるんやったら得物を持つてみたくなったんよ。

まあぶっちゃけ、たいがーの竹刀かけえって思ったからなんだが・
・
・

で、何にするかって考えたところ、

手に持てるもの+固い 鈍器+たまたま読んでいたルーキーズ バット+もつとごっつい感じがええって思い よって木製バットに釘を打つことにした。

「でけたーエ カリボ グ~~~~」
「なぜそうなる!!!なぜ!?!」

おっ、舞弥姉ちゃんに始めてリアクション取らせた。やったぜ!

第3話 変人の得物。(後書き)

とりあえず鈍器にしたかっただけ。品性の欠片もないWWW

第4話 変人とお金 (前書き)

今回は言うことはないが、あえて言うとしたら……

ヒヤッハアアーーーー!!!

第4話 変人とお金

我が得物を作ってからはや2カ月程が経とうとしていた。親父と暮すようになって早くも約1年と3カ月も経つ。

時の流れとは速いものだ。俺もこの2カ月でチートボディを駆使したバットさばきは様になってきた。が、いまだに道場の外で使わせてくれない。

まあ当たり前っちゃん当たり前なんだが・・・

ちなみにシロちゃんは魔術回路を作ること成功したらしい。親父はもっとかかると思ってたらしく、とても驚いていた。

シロちゃん曰く、はやくニイちゃんに追いつきたかったから頑張ってたって言っていた。ふっ、ついてくるがいい弟よ！と言ってみる。

最近の変わったことと言えば、親父から魔力放出は外では絶対に使うなって言われた。どうやら普通、魔力は簡単に放出できるもんじやないらしい。

捕まってモルモットにされたくないならば、よほどのことがない限り使うなって言われた。まあ、ほとんどの魔術師が返り討ちにあると思うがね？とも言われた。

ちょっと嬉しかったりする。

そして明日、俺は使えると判断されたらしく、姉ちゃんが捕まって

いると思われる所に行くんだと。

多分、本国・ドイツにある城にいると思うんだけど、まず日本にある別荘から行くらしい。

・・・さつき城って言ったよな？キャツスルバラの花。アルカリ土類金属ですねわかります。

シロちゃんはお留守番。まだ魔術回路しかつくてないしね。親父から強化の魔術を教えてもらったので、それを修行するんだってさ。つうか魔術か。あれか、魔法の前にまず魔術を習得せいへんで行けへんのか。いきなりメラゾーマはできへんってことか。

でもバーン様みたいにメラを極めるのもカッコよくな？ってシロちゃんはやんは言ってた。アレですね。

今のはメラゾーマでない。・・・メラだ。

やべえシロちゃんマジかっけえ。

ちなみにたいがーに親父がシロちゃんの面倒を頼んでた。・・・ガンバレシロちゃん！たぶん世話するのはシロちゃんだろうがガンバレ！！

んで、別荘とやらに來たのだが……

「親父。」

「なんだい晋吾？」

「アレはな・・別荘やない。城や。キャッスルや。つうか何でこのご時世に城を二つも持ってんねん。魔法使いつて何なん？アホなん？」

とつてもいい城が立っていました。シロちゃんに伝えてくれ。アレは良い城だー！！

「ここら一带にはね。結界が張られているんだよ。」

「結界？」

「何かを守ってるようで怪しくてね。畏の可能性のほう大きいけど……」

どこにアンの？と目凝らしてみると・・なんか光の壁みたいのが見える。なんやこれって思いながら触れてみようとするも、手は空を切る。

「ほ？なんやこれ？」

「アハト爺特製の迷宮結界さ。それを超えると絶対に奥に辿り着けない迷宮に入ることになるから気をつけてね。出るのにも一苦労さ。」

マジか。うーん。結界かー。よく漫画とかで魔力で結界を壊す的なやってたから、それに習ってみるか。

よし、それじゃ得物だそう。得物。

「エス リボ グ〜」

「・・・その名前やめない？」

「その要望は却下だ。」

ゴルフクラブケース（バットケースだと釘がつつかかる）から取り出した

釘バットの聖剣・エス リボ グを構え、魔力を覆い、硬化する。

「ブエー、ブエー、ブエーブエーブエー、ブエーデブエーデデデブエーブエーブエー。バースかつ飛ばせバース！ライトヘレフトヘホームラン！！」

と、結界に向かってフルスイング。チートボディによって振られたその一振りは、小さな暴風と化し、城を覆う木々を薙ぎ払い。

そして結界に当たる瞬間、晋吾はリストに手ごたえを感じる。

こいつは行けるで！場外や！！

的外れなことを思いながら、下半身から腰、腕、リストを連動させたそのスイングは、世界のイチローを見つけた三輪田スカウトにして

「1000年に一度、いや10000年に一度の逸材」

と言わしめるのであった・・・妄想だけ。

結果として、結界は壊れた。親父はなんか納得してない様子だったが

「過程なぞ、結果がついてくればどうでもいい。」

といたら、そうだね。と妙に納得していた。・・・可笑しいな、詭弁のつもりだったんだけど。だれかツツコミ役が欲しいっす。

でも俺の勘が姉ちゃんはツツコミ役だと言っている。よし！さらにヤル気出てきたわ！待ってる姉ちゃん！！

side イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

びくっ！！

なんかすごく嫌な予感したんだけど・・・

すごい幸せなんだけど、すごい頭が痛くなりそうな何かがあるようなそんな予感。なんだろうこの感じ・・・

・・・キリツグ？なにかあったのかしら？

まあ、スツゴイ変な家族ができたのだが、予知能力のない彼女は知りえるはずがないのであった。

S I D E O U T

んで、結界を壊して中に入れるようになったが、姉ちゃんはいない様子。やっぱり罨だったらしい。マジか。空振りかよ。

手ごたえ場外やったんやけどな。

「親父、姉ちゃんは今結局ドイツにいるんやろ？いつ行くん？」

「そうだね。今すぐ行きたいところなんだけど・・・」

？なんかあるんかい？

「実はね。お金がないんだ……」

それはなんとも切実な話しで……

「……密航でもするか。」

「何こいつ怖い……」

ついていく相手間違えたかも……

親父曰く、お金はいつも現地調達で、なくなったら稼ぐが基本らしい。今までは奥さんの家が支援する形だったが、もう給金が止まっているとのこと。

「現地調達って……なにするん？」

「そうだね。僕は専ら……」

そういつて親父は懐に手を忍ばせ……

「これで稼いでいる。」

ゴトゴト……

・・・知っている。俺は知っているぞ。このフィルム・・・高校の時に友人に見せてもらったことがある。こいつは・・・

キヤリコム950

サブ・マシンガンで、稼いでいる。

汚物は消毒だー！！ヒャーハアアアアアア！！

切嗣がやってるのを妄想している。かなりハマっていて二重の意味で危ない。

うん。とりあえず殴ろう。

「しっ・・・晋吾っ。どうしたのかな？いきなり魔力放出始めて・・・」

「人の命を食い物にする屑が！そこになおれ！！こんな大人あ・・・修正してやる！！」

「ダメだよニイちゃん！こんなところでやったら色々とび散っちゃうよ。外でやってよね。」

「舞弥助けてっ！」

「・・・残念ですが否定できません。」

このあと舞弥姉ちゃんの「お前が全力で殴ったら修正もくそもない。むしろデリート。」

との言により、出力2割での北斗残悔拳にしてやった。指はメリ込まなかったけど、めちゃくちゃ痛そうにしてた。

はっはっはっはっ、
ザマアナイゼー。

第5話 変人と魔法使いという名の『テロリスト』。(前書き)

人によって、感じ方は変わると思うが、とりあえず断った方がいいと思うので……

撲殺注意報。発令します。

グロ系に弱い人は想像しちゃ、ダメエ！だよ？

第5話 変人と魔法使いという名の『テロリスト』。

「え、第一回衛宮家家族会議を始めたいと思います。」

「・・・なんで私まで・・・」

「いや、舞弥姉ちゃんも家族みたいなもんじゃん。」

「・・・」

何故かダンマリになる舞弥姉ちゃん。なんや？ポンポン痛いんか？

「何があつたのニイちゃん。」

「実はだねシロちゃん。・・・今、衛宮家は、経済的ピンチに立たされている・・・」

ゲンドウスタイルでシロちゃんに答える俺。ノリのいいシロちゃんは、ゴクリと固唾をのみ込む。

切嗣曰く、人を助けるために戦場で人を殺し、傭兵チックなことで生計を立てていたとのこと。

拳句のはてには『僕はね、正義の味方になりたかったんだよ。』とかほざく始末。

「間違えている！間違えているぞ切嗣！！」

「どっ・・・どうしたんだい？」

「人を助けるのは正義の味方ではない！人々を助け、人々に安心と平穏を与えるもの。人それを・・・救世主という！」

「なっ・・・なんだって？じゃ僕は・・・」

両手で顔を塞ぎ震え始める親父。ノリいいなオイ。あと俺適当だよ？真面目にきいちゃだめなのらう。

「そういえば親父ってどんなのが正義の味方って思ってたの？」

「うーん。・・・そう言えばよく考えたことなかったかも。みんなを助けるのが正義の味方とか英雄とか言うのかと思ってたのかな？考える前に絶望してたのかもしれない。そんなものはないって。」

英雄ねー。ようわからんけど

戦いの虚しさ知らぬ愚かな者達よ・・・戦いは愛する者達を助けるためにのみ許される。その勝利のために、我が身を捨てる勇気を持つ者。人それを・・・英雄という！

ってロム兄ちゃんは言ってたなー。やっぱりカッコいいぜ。流石はクロノス族族長。

「まあ、親父の夢とはどうでもいいとしてだ。」

「ヒドイ！」

「とりあえず人を殺さない方向でお金を稼ごうと思うのだが・・・舞弥姉ちゃん。なんかない？」

「・・・なぜ私に聞く。」

「え？だって親父の仕事手伝ってんでしょ？なんかいい案ない？」

「……………」

みんなの視線が姉ちゃんに集まる。姉ちゃんは少しうろたえたが、持ち直し、思案したのち、こう答えた。

「切嗣の能力で、人を殺さず稼ぐとしたら、一番いいのは・・死徒狩り、もしくは退魔とかではないでしょうか？」

「やはりそうなるか……………」

親父はなんかすごく嫌そう…………

「死徒は人間と違って、簡単に殺せない。拳銃で頭を打っても爆破しても死なない奴だっている。」

「なにそれめんどい。つうか死徒って何？」

「死徒は吸血鬼のこと。元々人であった者が、真祖もしくは他の死徒に噛まれ吸血されたことで変異した吸血鬼。それが死徒。」

「厳密に言えば、『血を吸われた』結果に死徒となるわけではなく、吸った相手が『血を送り込んだ』後に死徒化するんだけどね？」

「すまん。親父よ。果てしなくどうでもいい。ようするに吸血鬼でしょ？それでええやん。」

「と、まあ結局死徒狩りをする羽目になったわけですね。退魔ってのはとりあえず止めとくらしい。」

日本には退魔四家ってのがあって、場合によっては挨拶に行かないといけないからだそうだ。

なるほど、スジをとおせ。ってことですね。退魔四家はヤのつく家系なのか。なるほど、覚えておこう。

今回も俺はついて行っていいらしく、親父曰く、早めに戦場を知っておくのはいいことらしい。

よかねえよ。どうやら親父の思考回路は、世紀末の人間らしい。やはり消毒しておいたほうがええやろか？

出発は明明後日。場所は北海道。デツ海道。

いいタイミングで日本での死徒討伐の依頼を貰えたらしい。交通費は依頼者が出してくれるそうだ。

シロちゃんは今回もお留守番。舞弥姉ちゃんが魔術教えてくれるって。おれ？遠慮します。

魔法使いの話はようわからん。概念的で抽象的なんが多すぎるんや。凄い・・5倍以上のエネルギーゲインがある。とか、目に見てわかるように、また、論理は分らんが奴に、聞かれたら

安全面とかの関係上、どうなっているかを簡潔に他人に分からせないといけない俺みたいな技術者とは相いれないね。

全くの余談だが、エネルギーゲインはエネルギー利得のことです。はい。どうでもいいですね。

まあ、魔術は逆に人に分からせちゃいけないのだが……やはり相いれないな。とか語ってみるが、ぶっちゃけ面倒なだけである。

「晋吾……」

「なんや親父。」

「やつぱり……そのバット持つてくの？」

「当たり前やがな。」

親父曰く、僕が言えた義理じゃないけど、魔術師としての品性が足りないとのこと。

いやいやいや。死徒ぬつ殺しに行くのに品性も糞もないわ。へ？鉄パイプとかでいいじゃないかって？

モチベーションの話ですよ。そっちの方が品性に欠ける。ただの世紀末暴徒じゃん。この聖剣を持つと誰かを撲殺しろって囁くんですよ。

「それって魔剣じゃない？」

うるさい親父。俺が聖剣だっていたら聖剣なんだよ。だって天使が持ってたし。

うだうだ駄弁りながら電車を乗り継いで空港に着く。釘バットはゴルフクラブケースにいれ、親父の重火器と一緒に運搬するらしい。

こういうのを見ると、日本の警備ってどうなん？と思うが、魔法使い相手ならしゃあない。分が悪すぎるでしょ。

依頼の内容は、北海道の教会からの依頼で、死徒の噂が広まっているので調査と、見つけ次第討伐を頼まれている。

本来は代行者とか埋葬機関（こっちは稀。キチガイのエリート集団らしい。なんだそら。）が出張るのだが、ここの牧師さんが嫌つとるんやて。そんなんでもいいのか教会。

舞弥姉ちゃんの調査によって存在と居場所は確認されているので、あとは狩るだけってところ。ここまではいいが、数体グール、さらに吸血鬼化しているものもいるらしい。

死徒にかまれるとグールになってしまう。もう犠牲者は出てしまっている。

グールは欠けた肉体を取り戻すために周囲の死体を喰らい、失った脳の変わりに幽体での脳を形成、知能を取り戻す。これにより吸血鬼と化す。

とのことなので、これ以上被害を出さないためにも殲滅しないといけないとのこと。

うん。責任重大や。きっちり殲滅させて貰います。

飛行機での空の旅を満喫したあと、北国についたらすぐさま仕事モードに入る親父。観光の空気も出さずに荷物を貰い、タクシーに乗り、死徒がいるという町まで走る。

「なんや親父・・・カツコええやないか。」

居場所は山の中にある廃棄されたペンション。吸血鬼らしく陽の光が苦手なので、昼間はここを根城にしているとのこと。

教会側の素早い情報操作により、人の目は心配ないそうだ。

「さて、いくぞ。準備はいいか？」

「おう！いつでもいいで！！！」

ケースから得物を取りだし、魔力放出・魔力硬化を終えた状態で声をかける。

「そうか・・・。」

親父はそう呟きながら懐から何かを取り出した。

「？なんやそれ？」

「スイッチだ・・・。」

「なんの？」と聞く前に親父はそのスイッチを・・・押す。

・・・ドオオオオオオオオオオ！メキメキメキメキツ！！

「・・・」 開いた口が塞がらない晋吾。

「よし。行くぞ晋吾。」

二階の壁が吹っ飛んで一階建てになるペンション。・・・こいつ、ほんまに魔法使いか？

75

「バットも振りにくいだろう。地下のワイン室は私がやる。一階はまかせた。」

「まかせ。」

親父と分かれ、一室一室を確認して回る。なんや、バ オハザードみたいやなこれ。・・・親父はリアルバ オやな。銃つかつとるし。

さて、俺はバットで頑張りますか。むん！怖くないよ？全然怖くないよ？自分でリアルバ オとかいって怖くなつてなんかないよ？

「アアアアアア!!」
「ギャアアアアアア!!」

ブウン!ボグウシャア!!

「ウウウウウウウ」
「ニャアアアアア!!」

ブウン!ボグウシャア!!

「オオオオオオオ!」
「死んじゃええええええ!!」

ブウン!ボグウシャア!!

本来は魔術礼装や概念武装といった物でないと倒せない相手なのが、晋吾は

ホワイトアツシユ素材採用、SSKリーグチャンプ小売価格8925円+釘1本12円×20本+足がつかないように塗った黒いペンキ3000円

というなんとも安上がりな武装で、すませてしまふのであった。

チートによる筋力B+の力で振られ、Aランク以上の攻撃でしか破れない魔力硬化で覆われたバットによる一撃は、まさに一撃必殺である。

いかに吸血鬼と言えど、うん、まあ……無残というか下品というか……そんな死体をさらしている。

こうして晋吾の初陣は、ゲール・死徒含め6体を関係者から見れば頭が痛くなるような方法でゲロみたいな死体を作り、終了したのであった。

第5話 変人と魔法使いという名の『テロリスト』。(後書き)

今回の話は自分的にはキレがまいち。

次話は舞弥姉ちゃんが主役のお話。しかし、ちよつと私事でバタバタした用事があるため、明日更新できなければ水曜か木曜になっちゃうね。

できれば明日できるように頑張ります！

第6話 舞弥と変人。(前書き)

今回は舞弥姉ちゃん視点。

感想でツッコまれていた一部解答みたいな回。

第6話 舞弥と変人。

切嗣と晋吾が死徒狩りを始めてから3カ月が経つ。一か月に一度のペースで仕事をこなしていったのだが……

「舞弥姉ちゃん。」

「……なんだ」

「親父マジで使えねえ。」

……らしい。

初めての仕事で晋吾は自らは無傷で死徒2体、リビングゲッド1体、グール4体を撲殺する
といった驚くべき戦果をあげた。

対して切嗣は、切嗣の指示で私が仕掛けた爆弾で二階を破壊。しかし残念だが壊したただけで死徒もグールも倒していない。

地下でグール2体を相手にしてなんとか倒したが、
晋吾に瀕死の姿（無理して魔術回路を使ったとのこと）で発見させ

たらしい。

・・・頭が痛い。所詮テロリストということか。壊すことしかできん。

こうして2回目の依頼をこなした後、晋吾に

「親父はこんでええ。俺がやるから。」

と言われ、非常に淋しい背中をしていた。・・・つい、お父さん頑張つてえ！と思つてしまった。

晋吾は本当に不思議な子だ。始めて切嗣が連れて来た時はほんとうに驚いた。

一命を取り留めた私は、ホテルで切嗣を待っていた。

ノックする音に安心し、切嗣を向かえ、聖杯戦争終了の報告を受けて頷くと、視界の端に

宙に浮かぶ赤毛の子をみた。

驚きそちらの方に視線を向けると、先ほどまで映っていなかった同じ顔をした黒髪の子がその子を背負っていた。

魔術師である可能性を浮かべ、警戒した視線を向けると、切嗣が彼らを保護すると伝えてくる。

正気を疑った。こんな『胡散臭い』ものを保護するという切嗣の正気を。しかし、切嗣はもう保護することを決めている様子だったので、私は何も言わなかった。

二人を家族をするために多額の金を使った。まず、彼らが被害のあった町に住んでいた記録を全てなくした。次に親権や戸籍などを新たに作った。

何故そこまでして保護する気になったのか理解できなかった。しかし晋吾の異常性に気づいた今、それも仕方なしだとは思っている。

次に会った時もいつの間にも士郎の隣にいた。正直、なにか魔術でも使っているのかと思ったが本人は魔術自体を知らない様子。

そして3度目に顔を合わせた時、彼の異常性を理解した。・・・その膨大な魔力。

あの聖杯戦争に参戦していたどのサーヴァントよりも膨大な魔力。人間であるのかも疑うレベルであった。

切嗣は、それに気づいていて、彼を認知することが難しい理由が、このあまりにも膨大な魔力であることを推測していた。

人の認知を妨げるほどの膨大な魔力。聞いたこともない。なにかの

冗談かと思った。

切嗣は彼ら兄弟に自衛の策を与えるべく魔術を教えることにした。

彼の異常性に戸惑う私だったが、晋吾は休ませてくれない。今度はあのバカは……

魔力放出なんぞしてくれたからに。あほか？あほちゃうんか？

……あの方便はすぐうつるから困る。

拳句のはてには私が見ている目の前で、「動くなドアホ！」とか言
って魔力を硬化させる始末。

思い出すだけで頭が痛くなる。……最近は士郎がくれた半分が
やさしさでできている頭痛薬の存在ありがたい。

そして得物とやら。やめだ。止め止め。人生初のツッコミとやらを
してしまったエピソードを

思い浮かべてそっこいでゴミ箱に投げ捨てた。

……私も変ったな。

思わず遠い目をしてしまう舞弥であった。

裏方に回った切嗣とともに依頼の受諾と偵察を兼ねて九州に来ている。晋吾と士郎は共に留守番。

「しかし、守ろうとした者のに雑魚扱いされるとは思いもしなかったよ。」

「……切嗣はいつから気づいていたのですか？」

「何に？」

「晋吾のことです。」

「町からホテルに向かう際中にね。あの廃墟と化した町の中で普通にしてるんだもん。」

何かあるなと思ったら……。」

……有り過ぎだったと言うことが。

「……しかし切嗣。死徒を余裕で、とは思ってませんでした。グールにも後れを取るなんて……。」

「んー晋吾達には内緒にしておいてね。実は……僕の魔術回路、ほとんど動いてないんだ。」

体も動きにくいし、あの聖杯のせいかな？」

「なあ！？じゃなんで死徒狩りなんてやろうと思ったんですか！？」

「いや、晋吾もいるし、なんとかかなーって。」

ダメだこの親父。こんなにダメな奴だったけ？……あのコ達は私が守ろう。うん。特に士郎。

晋吾は別にほつといっても大丈夫でしょ。

今回の仕事でドイツまでの二人分の旅費や、帰る時の3人分の旅費、

これからの5人分の生活費数が月分などが揃う。

晋吾も士郎も、そして切嗣、私でさえも、アイリスフィールの娘を迎えることを楽しみにしている。

晋吾と士郎は『おかえりイリヤ姉ちゃん』と書かれたくす玉を作っていた。

あの少女が、この二人と出会いどのような反応をするのが楽しみで仕方がない。

願わくば、私の頭痛の肩代わりをしてもらいたいものだ

晋吾がいるとホツとする。そんな安心感、温かさを与える何かをあの子は持っている気がする。

でなければ私も切嗣もここまで気を許さないだろう。戦場を知ったものはどうしても人を信じられなくなる。

だが切嗣にいたっては緩みすぎだ。あれでは単なるダメ親父ではないか。

「舞弥ねえちゃん。飯できたで。今日はシロちゃんが作ったんよ。」

「そうか。今行く。」

「シロちゃんはな。お母さんの手伝いをよくしてな。めっちゃめっちゃ料理上手なんや。きつとビックリするで?。」

「そうか。楽しみにしておこう。」

今までなら、このように足を止め、座り、両手を箸と茶碗で塞ぐような食事を取ることですらないだろう。

しかし、この騒がしくも温かい食事がほんとうに楽しみになったりする。

切嗣の部品でしか思っていなかった自分。しかしそれが間違えであることに気づき、『人』になった。

そして、晋吾や士郎といった人の間に挟まれ、『人間』になっていく自分を感じる。この『人間』になっていく感覚が・・とても温かい。

「こんにちはー!!」

「やあいらっしやい。大河。」

「うわ。今日も来よった・・・」

「なにか言った？晋吾？」

「なんでもありませんがな。」

この騒がしくも温かな時間がいつまでも続くことを・・・

「うっ!」

「あっ、すまん親父。それソースやったわ。」

「ちよつと晋吾！何してんのよ!!切嗣さん大丈夫ですか？」

「大丈夫や。ソースは食べれる。」

「ニイちゃんニイちゃん！これ食べた？」

「おお、上手いぞシロちゃん!」

「やった!」

「ピーマン嫌い……」

「子供か！？親父子供か！？」

「野菜も食べないとダメだよ？」

「虫とかなら食べれるのに……」

「きめえ！親父きめえ！！」

「親父。それはないよ」

「がーん！」

「私もちよつと引いちゃうな……」

「……いつまでもはちよつと勘弁かな？」

第6話 舞弥と変人。（後書き）

晋吾の精神安定A+のおかげなのか、頭のネジがどっか逝っちまったキリツグ。

前線で晋吾がかき乱し、2列目の土郎とイリヤが時に前線に、時に後衛に活躍し、3列目のキリツグが遠距離射撃。最後尾の舞弥姉ちゃんの手綱をとる。

こんな我が衛宮家ですが、これからもよろしくお願いします。

・・・笑いの話ですよ？

第7話 変人と姉。(前書き)

ようやくロリブルマ登場。その前にあの人がチヨイ役で登場。

第7話 変人と姉。

東に赴き撲殺し、西に赴き撲殺し、北に赴き撲殺して目標資金にあ
と少しのところまで来た。

今日は舞弥姉ちゃんと一緒に九州で仕事。この仕事をこなして俺は
東西南北を制することになる。

よし、あと中央もこなしてスーパーアジアと名乗ろう。

ちなみに親父は使えんから置いてきた。

出てくるときすっごく淋しそうにしていた。でもシロちゃんに励ま
されてたから大丈夫でしょ。俺だったら超元気出る。

「晋吾。今日の依頼は分っているな？・・・ひとりで平気か？」
「大丈夫やつて。前回やつて一人やつたし。」

舞弥姉ちゃんのはめちゃめちゃ心配してくれて、ちょっと嬉しかった
りする。

死徒・・・てかホラーな状況にもなれ、落ち着いて撲殺できる様にな
ったこの頃。どんな状況にもパニックにならない自信はあったが、
怖いものは怖い。

でももう怖がつてはやらん！！今まで恨みも含めて、今日も撲殺さ
せてもらいます。

いつものように廃墟と化している建物の中にいると言つ死徒。普通に正面いる口から入って見つけた奴から撲殺していく。

ブウン！ボオグシャア！！ブウン！ボオグシャア！！

とつとと済ませて帰ろうとすたすた進んでいく。

「た・・・助けてくれー！！」

とそのとき助けを呼ぶ声が聞こえる。

「？誰かいるんか？」

声のする方に向かうと

「た・・・助けてくれ。死徒に殺される・・・」

「何言ってるんやおっちゃん。」

「な・・・何って・・・」

「自分死徒やん。」

「なっ！？」

ブウン！ボオグシャアアア！！

はいはいどんどんいくよー。

まあ、このようにあの手この手を使ってくる死徒は居るけど、何故だが知らんが死徒か人間かを判断できる。

判断基準としては、見た瞬間、「死徒だ殺そう」と思うことだ。おそらく、『人類の滅亡を防ぐ守護者』の設定がそうさせるのではないかと思う。ハイパー適当やけど。

ちなみに今までの死徒狩りのほんの一例だが、霧？みたいになってる死徒にも「なに遊んでんねん」て撲殺して（なんかできた。）

なんか知らんが高笑いして「私を殺しに来ただと！？」と言う奴に「うん」とニッコリ肯定して撲殺し、

「私の目を見る！！」といってくる奴に対して「きめえ」の一言とともに撲殺してきた。

死徒は高い再生能力と、身体能力を持つらしいがチートの俺にはあまり関係なく、異能に関しては先ほど言ったギアス使いつぽいのしか会ったことがない。

だつてみつけたらすぐにやっちまうからのう。一見必殺や。

……会つても効かんかったけどな。なんでや。

「……凄まじいですね。」

廃墟に居た死徒どもを撲滅し広いフロアで少し休んでいたら、青い髪のススター？みたいな人がいた。

誰やねん。

「噂を聞いて来てみましたが……なにをどうやったら死徒を、このような醜悪な死体に変えることができるのでしょうか？」

このバットでフルスイングするんよ。ブンブンとバットを軽く振るが気づいてくれない。なんでや。ちょっと遠いが目の前にいんのに。

「……とりあえず報告ですね。」

そう言うと走つてどこかにいってしまふススター（仮）。なんでや。淋しいやないか。報告つてどこに〜？

「舞弥姉ちゃん終わったでー。」

「……そうか。」

舞弥姉ちゃんが待つホテルにつき、終了の報告をすると、どこかホツとした表情を浮かべ頷く姉ちゃん。

「心配かけてすまんの。」

「いや、晋吾なら大丈夫だと信じている。それに、この間大河と互角に戦っていたしな。」

その話か……。道場でバット振ってたら、たいがーに「剣道やってみない？」と言われ、やってみたら、何故か始めて1カ月後のある日。たいがーと試合をやることに

いやいやなんで有段者と始めて1か月で試合せなあかね。と思いながら何故か始まってしまう試合。痛いのいやや。と避けまくっていたら。

「勝敗が決まるまで終わらないから。」

とほざくたいがー。ならワザと負けるか。と思っただが、たいがーの背後に映る虎にビビって反撃してしまう俺。何故か一本取ってしまう。

ここからたいがーによるリンチが始まった。みんなは互角に戦ってたというけど、アレはリンチや。だって俺反撃できへんかったし。本気でやるとたいがー死んじまうし

身体能力チートでも確かに技術の差はデカイ。でも、攻撃はそうでもない。だって死徒が避けれない速度&撲殺される威力。やで？

おっ！死徒で思い出した。あの青髪の姉ちゃん『死徒』やん。・・・
あれ？なんで殺そうって思わへんかったんや？

・・・なるほど。変な死徒なんやな。そうか・・・俺と『同類』か
！！

こうしてシエルは、晋吾に変人？仲間と思われることになるのだが、
いい迷惑である。でもまあ、シエルだし。

長い道のりやったけど、ようやくドイツにいけるようになり、切嗣
の案内でついでに行く俺。なんやけど

「なんでこんな雪ばっかなんや。」

「一面雪だらけ。だめや・・・我慢できへん。」

「ほいやー！」

「いてっ」

歩きながら雪合戦を開始する俺ら。緊張感？なんで緊張せなあかん
ね。姉ちゃん迎えに来ただけやで？

「晋吾。あれだよ。」

「おお〜」

これまたいい城が立っている。全く、名家ってやつは。そして城の近くまで行くと、これまた光の壁がある。

「先生。宜しくお願いします。」

「まかせ。」

いつものようにフルスイング。以前と同じように壊れる壁。

「ふつ。いい仕事したぜ……」

「お疲れ様です。先生。（こんなんで結界壊されたと知ったらアハト爺死ぬんじゃね？）」

城の中を我がもの顔ですんずん歩く親父。おいおい。ちゃんと挨拶とかせなあかんやろ？

「イリヤ!!」

パン!つと勢いよく扉を開け中に入って行く親父。おいおい、テンションたけえな親父。追って俺も部屋に入る。

「キ……リ……ツグ?」

「そうだよイリヤ。」

入ってみると、これはいい幼女。なんや姉ちゃんやないやん。あつ、そうやった。俺らまだ小学生やった。最近サボってばっかやから忘れてたわ。

「近寄らないで！！アインツベルンを裏切った裏切り者！！」

「違うんだイリヤ……」

「何が違うって言うの！？だったら何故聖杯を破壊したの！？」

聖杯って何？ああ、アンリマユの巢か。なんやもう破壊したん？流石や親父。へたれへたれと思うてたけど流石魔法使いつてやつやな。

「あれは聖杯ではない。聖杯は……汚れてしまった。それをアハト爺に伝えるためにも来た。」

「汚れている？」

「ああ。今からアハト爺と会ってくる。それまで……待っていてくれるかい？」

姉ちゃんの頭の上に手を置き、撫でると気持ちよさそうに目を細める姉ちゃん。

「じゃ、晋吾もここで待っていてくれる？」

「おお、ええで。」

「晋吾？」

「ああ、そうだった。」

何かに気づいたように手を打ち。俺の手を引いて姉ちゃんの前に連れてくる親父。

「この子ともう一人、孤児になってしまった子を養子にしてね。晋

吾・・・」

「おう。衛宮 晋吾や。姉ちゃんよろしゅうな!！」

ビクッ!と驚き、俺を凝視する姉ちゃん。なんや。照れるやないか。

「ねえ・・・ちゃん?」

「コテン。と可愛らしく首をひねる姉ちゃん。なんやこの生き物カワイ過ぎやわ。」

「じゃほほー!！」

「きゃー!！」

可愛すぎる姉ちゃんにテンションが上がって、姉ちゃんを高い高いして肩車する。

「何するのよ!！」

「すまんすまん。でもほら、二人合せて切嗣と同じやで?」

と、言うと親父と目線を合わせ、少し嬉しそうにした後、親父の頬をギョウツとつねり。

「いいわ。後できつちり理由を聞かせてもらいから、この場は許してあげる。」

「ありがとう・・・イリヤ。」

親父が爺ちゃんとサシで会いたいらしいので、二人で大人しく待つ・・・はずがない。

「ちよつと、キリツグは部屋で待ってて、って言ってたでしょ？」
「なに言ってるんや姉ちゃん。城やぞ城。探検するに決まってるやないか。」

探検？つとまたもや可愛らしく首をひねる姉ちゃん。と言ってもまだ肩車はしてままだので、顔は見えない。

「ええか姉ちゃん。姉ちゃんはこの城に何があるか全部しつとるん？」

「うーん。全部は知ってるわけじゃないけど・・・」
「知りたいやる？」

「・・・知りたい。」
「よろしい。ならば探検だ。」

こうして、アインツベルン城探検隊が結成されたのだった。

第7話 変人と姉。（後書き）

死徒の判断の話で補足、厳密に言うと、人間の大量殺害を起こすだろ。死徒。

滅亡を防ぐためのアポストロスだが、元々の目的は魂の管理が円滑に進ませるために作った存在。

そのため、魂の管理者（最初の幼女）の負担をなるべくなくそうとしよう。

ちなみにシエルさんに対しては人間を狩る側でないと判断した結果。

ここまで自分で書いといてなんだが、オリ設定乙。と思ってしまった。

シエルさんを出した理由は月姫編やメルブラ編もやってもいいかな
〜と思っていたりするため。まあ、所詮予定は未定であるのだが・
・

第8話 変人とアインツベルン。(前書き)

自分で書いといてなんだが、思わず

イリヤ・・強く生きる・・

とか、

爺ちゃん頑張れ

って思ってしまった。

第8話 変人とアインツベルン。

城を二人でうろろして扉があれば片っ端から入っていく。まあ、肩車しているためうろろしてんのは実質一人だが・・・

「ここは？」

「お母様の部屋よ。今は使われてないけど・・・」

「ここは？」

「客室かしら？」

「こんなところに客とかくるんかい。」

「さあ？お爺様の客だから私は知らないわ。」

「隣の客はよく柿食う客だ。」

「何ソレ？」

「日本語の早口言葉じゃよ。」

一応二人がしゃべっているのはドイツ語。晋吾の言葉が似非関西弁？仕様です。

「となりのきゃきはよくきやくくつきゃきだ。」

「言えてへんで姉ちゃん。」

「となりのきゃきはよくきやくくつきゃきだ。」

「せやから言えてへんって。」

平和である。

「ここはなんだ？」

「お爺様の書斎かしら？」

本だらけじゃ。しかし、めっちゃめっちゃ気になる本棚が一つ。

「漫画しかあらへん。」

「あ。お爺様の趣味なのよね。」

マジか。熱いな爺ちゃん。おつ、北斗の拳やん。よも

「ちょっと、なんで漫画読んでるのよ。」

「ええやん。ちょっとぐらい。」

めっちゃ久しぶりやー！

「大・満・足。」

「結局、全巻読み終わるまで・・・」

「ええやん。姉ちゃんやって本呼んでたんやし。」

ちよつとと言いつつ全巻読んでもうた。違っんや俺が悪くないんや。

ブー先生が素晴し過ぎるんや。

「そろそろ親父を探すかの。」

「キリツグを？」

「おう。んでイリヤ姉ちゃんと日本に帰るんやで。」

「日本に？私が？」

「おうよ。シロちゃんも待つてるで。」

「シロちゃん？」

「おう。俺の・・・俺らの弟や。めっちゃ可愛いで？」

と、駄弁りながら親父たちを探す。

「どこにいると思う？」

「うーん・・・どこだろう？」

「姉ちゃん。姉ちゃん。いいこと教えたるわ。」

「なに？」

「そういうときは・・・女の勘や！！」

「勘？・・・じゃ、こつち！」

「まかせ。」

こんなことをしている間に、切嗣はアハト爺にいびられ、凍死一步
手前まで追い詰められているのだが・・・

急ぐんだイリヤ！走るんだ晋吾！！切嗣が永遠の眠りにつく前に！！

「まだまだレディには遠いいのう。姉ちゃん。」

「うるさいうるさいうるさい!!」

全然当てにならない姉ちゃんの勘は、ことごとく外してしまう。

「あとどこが残ってるん？」

「うっ」。礼拝堂かな？」

そして晋吾はイリヤの案内で礼拝堂に向かう。そこはこの歴々しい古城の中でも、もっとも壮麗かつ暗鬱な場所であった。

晋吾は知らぬことだが、魔術師における礼拝堂は神の恩寵を讃える癒しの場でなく、魔術の式典を執り行う祭儀の間である。

故にだが、頭上に見えるステンドグラスも聖者の姿はなく、アインツベルンの悠久の歴史を物語ったものだ。

もちろん、晋吾はその一端も知る由がないため、おっすげえーと思うだけが、目にとまる一枚があった。

それは、一人の人間が天空の杯を破壊している姿が描かれていた。

「キリツグ!!」

ぼーっとステンドグラスを眺めていたら、頭の上にはいた姉が飛び降り、走って行く。

回廊の奥には、老獺と言葉が似合う老人と、何故か至る所が凍傷をおこし、コートにすら霜がついている親父がいた。

「親父なにやってるん？雪に興奮しすぎて頭から突っ込んだりでも

ボツ!!

「火がつかます。」

「あつたかゝい。」

蕩ける様に恍惚な表情を浮かべ、体育座りで火に寄りそうキリツグ。非常にシユールである。イリヤですら若干引いている。

「なんだ貴様は!?!」

ようやくアハト爺・ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンはいつの間にかにいる、晋吾の姿に気づく。

「俺か?衛宮 晋吾や。よろしゅうな。爺ちゃん。」

「衛宮だと?」

「おう。養子や。」

胡散臭いものをみる目をした後、カツ!と眼を見開き、ずんずん近づいて晋吾を顔を両手を挟み、自らの顔を近づける。

「切嗣よ。これをどうした。……どこで拾った!?!」

「……聖杯の泥により起きた災害の被害者です。当主殿。」

「聖杯の泥……フン!どうやら先ほどの話。本当のようだな。」

まあいい。貴様の裏切りなぞもうよい。過ぎたこと……」

目の端で見ていた切嗣から目を晋吾に戻し、興奮した様子のアハト爺。

「しかし……しかしだ!!僥倖!こやつが……こやつさえいれば、聖杯戦争……いや、我がアインツベルンの法に!?!」

2世紀もの間、魔術師を続けているこの老人にしてみれば、目の前の人間は『ヒト』に見えなかった。

この膨大な魔力に驚くよりも興奮した。こいつがいれば魔法に・・・
アインツベルンの悲願に・・・!!

しかし、この興奮・・いや、狂喜といった方が相応しいか。この様子に同じアインツベルンの子であるイリヤでさえ、戸惑いを隠せないのにも関わらず・・・

全く空気を読めない男が一名

「爺ちゃん。」

「おお!しゃべりおつた!」

「顔・・近いんじゃない!」

バギイ!!

手加減したつもりだったが、つい気持ち悪さで力加減をミスリ、いい感じの放物線を描き飛んでいく御当主。

ドツガシャーーン!!バギバギ

いろんな物も巻き込んで壊していく御当主。

「……………」

「……………」

「じっ……爺ちゃー……………」

結果として無事だった。アインツベルン製のホムンクルスは丈夫で頑丈が売りです。

「ごめんな爺ちゃん。」

「……………プイッ」

「あゝん。スネんといてなー、ほんまこの通りや。（土下座）」

「（おおこれが、見た者は何に対しても許さんといかんという、ジャパニーズ土下座か。）小童。」

「晋吾やで爺ちゃん。」

「（爺ちゃん……いいかも）晋吾や。いいだろう。許そう。」

「おゝありがとな。爺ちゃん！」

先ほどの狂喜はどこにいったのか？急にほのぼのとした空気になる。好々爺と化した祖父に当る男にイリヤは思った。何こいつ誰？

「では、貴様は今の聖杯を手にすることは諦めると言っただな？」
「その通りです。当主殿。」

その言葉に思案する爺ちゃん。ところで、

「姉ちゃん。聖杯って何？キリスト的な奴？」

「概ねそうなんだけど、今の話の聖杯は冬木の聖杯戦争に使われる聖杯よ。ちよつと説明が長くなつちやうから、ここでは願いをかなえる願望機と認識して構わないわ。」

願いをかなえる願望機？

「んで、それを諦めろつて親父はいつてるん？」

「そうよ。」

「では、貴様はどうすると言つのだ？アインツベルンの悲願を、諦めると言つのか？」

「ほ？アインツベルンの悲願って願望機を手に入れることなん？」

「うーん。厳密に言つと違つわ。」

「アインツベルンの法。第三魔法に行きつくためだ。そのために、聖杯を手にして『外』へ出る」

外？・・・ああ、なるほど、『』に辿り着くってことね。でも親父魔法使いなんだろ？手伝ってやれよ。まあ、テメエでガンバレつてやつか

補助輪つきで辿り着いても嬉しくないやろ。でも願望機に頼るのも補助輪に頼つてると思つが・・・これはこれ、それはそれってか？

「つまり、汚いから使つちやめえ！つてことやろ？」

「・・・おおざっぱに言えばそうなるかな。」

「大雑把すぎでしょ。」

「なら洗えばええやん。」

そう言うと親父と姉ちゃんはハ　　と溜息をつく。なんや。まちこ
うてないやろ

「……分かった。」

「当主殿。」

「お爺様。」

「冬木の大聖杯は破棄する。一から新しいモノを作り、『外』への
扉を開く。」

「しかし、どうするのです？破壊しても聖杯は変わりませんよ？現
に第3回では破壊させ、今回の第4回では汚れていた。」

「……。」

「なんや？壊すのなら得意やで？」

みんなの目線がこちらを向く。

「……では、晋吾にまかせよう。」

「当主殿！」

「なんや親父。壊すだけやろ？俺がフルスイングすれば一発や！」

「フルスイング？」

「おう！この聖剣・エス　リボ　グでな。」

ゴルフクラブケースから相棒を取り出す。出した瞬間、姉ちゃんは
全力で親父にひつついた。

なんや怖がることないやん。

「ここの結界も一発やったで？」

といいながら軽くスイング。ブンブン振る。姉ちゃんはさらにガク
ガク震え始める。なんや怖がることないやん。

「な……ん……だと？」

「ん？爺ちゃんどうしたん？」

わなわなとふるえる爺ちゃん。なんや、どないしたん？

「……切嗣よ。私は疲れた。寝る。少し休ませて。今日は泊ま
つていいからこいつ黙らせて。」

「……お休みなさい。当主殿。」

爺ちゃんは疲れたらしい。親父に口塞がれた。とりあえず手を噛ん
でやった。

んでなんか泊っていくことになった。シロちゃんに連絡せなあかん
ね。

第8話 変人とアインツベルン。(後書き)

ちなみに晋吾はドイツ語のほか、英語、中国語も話せます。表示はすべて似非関西弁だがな！

次回は第5次聖杯戦争はどうする？って話。

第9話 変人の家族 (前書き)

長く間隔が空いてしもうてすいません。

期末レポートも原因であるんだが、塾業は今が勝負時やからしゃあないんや。

まあただのバイトですがな。一応責任つてのがあるんでの。

んで今回はちいと聖杯について自己解釈あり。

第9話 変人の家族。

一晩泊まった後、具体的に聖杯戦争をどうするかを親父と爺ちゃん
で話し合いをするらしい。

俺？姉ちゃんが胡桃芽探しをしようというから一緒に探してた。

んで、戻ってきたら親父に呼ばれたから姉ちゃんと一緒に移動。

「話は切嗣から聞いた。晋吾、お前は死徒狩りをしていたようだな。」

「嘘!？」

「ほんまやで姉ちゃん。」

「何言つての？死徒よ死徒!？おいそれと倒せるモノじゃないわ。
それがバットでなんて倒せるわけ・・・」

「事実だよイリヤ。」

「おう。このバットでな・・・」

「それを出すはやメテ。」

相棒を取りだようとしたら姉ちゃんに止められる。なんでや！。

「そのバット・・・見せてくれんか？」

「爺ちゃん。エス リボ グやで。」

「・・・エス リボ グを貸してくれんか？」

「おお、ええでー。」

爺ちゃんに釘バットを手渡す。平均910gのバットは老体にはこ
たえるらしく、若干よろめきが、持ち直す。

「なにも感じられん。これは礼装ではない。本当にタダのバットだと言っのか……」

「バットやってゆうてるやん。」

「聖剣って言ってたじゃない。」

「フツ……そうとも言っのだよ。」

赤い大佐みたいな笑みを浮かべ誤魔化す。姉ちゃんは顔を赤くして「ばかつ。こつち見ないで」とか言いよる。なんやーいけずう。

「……晋吾には信じられない力があります。」

「力？異能持ちだと言っのか？」

「異能と言っのか分かりませんが……分かることは2つの能力があるということですよ。」

「何と！？複数の能力だというのか!？」

「はい、おそらく魔力放出。もう一つが名付けるとしたら魔力硬化」

親父が爺ちゃんに俺の能力について説明していたので、実際に見せた方がいいかな？と思い、魔力放出を行う。

「つお!!!」

「きやつ」

スーパー野菜人みたいに魔力放出を始め、輝く体。近くにいたイリヤはいきなり発せられた光に驚く。

「俺……輝いてるわ。」

実際に。

「なんと・・・本当に人の身で魔力を体に纏うとわ・・・」

「恐らく、セイバーの魔力放出には劣ると思います。ランクで言うところかDランクぐらいでしょうか？」

なんと、ランク付けさせていたとは・・・ところでセイバーって誰？・・・ここは弟子入りせんとあんかね。

「それで魔力硬化とは？」

「こっちゃんねん。」

「固まれっ！！」と揺らめく魔力に言うと、目に見えてかちんかちに固まる魔力。

「・・・触ってもいいかね？」

「・・・私もいい？」

「ええで〜」

さわさわ触ってくる爺ちゃんと姉ちゃん。ここはアレをやる場面やな。くやしいつ！でも感じちゃううう！

ハアハア言いながらくねくねしていたら、姉ちゃんは俺の奇行に気づかなかつたみたいだが、ススツツと離れる親父。

な・・・ん・・・やと!？

「なんて魔力の密度なの？信じられない・・・」

「ふむつ、なるほど。これほどの密度なら我が結界を砕き、死徒を倒すことも可能か？」

親父なんか引かれたことに怯えていると、爺ちゃんたちは納得し

た様子。

「当主殿。確かに晋吾の魔力硬化は強力です。しかし、だから言
って聖杯の穢れが落ちるとは限らない。」

「大丈夫やで。親父。」

「晋吾……」

「我に策あり……とな。」

ぶつちやけ無理っぽかったらアポストロスがあるしの。・・ぶつ
け本番はやっぱ怖ええからいつか試してみるかの？

んで、聖杯は結局俺がぶつ壊すことになったのだが、聖杯には『大
きいの』と『小さいの』があるんやと

汚れてるのは『大きいの』。しかし聖杯戦争で英霊を倒し、魂を『
小さいの』に満たし『大きいの』の炉心としなければ汚れが出てこ
ないとのこと。

……すまん。言葉通りなら解釈できるが全然よくわからん。英
霊って何？魂を満たすってなんや？大聖杯ってどんなの？小聖杯っ
てどんなの？

んで、またこれにより『外』に出ることができるので、もしかした
ら『聖杯の正常化』と『アインツベルンの悲願』の両方が可能なれ
ば一石二鳥とのこと。

しかし、聖杯の『汚れ具合』。つまり泥による呪いの威力によっては、すぐさまこれを破棄する。

新たな聖杯を用意して、次の聖杯戦争に望む。

「つまりどうすればええん？」

「絶対にしなきゃいけないことは、聖杯戦争を勝ち抜き、聖杯を現界させ、壊す。・・・これで分かった？」

「I see」

始めからそう言えばええのに。

「ほな俺は、聖杯戦争とやらもせなあかんのか？」

「いや。それは当初の予定通りにイリヤにさせよう。」

「ほ？姉ちゃんがやるんかい？」

「フツツ。私を普通の魔術師と思わないことね。」

自信満々の姉ちゃん。まあ、確かに普通『人間』とは違う感じはしとったの。

「ところで爺ちゃん。姉ちゃんと日本で暮らしてええ？」

「・・・聖杯を手に入れることができるのなら、好きにして構わん。」

「おおっ！やったで姉ちゃん！これでみんな一緒やー！」

やっほー！と再び姉ちゃんを肩車し、走り回る。姉ちゃんも嬉しそう。

「じゃ、日本に帰る用意をしないとね。」

親父は俺の肩にいる姉ちゃんを抱き上げ、自分の肩に乗せる。姉ちゃんはとても嬉しそう。

服とか、魔術（魔法じゃないんだと）に必要なものとかを入れた結構な量の荷物をまとめ、日本にいく準備を開始する。

今日の夜の便でドイツを発ち、明日の昼には冬木につくとシロちゃんたちに連絡を入れる。

姉ちゃんはその時にシロちゃんと始めて話した。二人ともすごく緊張してて、まともに話せるようになるには10分程かったが、最後には楽しそうに話していた。

俺と親父はその微笑ましい姿を見てニマニマしていた。

「冬木よ！私は帰って来たああああ！！」

「恥ずかしいからやめなさい！！」

「なんや姉ちゃん。このセリフはお約束やがな。」

「少し観光でもしてくかい？」

「何いっとるんだ親父。シロちゃんたちも一緒にやる？」

「ははっ、ごめん。ごめん。そうだったね。みんなで一緒にね？」

昼時だがご飯を食べず、観光もせず、真っ直ぐ家に帰る。

「へ〜、いい家ね。武家屋敷だなんて。」
「そうやる?」

姉ちゃんも気に入った様子。門をくぐり、玄関を開けると・・・何故かあるくす玉。

「・・・何これ?」

「姉ちゃん。引くんや。グイーって。」

「引くの?」

「せやせや。」

不安がりながら姉ちゃんはゆっくりひもを引く。

『おかえりなさいイリヤお姉ちゃん。』

「・・・あつ。」

パン！パン！！

「きゃー!!」

「おかえりなさい!」

シロちゃんと舞弥姉ちゃんがクラッカーを鳴らして姉ちゃんを歓迎する。

「もっつ!ビックリしたじゃない!!」

そういつて拭った涙は驚きからか?それとも嬉しさからか?それは彼女にしか分からない。

「腕によりをかけてご飯を作ったよ。お姉ちゃんの歓迎会だよ!」

「マジか!楽しみよ!!」

「兄ちゃんのために作った訳じゃないよ?」

「シロちゃんそんなことを言わんといてな!」

イリヤは後に語る。この時の味は、一生忘れはしない。・・・と。

第9話 変人の家族 (後書き)

ようやくイリヤの衛宮家入り。次回は時間がだいぶ飛んで小学校卒業ぐらい。

いよいよあの『ナントカアクマ』改め『赤い悪魔』のご登場。決して丸い悪魔ではない。

どう絡むか？どうしてこんな時期に会うのか？は次回にてお楽しみに。

第10話 変人と管理者。（前書き）

新年あけましておめでとございます。

沢山の方が見てくれているみたいで、感謝感謝です。

それでは赤い悪魔の登場です。

第10話 変人と管理者。

姉ちゃんが我が家に来てはや3年ほど経ち、今日は俺とシロちゃんの卒業式。

親父も姉ちゃんも舞弥姉ちゃんも父兄席で式に参加。速くも泣いている親父。

バカな・・・まだ始まつとらんぞ。

周りのお母様方に温かな目線を送られる親父。姉ちゃんが恥ずかしそうだ。

「一年生！」

「初めての友達、初めての学校！ランドセルを背負い、新しいことで不安と希望でいっぱいだった！」

「入学式！」

いきなり何事かと思うかも知れんが、これも卒業式の一環。

小学校で体験したこと、学んだことを卒業生が言葉にし、成長の証と未来への希望を発する。

俺のかつての記憶ではこんなことをやった覚えがないからの、新鮮

で楽しくやらせてもらうておるわ。

正直、保護者達にはクリンヒットらしく、皆々さま号泣です。言葉言葉でその時の記憶がよみがえるのかの？

親父？言わなくても分かるわ。

そんなことはどうでもええんねん。もうすぐでお待ちかねのイベントやねん。おっ！次や次！！

「勝利を目指して！一生懸命練習した！！」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

シロちゃん—————ん！シロちゃん！！ヤベエ・・・メツチャ感動した。

うぐうぐ・・・あのかわいかったシロちゃんが、あんなに凜々しくなっちゃって……。天国のお父さんとお母さんも見ておるぞ。

SIDE 衛宮切嗣

「べっべっべっ」

「泣きすぎよキリツグ。ほら、鼻水。」

だって・・・今までのことがブワァーってよみがえってきてさ。

春・夏・秋・冬、様々のことを子供たちと経験して、僕も一緒に成長・・・いや、『人間』に成っていった。

「うう・・・イリヤも知ってると思うけど、『僕ら』は普通の家族としての関係を送れない。僕自身も、おそらく一般の子供が抱く親への想いとはかけ離れてると思う。」

「キリツグ・・・」

「けど、晋吾や士郎達の成長が、嬉しくって、誇らしくって、『僕の子供達です!』って自慢したくて・・・これって『親』としての証拠なのかな？」

その言葉に感極まって感涙してしまう周りのお母様。父兄席の全員が涙を流す奇跡の卒業式として、この小学校で語りつかれることになるのであった。

S I D E O U T

卒業写真も取り終え、友達と分かれた後、親父たちと合流しようとして待ち合わせ場所に向かうと、他のお母さんたちに背中をバシバシ叩かれている親父がいた。

何した親父？拳句のはてにお父さんを大切にね？とかこんな良いお父さんいないよ。とか言われる始末。マジ何があった。

姉ちゃん達に目線で語りかけると、はぁーっと同時に溜息をつく二人。なんや、仲ええな。

「ごほん！さて晋吾、士郎。卒業おめでとう。」

「おう。」

「うん。」

「約束通り、卒業祝いですし食べに行くよ！」

「わーい！」

昼はすしを食べに行き、夜は藤村の皆さまがお祝いしてくれるそうなので、御馳走になります。

2度目の卒業であるが祝ってもらえることは嬉しいので、本日はその祝福を素直に感謝し、味わうのであった。

卒業して、藤村組による連日のドンチャン騒ぎの数日後、姉ちゃんがこんなことを言って来よかった。

「冬木の管理者っているんでしょ？ふと思ったけど、挨拶に言った方がいいじゃない？」

「管理者？」

「なんやそら。市長さんのことかい？役所に挨拶に行くんかい。」

「……そこのおバカさんのために、頭に『魔術関係の』ってつけた方がいいかしら？」

「おバカさんってだれやー？」

後ろを向いたら親父がいた。……フッ。

「冬木は日本でも有数の霊地よ。だから多くの魔術師が暮しているわ。土地と魔術師の管理とこれらが起すコトの責任者が管理者よ。」

「多くのって100人ぐらい？」

「そんなに魔術師がいるわけじゃないでしょ！何十人もいたら多いどころじゃないわよ。」

「ふん。」

「でもイリヤ。別に僕はここで魔術の研究をやるつもりとかないないけど……」

「何言ってるのよ。何も言わないで暮らしてみなさい。魔術師は存在が分かっただけで警戒するものよ？晋吾のこととかがバレたら面倒ですまないわ。それにシロウだって。」

「そうだね。晋吾は大概のことは平気だろうが、士郎はまずい。」

何がや。

「シロちゃんを仲間外れにしたら俺、怒るで？」

「そう言う訳じゃないよ。士郎にも一応魔術を教えるからね。それに……」

「投影ね。私も始めて見た時は引いたわ。」

「そう、投影だよ。」

「投影??」

「士郎に教えた魔術なんだけど、なんだかよくわかんないモノになつちやつてて・・・」

「なんやそれ?どう言う意味かさっぱりやわ。」

「普通の投影とは微妙に違うものになったということよ。」

親父曰く、習い始めてから2年間強化ばかりしていたシロちゃんは、流石に飽きてきたらしく、親父にその発展形のを教わったらしい。

それが、投影魔術・グラデーション・エア。なんや、めっちゃ力ツコいいやないかシロちゃん。厨二っぽいけど。

「なにができるとか、もちろん言わなくていいから、魔術師であることは言っておいた方がいいわ。」

「知られたときに魔術師であると分かっているのと、分かってない状態をくらべると、確かにそうだね。」

「そう言うもんかの?」

「いざとなれば衛宮の奥義っておけばいいしね。」

せやからって、なんで挨拶に行かねばならんのよ。・・・裏社会は何であれ『筋を通す』が必要なのか

親父が場所は知っているらしく、何故か知らんが俺も行くことになる。

ひとりで行けや。え？何？一人だと怖い？子供かつ！？

親父が言うには管理者、『遠坂』さんの家に近づくにつれ、何故か人の気配が皆無になる。

「……凄まじい靈気だよ。全く……」

「靈気？」

「ここは日本有数の靈地である冬木で、二番目に靈気強い場所なんだ。」

「ふーん。」

靈気が強いとなんかいいことあんの？土地神とかいんのか？ウロ様とか居そうな雰囲気だけど、それじゃ違う漫画か。ドーナツが生える木が欲しいですウロ様。

「……なんで拝んでるの？」

「なんとなくじゃ。」

こうして、豪邸といってもいい家（なぜか若い時に見た風 鶏の館に超そっくりだが……）にたどり着いたのだが、呼び鈴がないぞ。

「呼び鈴ないんやけど。」

「うちもなかったじゃん。」

「俺がつけたけどな。ないと不便やん。」

「そうかな？僕はそう思わないけど……」

「ヒッキーには必要ないからの。」

「ヒドイ!」

うだうだ話していると玄関の前に家の人近づくと気配がする。

「来たで、親父。」

「ん。そうか。」

しばらく待っていると

「人の家の前で何を話してるのかしら?」

可愛らしい嬢ちゃんが一人。

なんや。偉くカワええのが出てきたの。管理者ってから堅物のおっさんが出てくるんやと思ったわ。シロちゃんと同じ年ぐらいやるか?

「……君が冬木の管理者で合ってるかな?」

「っ!そう魔術師ってことね?・私が管理者の遠坂 凜よ。何かご用かしら?」

なぜか警戒心バリバリの嬢ちゃん。

「なんや!。そんな警戒せんでもええやないか。」

「えっ!?」

パツチリお眼目を見開かせ、驚く嬢ちゃん。

「誰!?」

「なんや!。そんな驚かんでもええやろ。」

「すまない。僕の息子だよ。」

そういつて頭を下げる親父。

「実はここ冬木に腰を下ろさせて貰っていてね。念のために挨拶に来たんだ。」

「へえ。律義ね。」

「申し遅れてすまないが僕は衛宮 切嗣と言う。こちらは息子の晋吾だ。」

「よろしゅう。」

「別に住むことには苦言はないわ。しかし、厄介事はごめんよ。」

キッ！と目を鋭く睨ませる嬢ちゃん。うーん。カワええ子はどんな顔してもカワええのう

「分かっているさ。そちらの研究に干渉するつもりもないし、協力をお願いすることもない。」

「そう……」

「ただ、息子たちと仲良くしてくれると、うれしいな？」

親父がそう言うと、何言ってるんだコイツ？って目で見る嬢ちゃん。

「……悪いけど、馴れ合いをするつもりはないわ。」

そういつて扉を閉める嬢ちゃん。

……なるほど、友達がいないんですね。分かります。

次の日。

「りゅん〜ちゃ〜ん!!!」

シーン……

「りゅん〜ちゃ〜ん!!!」

「……何よ。」

私不機嫌です! って顔でドアを開ける凜ちゃん。

「凜ちゃんそこは「は〜あ〜い!」って答えないとダメやで。ジブリ的に。」

「ジブリ?」

「なんや凜ちゃん。ジブリ知らんのか? 今度持って来たるわ。」

「え? ええ。ありがとう。」

「玄関まで態々行くの面倒やないの? 呼び鈴つければええやん。」

「機械とか苦手なのよ。」

「呼び鈴とか機械の内に入らんで?」

「……「ついい?」

「なんじゃ?」

「何しに来たのかしら?」

いい笑顔で訪ねてくる凜ちゃん。

「遊びに来たんよ」（キラッ）

いい笑顔で返す俺

「そう。さようなら。」

「待ってえな凜ちゃん。」

勢いよく閉まる扉を、超反応で止める俺。

「何すんのよ。」

「それはこっちのセリフや。」

ギリギリと悲鳴を上げる扉。

「馴れ合いはするつもりはないって言ったでしょ？」

「そんなんいつとるから友人ができないんやで？」

「あんたには関係ないでしょ！！！」

「凜ちゃんを心配しとるんがな。」

「余計なお世話よ。」

「何いつとるんや。友人は宝やで？宝。大切にせなあかん。」

「魔術師の私には必要ないわ。」

ほお・・・必要ないと申したか。

「作ったこともないのにどうやって必要ないと判断したん？」

「それは・・・」

「なんや、魔術師って実験も論証も無いまま判断するもんなんか？」

「なっ!」

「アッ、みんながそうだっていうのはナシやで? まあ『有象無象』と同じでええなら別にかまへんが。」

「むむっ……」

有象無象に反応するか。プライド高いやつだなー。

「一人で薄暗い中研究研究。えらい陰湿やな。汚い、汚いで。『気品』の欠片もない。」

「ぐぐ……」

今度は気品で反応したわ。なるほど、豪邸やし、常に上品であれ。とかの家訓でもあるんかの?

「冬木の管理者ってんやから友人の一人や二人ぐらいいるべ?」

「もっ……もちろんよ!」

「せな俺の一人ぐらい増えたってかまへんやろ?」

「フッ……当然ね。一人でも二人でも百人でもドンと来なさい。」

「おゝ流石は遠坂の御当主や。」

「ホッホッホッホ!」

クックック。相変わらずプライド高い奴は扱いやすいわ。カァッ
カッカッカ!

「ねえ。」

「なんや。」

「どうして私の家で珈琲飲んでのの？」

「ん？別に俺が入れたんやから飲んでもええやん。凜ちゃんやて俺が入れたの飲んでるやろ？」

「そうなんだけど・・・」

「なんや？不味かったん？入れなおすか？」

「いや。美味しいけど・・・」

「それは良かったわ。ケーキどう？うちの自慢の弟が作ったんねん。」

「ええ。すごくおいしいわ。」

美味しい珈琲とケーキを口に入れつつ凜は思った。

どうしてこうなった・・・

第10話 変人と管理者 (後書き)

赤い悪魔もまだ少女なのさっ・・・

がコンセプト。友達以上恋人未満の関係にしていききたいと思う。

第11話 変人の夢。(前書き)

今回は凜ちゃんとの会話がメイン。

それではどうぞ。

第11話。変人の夢。

「りんくちやくくくん!!」

「……………なによ。」

今日も不機嫌です! って顔で出迎えてくれる凜ちゃん。

「遊びに来たで。」

「来ないでいいのに……………」

「そんなこと言わんといてな。今日はプリン持ってきたで?」

「……………入りなさい。」

プリンの魔力には勝てんらしい。女の子だな凜ちゃん。

「……………何やってるの?」

「呼び鈴つけ取るんや。」

タダの呼び鈴ではない。この時代にはないテレビドアホン。ワイヤレス機器接続でサーモカメラと顔認証により人を確認すると自動で作動するタイプなのだ。

なんでそんなのがあるか? もちろん俺が作ったからだ。フツ、俺にかかれば造作もない。

人が前に居なくなると自動で止まる。高齢者対象に売られてた製品だから機械音痴の凜ちゃんでも大丈夫!

「なんよ。」

「何勝手につけてるのよ!!」

「だって大声で呼ぶと凜ちゃん不機嫌になるやん。」

「……はあく。(来ないって選択しは無いのかしら?)」

疲れている様子の凜ちゃん。よしっ！プリンと紅茶で疲れを癒してあげよう。

「今日は家から持ってきた紅茶を入れました。」

「あなた、紅茶なんて入れられるの?」

「フツ。姉ちゃんから合格の印を貰ったで。」

「姉もいるの?」

「おうよ。3人姉弟よ。」

ふーん。といいながら口に含む凜ちゃん。

「へえ。美味しいじゃない。」

流石はドイツの誇るロンネフェルトのアイリッシュシュモルト。

不機嫌だった凜ちゃんも、自分を取り戻したようだ。

「せやるせやる?プリンも召し上がれ!美味しいで。」

「これも弟と作ったの?」

「おうよ。今度連れてくるさかいな。」

「別にいいわよ。連れてこなくて。」

「決めた。明日連れてくるわ。」

「何でよ!?!」

「シロちゃんに会わんとは言語道断!やらないでか!?!」

「シロちゃん？」

「土郎って言うんよ。」

しばらく晋吾による土郎自慢が始まるのであった。

「んでなー」

「分かった。分かったわ。いかにあなたが弟を大切にしてるか分かったわ。」

「そうかそうか。」

凜ちゃんはハア　と溜息をついた後、しばらく思索し、真面目な顔で聞いてきた。

「……所で、あなた……魔術師なんですよ？」

「違うで？」

ぶふう！　とふきだす凜ちゃん。　なんや汚いで？

「嘘つきなさい！　そんな魔力があるのに魔術師じゃないですって！　？　冗談じゃないわ！！」

「ウソやないで？　俺は技術者やもん。」

「……技術者？」

「基礎となる学問や知識を具体的なものづくりやプロセス、システムの開発に応用する専門家。これを技術者と言うんよ。」

「つまり科学側ってこと？　こんな魔力を持っていて……笑えないわね。」

吐き捨てるように失笑する凜ちゃん。少しカチンとくるな。

「魔力とか関係あらへん。凜ちゃんは魔術の道で究めたいことがあるんやろ？それと同じことや。」

「・・・参考までに聞かせて貰うわ。あなたが・・・目指しているものは？」

「ロボットと言う言葉は知っているかい？」

「ええ。流石にそれぐらいは知っているわ。」

「この言葉の語源は、チエコ語の『強制労働』。俺が作りたいのはそうじゃない。」

「・・・召使いじゃないってこと？」

「そう。鋼鉄の体に魂と言う名のプログラムを。社会的知識を持ち、人間と同等の心を持つ。人造人間と言ったらいい・・・か？新たな『人』を生みだす業よ。」

（科学が未来に向かっていく物ならば、魔術は過去に向かっていく物だが行き付く所は同じ・・・誰が言い出したのか知らないけど、よく言ったものね。）

タダの夢とかでなく、実際晋吾は後一步のところまでいっていた。・
・が、不可能に挑むなら狂気に走らないといけないじゃね？でも何すればええん？・・・よし、とりあえず研究室に籠るか。

と研究室に籠り始めて、睡眠中に別の研究室からの火災で死ぬという。何ともしまらない最後を迎えていた。

死後、周りに

「あの愉快的な爺さん。とうとうボケていたのか。」「いや生まれた時からボケてたよ。一緒に居て面白かったけど。」

とか言われる始末。愛させられているみたいだが、微妙に可哀想である。

「……………それがあなたの道。…分かったわ。道は違えど、目指すところは同じってわけね。」

「……………んで、凜ちゃんは？」

「私？……………魔術師の私がベラベラと言う訳ないでしょ。」

「……………クツクツク。そうやったの。」

「フフツ。ええ。そうよ。」

「改めて、宜しゅう。魔術師。」

「宜しく。技術者。…でいいかしら？微妙に合わないけど。」

「技術師の方が合うか？」

「いいわね。」

進む道は違えど、こいつなら…友人であってもいいかも。そう思い始める凜であった…

次の日……………

ピンポーン。ピンポーン。ピポピポピンポーン。ピポピポピンポーン。ピポピポ……………

「……………何よ。」

今日も不機嫌そうな声の凜。早くも昨日の思いが消え失せそうであ

る。ちなみに今日は玄関まで来ていません。

「おお。使えたやん。やったね！凜ちゃん!!」

「使うも何も、ボタンも押さないでいきなり画面がつかなくて、これどうなってるのよ？」

「そうゆう仕様なんよ。んで、上がっていい？」

「嫌って言うてもいいかしら？」

「そしたら、呼び鈴押しまくる。」

「壊そうかしら？」

「所がどっこい、テレビ画面を壊したところで音が止む訳じゃないのだよ。」

「……はあ。もういいわ。入りなさい。」

「お。凜ちゃんあんがとなー。」

下手に相手にするのが面倒になってきた凜であった。

「今日はシェフの登場やで。」

「衛宮 士郎だ。よろしくね。」

「ふーん。士郎君ね。」

頭から足元までじろじろ見る凜ちゃん。

「な……な……何かな？」

「いえ、気にしないでよろしいですよ？」

「そ……そう？」

真っ赤になって照れてるシロちゃん。凜ちゃんカワええもんな。初心なシロちゃんが可愛いです。

「いつも美味しいお菓子をありがとう。」

「え・・・あ・・・ありがとうございます。」

頭を下げる凜ちゃんに対して、それよりも頭を下げるシロちゃん。

「今日はシヨコラにしたんだ。」

「まあ・・・楽しみだわ。」

「う・・・おう。楽しみにしています。」

いつものように『うん』と頷くところを『おう』と直すシロちゃん。あの短い間にこっちの方がいいと判断したらしい。

何この子カワイイ・・・。男らしくしたかったんですね。わかります。

始めのうちは急に撫で声になって猫かぶりし始めた凜ちゃんきめえ。って思ったけど・・・good job!!

この後もいい所を見せようとするシロちゃんに悶えさせてもらいました。

「一ついいかしら?」

「なんや。凜ちゃん。」

「あなたじゃないわ。士郎くんに聞きたいの。」

「え?・・・俺に?」

「ええ。士郎くんは・・・夢とかある?」

おいおい。いきなり将来の夢とか話始めんなよ。アレか?フラグッ

て奴か？そういえばシロちゃん主人公だったよな？

なるほど・・・シロちゃんはフラグ一級建築士だったわけか。モゲろ。

「夢か・・・陸上選手とか料理人とかパティシエとか、なりたものはたくさんあるけど・・・」

どれも俺が進めた『夢』。示した『夢』。しかし・・・

「俺は、将来どんなことになっても、人に何かをしてやれる奴になりたい。それが夢を与えることでも、幸せな気分にしてあげることでも。なんでもいい。」

『士郎』は変わらない。人を想い。人を慈しむ感情は・・・どこまでも『真っ直ぐ』である。

「さて、時間も時間やし、そろそろお暇させて貰いますか。」

「あら？もうそんな時間なの？」

「そろそろ帰らんと親父が愚図るからの。」

親父のあの顔で、愚図るところを想像したのか、苦笑いで答える凜。

「じゃ、俺は食器洗ってるよ。」

「そんな・・・悪いですわ。」

「いいって、俺が作ってきたんだから。皿も俺が洗いたいんだ。」

「それじゃ・・・お願いするわ。」

シロちゃんが洗いにいって二人つきりになったので、凧ちゃんに聞いてみることに。

「何でシロちゃんの夢とか聞いたん？」

「・・・そうね。あなたの弟って言うからどんな変わり種が来るのかと思っただら、年相応の男の子じゃない？普通の子はどんな夢かなって」

「悪いけど、シロちゃんが年相応の普通の子って言ったらあかんよ？あれだけ考えられる小学生はいないで？」

「そうね。聞いておいてよかったわ。いい男だっけ見直せたし。」

「せやろせやろ。」

うん。うん。凧ちゃんもシロちゃんの魅力が分かってくれたか。

「・・・なんか面白くないわね。」

「どうしたん？」

「何でもないわ。」

なぜかつまらなそうに言う凧ちゃん。どうしたー？

「おっ。そういえば、中学校って凧ちゃんどこなん？」

「・・・第二深町中学校。」

「おおっ。奇遇やな。俺らと一緒にやん。」

「嘘・・・でしょ？」

凧ちゃんと一緒に。早くも中学生生活が楽しみだ。

第11話 変人の夢。（後書き）

少し真面目な話を。晋吾は常に未来に目を向けている。

厨二っぽいが、人間の可能性を信じていると言ってもいい。

発展していく文明を、次のステップへ昇華させるべきだとも考えている。

一方魔術師である凜の夢は、自らが感じ取ったものではなく、家にあつたものを拾い、それに使命感を感じた。というイメージ。士郎は歪みがなければまっすぐないやつだと思っている。

修造みたいになってほしい。熱くなれよおお！！

簡単に言うとは事にも全力な熱い漢になつてもらいたいものだ。ほとんどの人が全力で嫌がると思うがww

今回は長々とあとがきスイマセン。（土下座）

つい夢の話をしていると熱くなっちゃうんだよ。

今回は衛宮家のお話。よって凜ちゃんは一旦お休みです。

第12話 変人の計画（前書き）

タイトルは計画ですが、大したことじゃないのだよ。
つなぎの回でスイマセン。

第12話 変人の計画

晋吾は技術者である。

前世での彼は、日本を代表するロボット工学博士であり、人類に偉大な一歩を踏ませた人物でもあった。

人工知能。この日本語にはいくつかの意味合いがある。

多少気の利いた家庭用電気機械器具の制御システムや、ゲームソフトの思考ルーチンなどもこれに当り、学術的にはもっと細かく分けられているが、

プログラムにより制御された知能と言うのが一般的であろう。

また、哲学的な側面も強く、

「何が実現されれば人工知能が作られたといえるのか」

という基準から逆算することによって、

「知能とはそもそも何か」といった命題も立てられている

彼が作ったものは、『知』を元に『思考』し、『試行』する。IF
- THENルールを脱したプログラムだった。

しかし、『知』を生み出す『意志』を持つまでには至らなかった。
機械に魂を宿すことはできなかつたのである。

それでも彼の開発は介護用ロボットや、レジャー用ロボットの発展につながり、世界にロボットがありふれた物にしたのだった。

「姉ちゃん。悪い。もう一度言ってくれんか？」

「だから、『ホムンクルス』だって言ってるでしょ？」

あの日の昼。のんびりとお茶している最中、アインツベルンの魔術が気になり、色々聞いていたらこう返ってきた。

魔術特性は『流動』と『転移』。錬金術に特化していて、ホムンクルスの『鑄造』が奥義。

錬金術……ロマンのかほりがする。

「ホムンクルスカ・ヤバいな。マジでヤバい。」

「……何がヤバいのよ？」

「学者的興奮な意味で。」

体は何で出来てるか？脳はあるのか？魂はどのようにな？そもそも魂はあったのか？ヤバい。脳汁が出そう。

「……色々聞きたそうね。」

「何故わかった!？」

「目がキラキラしてるのよ。」

少年のように目を輝かせている晋吾であった。マッドじゃないよ！少年なんだよ！！

「ほうほう。魂は『降霊』するんですかい。」
「そうよ。ホムンクルスは体は『铸造』できるけど、魂を作ること
はできないわ。」

なるほど、流石に魂を作ることとはできんか。まあ、できたらあの幼女神と同じだしな。

「実は聖杯を求める理由は、これに関係してるの。」
「お？マジで？」
「そうよ。第三魔法『ヘヴンズ・フィール天の杯』。かつてアインツベルンが辿り着いて最果て・・・魂の物質化。」

魂の物質化・・・つまり魂の証明にもなる訳だ。不老不死？ゴメン、そんなことより魂の情報が知りたい。

「姉ちゃん。姉ちゃん。話変わるけど・・・物に魂って宿せるの？」
「できなくはないけど・・・何をやる気？」
「いや・・・ロボットに魂を与えたらどうなるんやろ？って。」
「ロボット？」
「おう。ロボットや。」
「・・・・・・・・面白そうね。」

こうして、『機人誕生計画』なるものを二人で作っていたら、シロ

ちゃんに笑われた。

うぬぬ・・・今に見てろお。3年・・・いや！2年だ！2年で完成させてみせる！！

数日後。実にいい天気だったので、例のごとく散歩に出かけることにしたのだが・・・

最近シロちゃんはついてこなくなった。

「俺も少しニイちゃん離れしないと・・・もう中学生になるんだしさ。」

とが言われた。なんか淋しい・・・。絶ツツ対凜ちゃんのせいだ。そつだ。そつに決まっている。

いつもの通りに適当にうろつくんだが、絶対に近づかない場所がある。

間桐さん家と、新都の教会である。

理由は・・・・・・臭い。

教会は鉄臭い。あと腐敗臭がする。教会なんだから木造にしろよ。あと生ごみは捨ててください。

間桐さんちはチーズ臭い、イカ臭い。濃厚なメスとオスの匂い・・・
・なんて言うか。自重シロ？

そのためあまり近づかないのである。

ちなみにだが、シロちゃんは臭わないらしい。やはり嗅覚も人より
いいのか？

そう言えば最近死徒狩りしてないなあ。別に金を稼ぐ必要はないけど・・・『狩る』ことに必要性を感じるんだよね。

・・・よし、探すか。

適当にうるついても死徒を見つけることができないだろうから、協力者を得るか。

「舞弥姉ちゃん。宜しくお願いします。」

「しかしだな・・・」

すっごく渋られる。さっきからお願いしてるのだが、「でも・・・」
「だから・・・」といって先に進まない。

ちいい！埒があかん！

「何してるの？」

「イリヤ・・・聞いてくれ。晋吾が・・・」

姉ちゃん登場。しかし、彼女は舞弥にとって救世主なのか？それとも……!？」

「死徒狩りねえ。晋吾は教会と何か関係でもあるの？」

「なんでここで教会が出てくるんねん。」

「だって死徒を狩ることに使命感を感じるだなんて、代行者みたいなこと言うんだもの。」

「代行者？」

「教会の悪魔殺^{エクスキューター}した。」

「そんなになつた覚えはないで。」

どいつもこいつも……俺は技術者だって。

「あまりしない方がいいわよ？派手に動くと教会も黙っていられなくなるわ。」

「なんでや？」

「簡単に言つと、死徒を殺すことだけだ彼らの目的ではないの。」

「ふーん。」

「彼らの目的は全ての異端を消し去り、人の手に余る神秘を正しく管理すること。だからシンゴみたいなのは正直な話、管理対象よ。」

「つまり……私の体が目的なのねっ。」

「……」

……滑つたらしい。

「とにかく！我慢しなさい。教会は魔術師より厄介なのよ。」

「むむむ……しゃーないの。我慢するしかないか。みんなにも迷惑かかりそうやし。」

結局俺はイリヤに丸み込まれ、ほっとする舞弥姉ちゃん。仕方ないわ、可能性は低いと思うが、

『遭遇戦』なら大丈夫やる。『派手』にやるなって言われたから慎重にな。

全く諦めていない晋吾であった……

入学式も近づいてきた頃、春の木漏れ日が気持ちよくなってきたある日。

「ゴホツ・ゴホゴホ」

「なんや親父。風邪か？」

「ゴホツ・なんか咳が出てきてね。」

「腹出して寝てたんとちゃうか？」

「むっ！そんなことないよ。」

「いえ。この間縁側でお腹を出して寝てました。」

「ぐう……」

相変わらず舞弥姉ちゃんにはぐうの音も出ないらしい。口で言うてるが。

「ちゃんと薬飲んで寝るんやで？」

「はい」

どっちが親なんだかしばらく考えてしまう舞弥であった。

第12話 変人の計画（後書き）

今回は伏線（？）な回。次回は中学校入学から。

第13話。変人の中学生活。
(前書き)

今日は休みだったので連投。

第13話 変人の中学生活

本日は入学式。クラス分けが張られている掲示板を見て、教室に移動し待機。

シロちゃんとは違うクラスだった。むむ・・残念。

校門で凜ちゃんにも会って声をかけたけど、露骨に逃げられた。

馬鹿めっ！学校と言う閉鎖空間で逃げられると思うなよ!？

と違ってたら同じクラスだった。

「運がないな。凜ちゃん。」

「・・・」

心底悔しそうである。

席に座り、リラックスしていると、

「・・・その御仁。」

「うお?」

メガネをかけたイケメンに声をかけられた。

「あの女狐のことを知っているのか?」

「女狐?」

「あの女のことだ」

と、顎で凜ちゃんを指し、凜ちゃんは負のオーラを纏った笑みを浮かべる。

「凜ちゃん？友達やで？」

「・・・悪いことは言わん。あの女は止めた方がいい。」

「大丈夫や。凜ちゃんことちゃんとして知っとる。けど、俺が友達としたんやから、口出しはいらんで。」

そついうと、凜ちゃんはどや顔を見せつけてきた。イケメンメガネは悔しそうだ。

「ところで自分。名前なんつうの？」

「おお、これは失礼。柳洞一成という。宜しく頼む。」

「衛宮晋吾や。よろしゅう。」

中学初の友達は、爽やかな奴だった。高ポイントのところは自分から俺に話しかけたところ。・・・始めてかも。

初めての体験に感動する晋吾であった。

入学式も始まり、体育館に父兄の姿も見られる。親父は風邪が治ったようで、今回も3人で出席。

大きめに購入したダボダボな制服を着るシロちゃんを愛でながら、校長先生の話をも右から入れられて記憶にとどめます。

フツ、俺にかかれば容易なことよ。

式も終わり、また各クラスに移動。さて、ここから中学生生活の開幕。大いに楽しむとしますか。

4月のオリエンテーションも終わり、そろそろ部活動が始める頃。

「一成は部活とかするの？」

「いや、生徒会に入ろうと思ってからな、どうするかわからん。」

「凜ちゃんは？」

「どうしようかしら？やる気はないけど・・・」

3人で昼食を取っている時に、部活をするか質問してみた。

ちなみに基本、3人で昼食を取るのだが・・・絶対に二人は会話せず、俺対一成。俺対凜ちゃん。で会話をしているようなもの。

お前らどんだけだよ。犬猿の仲ってこついうこと言っただろうか？
一見3人仲良く食べているようで、2者間で冷戦勃発してるんですが・・・

一成は生徒会に入るらしい。まあ、会長オーラは今でもあるからな。
凜ちゃんは「どうでもいいわ。」的な顔で返答する。興味がないのですね。わかります。

「晋吾はどうするつもりなのだ？」

「俺？同好会作るつもりや。」

「同好会？」

「おうよ。モノ作り同好会や。」

運動部はチートのせいでダメだし、家でごろごろとか、ずっと研究
& 製作もいいけど、やっぱり中学で何かしたい。

「もう用紙は貰って来たね。」

「速いな。」

「行動派と呼んでもいいで？」

同好会は3人いればええから楽ちん。俺でしょ、シロちゃんに名前
だけでもいいから書いてもらって、あと一人や。

「『友達』の二人が入ってくれば嬉しいんやけど……」

「フツ、友の頼みを無下にするわけにはいかん。」

「どうしてもって言うなら……友人の私が入ってあげてもいいわ。」

二人が同時に同意を示すが……

「あら？柳洞くんはその内生徒会に入ってしまったのですから、
別に無理をしなくてもいいのよ？」

「何をいう。俺は晋吾の『真』の友人であるからな、晋吾のためな
ら多少の無理ぐらい……」

何故か言い争いを繰り広げる二人。

とりあえず、二人の名前を書いて提出しておいた。一成と凜ちゃん
は早くから優秀な生徒と思われていたから簡単に受理された。

貰った教室は使われてない準備室。まずは掃除、整理。一人でやつ
ただけ結構速くできた。

今度パソコンとソファも持ってこよ。

今日はここまでにしよう。帰ってシロちゃんの飯を楽しむとするか。飯の時に聞いたのだが、シロちゃんは陸上部に入るらしい。

始めの100mのタイムを計った時に、11秒24ってタイムをたたき出したとのこと。

はやっ！シロちゃんめっちゃはええ！！中1のタイムじゃねえし。歴代記録もんじゃね？てかスパイクじゃなく学校指定の運動靴なのに・・・

運動神経抜群で料理もできる。

自分の弟も十分チートなんじゃないと思う今日この頃である。

次の日、授業も終わって放課後。凜ちゃんと一成も今日は来てくれた。

「・・・いつの間にソファとか持ちこんだのよ。」

「今朝や。」

「パソコンもあるぞ。」

「それも今朝や。昼には先生からネットを繋げる許可も得てきたで。」

「

意外に行動派である。しかし、これぐらいでないと特許競争には勝ち抜けないのだよ。

「で？何するの？」

「せやから。なんか作るんよ。」

「なんかって何よ。」

「何でもいいねん。なんでもいいから作る喜びを感じるんや。」

そう。作ることで、達成感と充実感を得るのが目的なのだ。

「参考程度に、俺が作ってきたものな。」

そう言つて机の上にモノを並べる。

ハンカチ、セーター、本棚、プラモ、ゲーム、からくり人形……
などなどである。

「……これあんたが全部作ったの？」

「そやで？ちなみに机も俺が作った。」

「……凄い才能だな。」

これには流石の二人も少し驚く。普通ではないと思つていた凜も、すごい奴だと思つていた一成でもある。

「今日は、珈琲作つてシロちゃんが作ったケーキでお茶しよか。」

「……そんなんでもいいの？」

「おう。なんでもありや。一成はケーキとか甘いのが好きか？」

「ん？大丈夫だが……」

「そりゃよかつた。甘いのが苦手かと思つたわ。」

「別に平気だぞ？まあ……どっちかと言うと和菓子の方が好きだが

な。」

「マジか。何が一番好き？」

「ふむ。大判焼とかはかなりの好みであると自覚するが……」

「大判焼きか。俺はこしあんが好きやの。クリームは邪道じゃ。和菓子は餡子なんじゃよ!!」

「っ！流石は晋吾。分かっているではないか。」

「凜ちゃんは何が好き？」

「私？……辛いのか好きよ。」

「マジで？意外や。」

「

こんな感じで今日もまったりしてと過ごしていた。

ゴールデンウィークの最中。親父がまた風邪を引いた。結構な高熱であった。

旅行に行くつもりだったが、もちろん中止。親父は申し訳なさそうにしていた。

旅行にいけなかったことより、ゆっくり休んで速く良くなれ。

姉ちゃんやシロちゃんも心配してるやろ？

黄金週間も終わり、親父の風邪も治った頃、中学始めの中間テストが近づいてきた。

「フッフツ。今度こそ完膚なく叩きのめしてあげるわ。」

「フツ。その減らず口を叩けるのは今のうちだ。」

青春ドラマを繰り広げる凧ちゃん成一成。しかし中学の中間テストにすら全力で当たるその姿勢。好意に値するぞ。

「じゃさ、賭けしようぜ。賭け。」

「賭け？」

「しかし、そのような疚しいことは……」

「あら？柳洞くんは負けるのが怖いのかしら？いいのよ。怖かったらやめても。」

「フンツ！いいだろう。その賭けとやら、受けてやるわ。」

「3人の中で全教科合計で、一番点数の低かった人が、今度お茶する時の茶つけ買ってくるってことでええな。」

そして、テストも終了し、テスト返却。

凧。 5科合計485点。平均97点。

一成。 5科合計484点。平均96.8点。

晋吾。 5科合計500点。平均100点。当たり前だ。

「勝った〜。」

「ちよつと待ちなさい！何よ全教科100点って!!」

「確か晋吾はテスト中、ほとんど寝ていたような気がしたが……」

「

センター試験の作成に関わったこともある晋吾には死角がなかった
のであった。

ちなみに周りは何この超次元空間。と思っていた。

ついでにシロちゃんは5科合計428点。平均85・6点と普通に
優秀だった。

「家庭教師がよかつたんだよ。」

とは士郎の談。まあ、晋吾に大河と教える人は沢山いますからね。

第13話。変人の中学生活。（後書き）

同好会を作ってみた。イメージはスケッチ団的なまったり感。
次回はシロちゃんのお話。

第14話 土郎と変人の一日。(前書き)

今回はシロちゃんの話。

第14話 士郎と変人の一日。

士郎と晋吾は所謂二卵性双生児である。

日本人の癖に赤い髪の士郎に対し、晋吾は黒い。士郎よりも晋吾は若干釣り目。晋吾の方が体重が重い。

このほかの外見は背丈も一緒な二人。しかし、内面はだいぶ違う。

晋吾は「変な子」「変わった子」。士郎は「いい子」「ガンバリ屋さん」といったところが町内の評判。

士郎は可愛いらしい笑顔と、何に対しても一生懸命なところが、おばさまたちのハートを掴んだらしく、

商店街ではある意味アイドルと化している。

晋吾はあっちをうろつろ、こっちをうろつろと散歩に出かけるため様々な場所で見られ、

着ぐるみをきて、3m級の木によじ登って蝉ごっこなどしていたり等、某超幼稚園児みたいなこともしているのも発見はされているからだ。

本人としては、知識を蓄えることを最優先していた前世の少年期の分も、遊び徹すつもりだったらしい。

少し晋吾の前世の話をする、彼が遊び始めたのは高校に入ってか

ら。

本人曰く

「いい友人に出会えた」

とのこと。まあ、その友人はタダのオタクであったのだが……

士郎は兄によって育ったと言って過言ではない。

兄にあやされ、兄に教わり、兄に怒られ、兄に虐められ、兄に可愛がれ、その結果、兄に懐いた。

しかし、今、士郎の中で一番であった兄の存在を脅かす存在がいる。

その名を、遠坂 凛と言う。

ぶっちゃけ初恋であった

そこで思った、確かに自分の兄は偉大である。

しかし、兄の後ろでウジウジしている姿を見て、彼女はどう思うか？
おそらく、自分は兄の引き立て役にしかならないであろう。そう土
郎は思い立ち。

始めてであるう兄に対する『反逆』を行うのであった。

「ニイちゃん。ニイちゃん。」

「ん？なんやシロちゃん。」

「兄貴って呼んでいい？」（ドキドキ）

「キモいわボケ。」

……シヨックで二日間落ち込んだ。「兄貴」はどうしても嫌ら
しい。（筋肉を想像してしまうとのこと）

なんとか「兄さん」としてもらつ許可を得た。それでいいのか土郎。そんなんでいいのか土郎。

家での土郎はさておき、学校での土郎は実に人気者である。

100mを11秒前半、200m24秒台、400m53秒で走るだけでなく、走り幅跳びを6m飛ぶ

陸上部のスーパールーキー。と言うよりも怪童と言つたらいいか？

運動だけでなく成績優秀、赤い髪が人の注目を集め、顔も悪くなくむしろいい方。

さらに性格は優しく、他者を気につけ、苦になる仕事を厭わない。

こんな奴が現実にいるのか？と疑いたくなる奴である。

また、土郎の朝は早い。彼の一日を追ってみようと思う。

朝4時、土郎は目を覚める。そして運動着に着替えランニングを開始。

周囲を山に囲まれ、アップダウンが激しい深山町を一周。

この間、晋吾に教わつた通り、有酸素運動ランニングと無酸素運動ダッシュを繰り返して行っている。

5時、朝食と弁当の準備を始める。同時に晋吾起床。バットを持って道場に行き、素振りを始める。

5時30分、舞弥姉ちゃん起床。手伝ってもらいながら一緒に調理を開始。

6時、3人で朝食。6時30分、士郎は陸上部の朝練に参加するため登校。

7時、イリヤ起床。3人で朝食。

8時、くダネ！をつけ、司会の小倉さんと「朝の挨拶」をしてから晋吾登校。

イリヤと舞弥はそのままテレビ観賞。

8時30分、晋吾学校到着。士郎朝練終了。8時40分、HR開始

8時55分、1限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、睡眠開始。9時45分、1限終了。晋吾起床。

9時55分、2限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、睡眠開始。10時45分、2限終了。晋吾起床。

10時55分、3限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、睡眠開始。11時45分、3限終了。晋吾起床。

11時55分、4限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、体育のため力加減に気をつけながら、はっちゃける。士郎、

兄の校庭での活躍を観戦。

12時45分、4限終了。晋吾、いい汗かいた。士郎、ノートを友人の間桐慎二に借りる。

12時50分、昼食の時間。晋吾、凜、一成とともに昼食を取る。士郎、友人の間桐慎二と昼食を取る。

13時30分、5限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、何かをひらめいたらしく、ノートに書き始める。

14時20分、5限終了。晋吾、会心の出来具合に満足する。

14時30分、6限開始。士郎、ノートを開き真剣に授業を聞く。晋吾、ノートに何かを書き始める。

14時40分、晋吾、違うことをしているのがバレる。

何をしているとの質問に、現状の素材で、どうしたら駆動部の滑らかさを出せるのか、模索していました。と返し、教師を困らせる。

15時20分、6限終了。15時25分、清掃開始。士郎、生き生きとした顔で掃除をしていく。晋吾、意外に真面目に掃除をする。

15時35分、清掃終了。15時40分、SHR開始。

16時、部活動開始。士郎、アップを開始。晋吾、今日は一人で同好会に参加。マニピュレータの作成に着手。

16時30分、士郎、ラダートレーニングに取り組み。晋吾、呻き

始める。

17時30分、士郎、20mシャトルランを開始。

晋吾、結局設計に納得がいかず、授業中に書いた設計図を破棄。気分が乗らないため下校。

18時、士郎、100m10本ダッシュ開始。終了後、練習終了。
晋吾、帰宅。

18時40分、士郎、終礼終了後、下校。19時、商店街マウント深山で買い物を開始。おばちゃん、おじちゃん達からいろんな物を貰って帰る。

19時30分、士郎、帰宅。着替えた後、調理準備。切嗣が急かし始める。大河訪問。二人で騒ぎ始める。

20時、切嗣と大河がうろろし始める。晋吾にじっとしてると怒られる。舞弥とイリヤはどっちが大人であるか考え込んでしまう。

20時20分、6人で夕食。晋吾が「親父、今日は何時に起きたん？」と質問し、「・・・12時」と答える切嗣

完全にダメ人間である。

21時、大河は帰宅、士郎は宿題開始。舞弥、大河はテレビ観賞。
イリヤ、切嗣、晋吾はゲームをし始める。

21時30分、風呂の時間。レディファーストの衛宮家は、舞弥、イリヤ and キリツグ、士郎、晋吾の順番である。

22時、イリヤはキリツグ共に就寝。士郎と舞弥は土蔵にて魔術の練習を開始。晋吾は部屋で研究開始。

「よし、強化してみる。」

「トレース 同調、オン 開始」

「構成材質、解明」

「構成材質、補強」

「トレース 全工程、オフ 完了」

丸めた新聞紙を強化する士郎。

「どうだい舞弥姉ちゃん！」

「うん。だいぶ良くなってきたな。失敗することも減ってきた。」

「へへっ」

「しかし、実践で使うとなればもっと早くなければならぬからな。」

「

「そうだな。精進あるのみだっ。」

「フツ、そのいきだ。」

数年間強化の魔術を訓練してきたけど、ようやく形になった。舞弥姉ちゃんにつきっきりで教えて貰ってたからだな。

「ありがと。舞弥姉ちゃん。」

「いきなりどうした。」

「いや。俺がここまでできるようになったのも、舞弥姉ちゃんのおかげだから。お礼を言いたくって」

「そんなのはいい。私としては始めての弟子だからな。楽しくやらせてもらっているよ。」

でも、舞弥姉ちゃんに教えてもらってなかったら、俺は全然できなかったような気がする。

「まあ、私が教えられるのは強化のみだ。あとはイリヤに聞いてくれ。」

「うーん。姉ちゃんもよくわからないって言われちゃったけど・・・」

「仕方ない。それだけのものなんだよ。」

そういつて立ち去る姉ちゃん。フウ、どれ、最後にいっちょやってみるか。

「
トレース
投影、開始」

第14話 士郎と変人の一日。(後書き)

一応、凜、一成、士郎、慎二、桜は全員が同じ学校になります。普通、凜と桜は一緒の可能性が低いですが、協約は『深く』関わることを禁ずるだから一緒の学校ぐらい問題ないはず、現に高校一緒だし大丈夫だろう。

ちなみに前回、一成が晋吾を自ら認知できた理由としては、一成がカリスマC持ちという設定。無効じゃないけど、若干レジストしている状態。晋吾に対しては、なんだこいつなんかすげえやつ。という印象。また一成と凜ちゃんは、家の関係で面識あり。という設定。

感想にもあったが、本作の士郎にはアヴァロンがないため、属性が『剣』ではない。

しかし、できるだけ変えないようにしたいため、似ている属性にしてみる。

たぶん想像のつく方はいるだろうが、聖杯戦争が始まるまで、解答はしばらくお待ちください。

もちろん固有結界も違う。兄の影響がでかすぎるのだよ。そんなんでいいのか士郎。ってぐらいにね(笑)

第15話 変人と友人。（前書き）

原作に入るのはまだ先になりそう。

ここからは中1・中2・中3・高1・高2まで飛ばさずにやるつもりだからだ。

簡単に言う途中月姫編とかメルブラ編とかやるうと考えているからです。

ぶっちゃけ、やる事が確定したのさ。

第15話 変人と友人。

6月の雨と湿気がうざくなる数日が過ぎ、7月初頭、期末テストが近くなる頃の話。

「シロちゃん1年で唯一、7月下旬の大会に出られるんやって。」
「へえ。すごいじゃない。」

「最近の練習きつくてテスト勉強が面倒ってゆうてたわ。」

しかし、普通ではない衛宮家では魔術による治療により、一日の疲れをある程度取ってるので、他の子に比べて辛くないだろう。

疲れを全て取らないのは、姉ちゃん曰く、自然治癒力を強めるためのこと。

疲れ切った体を魔術である程度治療することにより、「このぐらいは回復する。」と体に覚えさせ、さらに超回復を誘発する。

……どんどんシロちゃんが遠い存在になっていきそうな予感。

「士郎？確か……」

「俺の双子の弟や。めっちゃいい奴やで？多分一成も気にいるわ。」

「そうか。会うのが楽しみだな。」

そう言ってイケメンスマイルをする一成。ヤメテよね。そんな顔されたら、衝動的にビンタしたくなるだろ？

「シロちゃんなら全国いけるで？全国行ったら家族で応援に行くん

よ。」

「フツ、それはいいな。」

「またもイケメンスマイルをする一成。なんだ？ツツコミ待ちなのか？ビンタして欲しいのか？」

「それよりも、私たちは期末テストよ！」

「えゝまたヤル気なん？」

「当ったり前でしょ！？負けたままでは遠坂の名が廃るわ。」

「名門のプライドって奴ですかい？いやいや、ただの負けず嫌いでしょう。」

「しかし凜ちゃんオーラはそのただの負けず嫌いですら、魅力に変えてしまうから怖い。ほら周りのみんなが見とれてる。」

「ならば、俺も参加させてもらおう。」

「へえ、また負けに来るのね？」

「フツ、次は君が負けるのさ。」

「ほならら教科合計でいっちゃん上の奴が勝ちや。ビリはまた茶うけな。」

凜は思った、

「授業中寝てばかりのこいつには絶対に負けん！アベレージ・ワンの名に賭けてええ！！」

「……と」

ドモン・カッシュも顔負けの熱血漢である。

そして、運命の日（タダのテスト返却日）が訪れた……

凜。5教科合計497点。平均99.4点。9教科合計897点。
平均約99.7点。

一成。5教科合計498点。平均99.6点。9教科合計883点。
平均約98.1点。

晋吾。5教科合計500点。平均100点。当たり前。

9教科合計680点。平均約75.6点。何が起きた……

美術30点（配分30点の絵しか描いてない。熱くなりすぎた）音
楽30点（完全に遊んでいた。歌うのは得意。）

体育20点（ノー勉強かつ、前世とは微妙にルール等が変わっていた。
）家庭科100点（実はこの教科好き。）

死角ありまくりである。

「勝った〜」

「ちよつと待ったあー!!」

凜ちゃん。猫がかぶれてないぞ。

「可笑しいわよね？可笑しいわよねえ？これで負けとか納得いかないわー！」

凜ちゃんはぬこふえいすを床に叩きつけて抗議を行う。

「何言ってるんや。俺はちゃくんと5教科って言ったで？」
「グウツ・・ねえ、貴方達も納得いかないわよねえ？」

周りのクラスメイトを味方につけようと、撫で声で脅迫と言つ名の質問をする凜ちゃん。

必死である。クラスメイトも必死に首を縦に振る。美人の笑顔（黒い）には凄味があるのだよ。

「凜ちゃん。負けは負けやで？それともそんなに茶うけ買うのが嫌か？遠坂家の人間は金払いが悪いのお。」

「くつ、屈辱ね・・いいわ。茶うけの1つや2つ！どつと言つことはないわー！！」

「凜ちゃんかっけー」

クラスメイトは「頼むから巻きこまんでくれ」と、心を一つにしたそう。

短縮授業に入る前の放課後、同好会には凜の姿が見えた。

「今日は何するの?」

物を作ることに意外にハマった凜であった。最近の趣味はパッチワーク。おばちゃん臭いと言ってはいけない。

「今日は、珈琲作っておしまい。」

「えー。」

「しかし!映画鑑賞を始める!!」

「映画?」

そう。映画である。何せテレビもない。パソコンもない。電話は黒電話。と言う家に住んでいる凜。

AV機器が全くないのである。昭和ですらない。カラーテレビぐらい置いておけよ。

「ジブリ見るでジブリ。」

「じぶり?」

そうジブリである。有言実行なのですよ。

「手始めにトトロからせ。」

観賞中

「どっやっただ？」

「ん・・まあ。面白いんじゃない？」

首を一回も動かさず集中してた癖に何を言う。

「心が温まるよね。ぽかぽかする。」

「・・・そうね。」

「夢だけどー!!」

「・・・?・・・っ!夢じゃなかったー!!」

「夢だけどー!」

「夢じゃなかったー!」

ノリのいい凧であった。その後、トトロのぬいぐるみを作って凧ちやんにあげた。

いらないけど、別に貰ってあげてもいいわよ。とか言われた。ツンデレ乙。

生徒会選挙と言つ名の出来レースもおわり、短縮授業もおわり、速いことで終業式。

一成は生徒会に書記として入った。応援演説してくれて頼まれた

けど全力で凜ちゃんに押し付けた。

二人とも嫌がってたけど、俺が褒めまくって押しまくったらヤル気
にやってた。ハツハツハ、二人とも単純だな。

通知表が帰ってきた。けど、凜ちゃんも一成も5段階中4とか5ば
つかでいじりようがない。

けど二人はやれ何が4だとかここが5じゃないとか言い合いをして
いる。お前ら声を小さくしろ。周りに気を使いなさい!!

俺?聞くまでもない。5教科は5。家庭科も5。他が3。

別に学校の成績で人間の優悪つくとは思っていないので、案外どう
でもいい。

けど、先生のコメント欄いっぱい「授業中寝るな。違うことをす
るな。」と大きく書かれた。

少し反省。二学期はたぶん起きます。だって寒いじゃん?

あとシロちゃんがどんな成績でも俺は褒める。我が家の教育方針は
指導は厳しくスパルタで、結果に対しては褒めて伸ばす。ですから。

「成績はどうだってええ。夏やで?夏休みや!」

「そう言えばうちに泊まるって話だったな。」

「おうよ!お世話になります。」

「何、友人が泊まりに来るのは初めてだからな。俺も楽しみだ。」

例の如くイケメンスマイルをする一成。落ち着け!落ち着け俺の右

手！！と邪気眼的なノリでビンタする衝動を抑える。

お泊まりの話を二人でしていると、ちらっちらっ、とこっちをちら見する凜ちゃん。混じりたそうである。

「凜ちゃん家にも遊びに行くで〜」

「え．．ええっ!？」

驚く凜ちゃん。いや、ドンだけ驚いてるんだよ。

「またお茶でもしよか。」

「．．．どつちかと言うとあなたが押し掛けてきたんじゃない。」

夏休みか〜。青春じゃのお〜。家族で海も山も行く予定だし、楽しみだ。

青春を謳歌すべく、これからの日々に関心をふくらませる晋吾であった。

第15話 変人と友人。(後書き)

パッチワークが趣味になった凜ちゃん。家でもちくちくやっている。

トトロの話。他にもウ〜〜ンバツ！（芽を出す体操）とか
「メ〜イちゅあ〜ん」（おばあちゃんの真似）とか二人でしていた。

次回はもちろん夏休みのお話。

第16話。変人の夏休み。前編。（前書き）

風邪を引いて一週間の間が空いてしまった。

今回は夏休み前半の回。夏休み編を2回にわけること。

第16話 変人の夏休み。前編。

夏休み初日。

ピンポーン。ピンポーン。ピポピポ……

「……………何よ。」

いつもの様に、不機嫌な口調でインターホンに出る凜ちゃん。

「遊びに来たで。」

「……………もう別にいいけど、インターホンで遊ばないでくれない？」

「無・理。」（キラッ）

凜曰く、凄い笑顔だったとのこと。

「で？何しに来たの？」

「遊びに来たんよ。」

「……………何しに？」

「遊びに。」

「……………質問が悪かったかしら。何して遊ぶの？」

「……………凜ちゃんて遊ぶって言ったらどどつするのよ？」

「殴ろうかしら。」

「凜ちゃん怖いわ。」

グダグダである。

「ぶっちゃけると気分で来やした。」

ハア、つと溜息をつく凜ちゃん。

「なあなあ。凜ちゃん。」

「何よ。」

「ふと思ったんやけど、凜ちゃん生活費って何で稼いでるん？」

「……稼いでない。」

マジか。家の雰囲気親がいないって分かったけど、まさか稼ぎがないとは思わなかった。

「あれか。遺産的な奴か。」

「そうよ。悪い？」

「別に悪くないで。遠坂の金を遠坂の人間がつこうて何が悪いんじや。」

「……ところで、衛宮はどうしてるの？」

「うち？うちは……死徒ぬつ殺してお金貰った。」

あとで聞いた話だが、関東での依頼額は億いってたらしい。どんだけだ。

「死徒？」

「うん死徒。」

「死徒？」

「うん死徒。」

なんだこの会話……

「あなたのお父さんってそんなに強かったの？」

「いや、親父は使えねえ。」

「え？じゃあ誰が……」

「俺や俺。」

「は？」

「It's me Shingo」

何故か首をかしげている凧ちゃん。目が「何を言ってるのかしら」の子？」と言っている。

「金の話は止めや止め。」

「……そうね。やめましょ。」

説明が面倒臭いことになりそうだったので、触れないことにした。

「凧ちゃんは今、魔術のお師匠さんとかいるん？」

話題を変えてみる。ちなみに俺は全力で魔術の勉強から逃げています。だって面倒なのさ。

「今はいないけど、一応、父に教わっていたわ。」

「ふん。ほなら今は教えてもらう人はいないんか。」

「魔術は一人で勉強中って所ね。」

「魔術は？他にも習ってるたりしてるん？」

「……相変わらず変なところあざといのね。護身用として拳法習ってるの。すつごくいいけ好かない奴にね……」

「ほ」。性格ねじ曲がってるんやな。」

「ねじ曲がるってもんじゃないわ。そうね……なんて言うのかしら

「？」

「グニャーって感じ？」

「そうね・・・グシャーって感じかしら？」

とりあえず壊滅的って言いたいのですね。わかります。

「そんなに教わってるんか。大変だな凜ちゃん。」

「同情でも、気持ちは貰っておくわ。」

「拳法ってどんな感じなん？エイシャオラ！とかハイヤアア！！とか言っん？」

「どんな偏見よ・・・。」

「掛け声的な偏見よ。」

凜ちゃんがそんなことやってたらわりとシユールなんだが・・・

「ところであなたは何か教わっているの？」

「ほ？俺？なんも。」

「・・・ホントに？」

「あえて言えば、剣道の道場に連れてかれるぐらいかの？」

「へえ、剣道なんてやるんだ。」

意外そうにつぶやく凜ちゃん。

「おう。始めてからなんだかんだで4年か？」

「強いのか？」

「さあ？真面目にはやってないけどな。」

「ハアー、あなたらしいって言えばそこまで何だけど・・・。」

まあ、死徒を殺せるぐらいには強いんじゃない？

グダグダと凜ちゃんと話した日から数日後、シロちゃんの試合を姉ちゃんと一緒に見に行った。

親父？寝てます。舞弥姉ちゃんはバイトの時間。たいがいの紹介でコペンハーゲンって酒屋でバイトしている。

「おい。シロちゃん」

「シロー。」

「あつ、ニイさん。姉ちゃん。」

シロちゃんは俺のことをニイさんと呼ぶようになった癖に、姉ちゃんのこととは姉ちゃんと呼ぶ。

ぐぐぐ……ロリーでカワイイからって調子に乗るなよ！！

「シロちゃん頑張れよー。」

「頑張るだけじゃダメよ。シロウ。一番よ一番。分かった？」

「ははっ……任せてよ姉ちゃん。」

むんっ。と力瘤をみせるシロちゃん。おおっ、自信が満ち溢れてるぜ。

ちなみに姉ちゃんは俺の膝の上に座っている。悲しいかな、背的に椅子に座りながらじゃ見えないのだよ。

俺の膝の上に座り、陸上トラックが見えるようになってご満悦の姉

ちゃん。……単純だのお。

side 衛宮 士郎

今日はニイさんたちが大会を見にきた。朝起きた時はなんか気が抜けてて、こんな緊張感で大丈夫かな？

って不安に思ったけど、ニイさん達がいると考えると少し緊張してきた。

よし！集中して始めの100m、頑張るぞ！！

「なあ……衛宮。スタンドに居るのってお前の……」

「ゴメン。集中したいんだ。後でね。」

「お……おう。」

そう言ってアップを開始する士郎。おいて行かれる部員。

「なんか衛宮の奴スゲえ気合入ってるな。」

「聞いた話だと、衛宮って超ブラコンらしいぜ？兄貴来て気合でも

入ったんじゃない？」

「マジで？でもあの天才なら分かる気がするかも・・・」

「影の薄い変な奴だけど、5教科中間期末オール1000だろ？兄じやなくても尊敬できるぜ。」

「弟の方も勉強できるし、足くそ速ええし、なにこの兄弟・・・」
「衛宮はうちの一年で唯一共通で走るからな。」

S I D E O U T

「シンゴ。この共通って何？」

姉ちゃんが今日の競技スケジュールを持って聞いてきた。

「中学生は1年生と2・3年生で体力とかが全然違うからの、それで分けてるんやけど、共通はその括りをなくすんじや。」

「へ。でもシロウは共通でも走るのよね？」

「おう。シロちゃん速いからの。」

そう言うと、姉ちゃんは嬉しそうに胸をはる。どうだ。私の弟凄いだろ？と言ってるようである。

「シロウはいつ走るの？」

「待つとれ、今マーカーで印つけといてやるさかい。」

えくと1年1000mだろ、共通200mだろ、共通400mだろ、共通4×100mリレーだろ。・・・たくさん走るなシロちゃん。

「これだけ？」

「いや、姉ちゃん。普通1つ2つじゃないんか？」

「そうなの？」

「俺もそこまで陸上詳しくないからわからん。」

二人で話しながら待っているとシロちゃんの番になった。アナウンスでシロちゃんの名前が呼ばれ、応援の声が沸く。

「シロ〜!!」

「シロちゃんガンバー!!」

シロちゃんはスタートが得意とのこと、見せてもらおうじゃないの。

「よ〜い。」

審判の声で、選手たちはクラウチングスタートの姿勢を作り、独特の緊張感を生む。

バン!と言うピストルの音で一斉にスタート・・・いや、士郎が体一つ抜き出ている。

余りにもスタートの速さに競技場に感嘆の声が上がり、イリヤは凄い凄いと興奮しっぱなし。晋吾は固唾をのんでジッと見守っている。見る見るうちに後続を置いて行き、80mの地点で断トツのトップ。後ろを見て確認してから、ペースを少し落してゴールに駆け抜ける。

それでもタイムは11秒22。会場のほとんどの人が苦笑いしている。イリヤは膝の上で「シロウが一番だ」と飛び跳ねてる。危ない。

晋吾はイリヤのキャッチに集中している。前が見えない。

結局シロちゃんの大会の結果は、1年1000m優勝。共通リレー2位。の成績を残した。2000mと4000mはまだまだとのこと。

しかし、1000mでは全国大会の標準記録を突破。全国でもシロちゃんガンバ!!

8月の第1週。一成の家である柳洞寺に泊まりに来た。

「1日ですがお世話になります。」

「いらっしやい。よく来たね。」

一成の兄である零観さんが迎えてくれた。一成の父はこの住職なのだが、他山に修行に行っているため、彼が代理を務めている。

凄いガッテン系の外見である。兄貴殿と呼ばせてもらおう。

離れの一室を泊まる部屋として貸してくれるそうので、荷物を置き、着替える。

「……なぜ和服に着替えてきたのだ？」

「ほ？お寺に泊まんのに洋服でうるつくよりも、和服で居た方が粋やる？」

「粋って……」

「ハツハツハ！一成が連れてきた友人は豪く『粹』な坊主だな！？」
「兄貴殿も粹な『坊主』だと思っで？」
「ハツハツハ！愉快愉快！！」

お寺ではすることは少なく、とりあえず周りを散歩することに。

「なんもなくてつまらんだろ？」

「そんなことあらへんよ。散歩好きやし、特になんもせへんでも、のんびりした空気は好きやしの。それに・・・友達と一緒に時間を過ごすことが一番重要さかい。」

「・・・そうか。」

広い境内と立派な伽藍を見るだけでも楽しめるし、裏の深い林の中の裏参道を行くと、林の中に深山町屈指の面積の墓地がある。

さらに、そこには郊外の森を一望できる高台がある。絶景である。

「素晴らしいの。」

「ああ。ここの風景は素直にいいと思うな。」

「一成。」

「ん？」

「中々楽しめるやんかお前んち。」

「・・・そうだな。」

暗くなってくるまでのんびり景色を楽しんだ後、修行僧の方たちと一緒に夕飯を食べた。

完全に酒宴だったが、それでいいのかお寺の癖に・・・

何故か一成の料理は質素だった。曰く、小坊主に食わせる贅沢は無

い。と言われてるとか。

俺？お客様だからって結構豪華でした。美味しく頂きました。

一成。今度うちに招待するからそんなにちらちら俺の食事見んな。え？何？素直に嬉しい？

寝る前に一成と暮を打つことに。暮は強くもなく弱くもなくといったところ。途中で考えるの面倒になるんだよね？

テーブルゲームで真面目になるのは麻雀ぐらいです。

2、3局打って就寝。明日には帰る。ふむ、楽しかったの、心が穏やかになると言っか、また来ようって気になるぜ。

……寺じゃなくて宿屋とかにすればいいのに。でも始めの長い石段のせいでダメか？残念だ。

そのころ、衛宮邸。

「ニイさん大丈夫かな？迷惑かけてないかな？」

「シンゴが迷惑かけない訳ないでしょ？」

「いやいや、晋吾はちゃんとした子だから大丈夫さ。」

兄を心配する弟、日頃迷惑をかけられることが多い義姉（小）、何気に子供達を良く見ている義父。

「心配するな士郎。晋吾はあれでも、ちゃんとするところはちゃんとする。」

なだめる義姉（大）。いつもの衛宮家である。が、普段騒がしい奴がいないでの静かである。

「しかし、静かね。」

「そうだね。晋吾がいないと静かだよね。」

「今日は藤ねえもいないしね。」

「どうして大河は今日いないんだ？」

「今日は仕事の用事で遅くなるので実家で食べると電話がありました。」

「へ〜先生頑張ってるんだ。」

今年から高校の先生になった大河。彼女が先生になると言った時の晋吾と士郎のうろたえっぷりは見ものであった。

「俺、藤ねえが担任とか絶対やだな。」

「そうかな？いい先生になると思うけどな僕は。」

親父の前ではいい子ちゃんにしてるからな。と士郎は思った。

「授業中に『士郎！お姉ちゃんの言うこと聞きなさい！』とか言われそう……。」

「いいそうね。」

「いいそうだな。」

「え〜そうかな〜？」

士郎は知らない。そう遠くない未来、彼女が担任の先生になること

を・・・

とりあえず、ガンバレ士郎。

第16話 変人の夏休み。前編。（後書き）

凜の稼ぎについて。現在の凜のお金の入り処は、身元引受人の言峰から生活費、時代遅れ気味の父の魔術式の特許料。そして遠坂の遺産。以上。

宝石や魔術書を購入するため非常にカツカツである。

中学生なのでバイトも出来ない。貧乏ここに極まり。

衛宮家は少し裕福。死徒狩りの報酬は多く、アインツベルンの援助も復活した。

晋吾と一成。若者の過ごし方じゃない。晋吾はともかく、それでいいのか一成。

今回は衛宮家の旅行（海と山）。士郎の全国大会。をお送りします。

第17話。変人の夏休み。後編。（前書き）

2週間スキーに行つて1週間でようやく完成。

約一カ月近く空いてしまつた……

とりあえず夏休み編終了です。

第17話 変人の夏休み。後編。

「うーみ〜だ〜!!」

「恥ずかしいからやめなさい!!」

姉ちゃんに怒られた。シロちゃんは苦笑いしている。去年まで一緒にやってくれてたのに・・・大人になりやがって。

本日衛宮家は姉ちゃんが来た3年前から毎年恒例になっている海水浴に来ています。

姉ちゃんは泳ぐの得意。確かに泳ぐのは上手い。しかし、この海岸ではその真の実力を発揮できず・・・

そんなに広い所じゃないしね。ここ。

俺は泳ぐより砂遊びのほうが好き。俺が本気で作った砂の城は毎年オブジェの如くそびえ立ち、ある意味観光スポットと化している。

子供じゃないのだよ。アーティストなのだ。

舞弥姉ちゃんと親父は姉ちゃんと一緒に海水浴。はたから見ると父子、後妻さんである。・・・そう周りのおばちゃん達が話していた。

・・・そつとしておこうと思うんだ。

ひとしきり海水浴で楽しんだら、シロちゃんと釣りである。実はシロちゃん、大の釣り好きである。

なんて言うか・・・テンションが違う。

「このかかり・・・来たな！フィィイッシュ！！」

2年前、俺がグラ　ダー武蔵を思い出してフィィッシュ！！っていつてたらシロちゃんが真似した。

その後・・・こんな感じである。

「フツ、今日は食い付きがいい。フィィイッシュ！！」

誰だよお前。可愛かったシロちゃんを返せ。

今日はこうなった経過と、普通のシロちゃんを知っている常連さんしかいなくて良かった。

去年は針の筵だった。周りの目線が痛い・・・。シロちゃんが生き生きし過ぎて怒れない・・・。

まさかこんなにハマるとは思わなかった。確かに釣れた時は快感だが・・・。

スパイラル・キャストまでやらなくて正解だった。俺、よく自重したな。

釣りの結果は二人揃って結構釣れた。トラギス等数匹に、タコタコタコタコタコタコ。とりあえず今日はタコ祭りだ。

相変わらずシロちゃんはタコ釣るの上手いな。フィィッシュフィィッシュ騒いでも常連さんにあまり怒られないのはこの腕前にあるのだ。

ちなみに親父は姉ちゃんが暇だと愚図るので、舞弥姉ちゃんも含め3人で公園で遊んでいる。

親父。今日は子守りお疲れさん。帰ったら酌でもしてやるか。

「や〜ま〜だ〜!!」

「止めなさいって言ってるでしょ!?!」

「山田!?!山田さんやないか!?!」

「……少し黙りなさい。」

「イエス・マム!」

生命の危険を感じた。姉ちゃんの赤い眼がスツ……と細まり、ゴミを見る眼に変わる。

……怖い!!ちびりそうになった。お花つんできます。

今日は山登り。変わった岩がたくさんあると有名な山で、どうしてもみたくなくなつてな。

その変った岩、奇岩を見るためには、厳しい山道が待っている。登山口から終始急登が続くが、俺なら親父を背負っても余裕で登れる。

親父は体力がないから、車で俺らを登山口近くの駐車場まで送った後、ロープウェイで登山頂にて合流。流石の親父でも子供に背負われるのは勘弁とのこと。

舞弥姉ちゃんは保護者として同伴。シロちゃんは流石の体力でずんずん登って行く。姉ちゃんは基本俺が背負うが、時々背から降りて頑張って登っている。

「しっかし舞弥姉ちゃん。相変わらず山に慣れてる登り方じゃの。」
「昔、山越えの任務もあったからな。毎年思うがこうして景色を楽しみながら山を登るのはいいな。」

登山道からの展望は良く、山の壮麗さを感じさせる。山の景色を楽しみながらテンポよく登って行くと、2枚の大きな岩が重なりあった奇岩につく。

「ニイさん大きいねー。」

「んっ。素晴らしい!!」

岩と岩の間には大人がなんとか通り抜けられるだけの隙間があり、子供の俺らや、細身の舞弥姉ちゃんは普通に通り返けられることができた。

姉ちゃんもシロちゃんも自然の不思議に興奮気味である。

しばらくゆっくりした後、山道をサクサク進む。

前世では『普段全く運動してないんだからやめとけ』と言われていた山登りをサクサクと進めるなんて……

チートしていて良かった……贅沢な悩みとしては全然疲れないってところかな。

しかし、シロちゃん凄いな。確かに山登りは始めてじゃないし、辛そうな表情をしてるが普通に俺と舞弥姉ちゃんについて来てるし・

景色を楽しむために足を止めて、同時にシロちゃんを休ませながら登って行き、山上公園につく。

「キリツグ！」

「山登りはどうだった？イリヤ。」

「すっごくく疲れたわ。景色は楽しかったけど。」

「姉ちゃんちよこつとしか歩いてないやん。」

「背中にしがみ付くのだって疲れるのっ。」

「さいでっか。」

親父に体全体を使っていかに山道が大変で、景色が素晴らしかったかを説明する姉ちゃん。

俺とシロちゃんと舞弥姉ちゃんはそれを微笑ましく後ろで見ながら、山頂に続く遊歩道を歩く。

最高峰につき、そこでお昼を取ることに。今回はシロちゃんだけじゃなく、みんなで作ったお弁当である。

姉ちゃんが一番楽しみにしていた。初めての弁当作りだったしな。

・荷物がかさばるので親父が持ってくることになっていたのだが・・・

「弁当が転倒してとるわ。」

「それってダジャレ？」

「他意はなか。」

事実だしな。

かばんの中で転倒・・・ひっくり返っている弁当が見える。

親父よ。何をしたら弁当箱のふたが外れるんだ。

「・・・キリツグのバカっ。」

「ぐはっ!！」

姉ちゃんのつぶやきは親父の急所を抉ったようだ。(下ネタじゃないよっ!)

帰りの車の中でも親父が会話に参加しようとする、弁当の話を始め、親父にしゃべらせない姉ちゃん。

家につくまで終始無言の親父。今度遊園地に連れていくことで許してもらったとのこと。

まあ、今回は親父のせいだしな。せいぜい姉ちゃんのご機嫌を取ってくるんだな。

夏休みも終わりにさしかかった8月下旬。シロちゃんの全国大会の日である。

今年は隣県で行うため、みんなで応援に出かけようと思っていたのだが……

「38度9分か、結構高いのう。」

「うつつ。今日は士郎の一番なのに……」

親父が風邪でダウン。仕方がないので舞弥姉ちゃんも家で看病すること。

「全く、肝心な時に風邪なんか引いて！」

姉ちゃんのご立腹のご様子。

「まあ、風邪引いちゃったもんはしゃーないわ。しっかり休むんやで。」

「うつつん。僕の方も応援よろしくね。」

「おう。まかせ。」

電車を乗り継ぎ、競技場に向かうのだが、朝のどたばたのせいで微妙に間に合わんかもしれない。

「うつつ~~~~速く動いてよ!!」

「いや、電車が速くなったら怖いやろ。」

脱線してしまつての。

何とか開始前には着いたものの、もう競技者のコールが始まってい

た。

「シローーーーー!!! 頑張つてー!!!」

姉ちゃんの声援が届いたのかシロちゃんは会場を見渡す。

何とか見つけられたらしく、目線があつたので二人で目一杯手を振る。

コールが終わり、スタートブロックの調整をする競技者達。声援が続くが、準備が終わる者が増えるに従って、静まり返る。

そして、全員が終え、スターターがピストルを構えた時には競技場の外の音しか聞こえなくなった。

「よーい……」

例の如く、独特の緊張感の中でスタートを待つ……

バン！バン！！2発の銃声で会場からは感嘆の声が響く。

「え？え？どうしたの??」

「フライングじゃよ。シロちゃん緊張してるわ。」

俺の目はしっかりシロちゃんのフライングを捉えていた。これで見えなければいいんだけど……

気を取り直しての再スタート。再びスタートを待つ緊張感に触れる。
「よーい。」

バン！！と言うピストルの音で一斉にスタート・・・だが

「シロちゃん出遅れたな。」

「何やってるのよシローーーーー！！！」

スタートで完璧に出遅れて勝てるほどの『のび』をシロちゃんはもつてないからな。

残念だが、初めての全国は参加者中最下位で終わってしまった。

しかしまだシロちゃんは1年生。まだまださ。とりあえず今日は励ましてやらないと。

それにしても親父は風邪に成り易いな。家でごろごろし過ぎなんだよ。不健康極まりない。

今度人間ドックでもやらせるか。不健康な現実を思い知るといいさ。

第17話。変人の夏休み。後編。（後書き）

今回は釣りの話が一番やりたかった。

hollow ataraxiaはやってないからネタでしか知らんが、面白いものは面白いのだ

17フイイイイイイッシュ！おい後ろの人（ry

あれ？今回17話だ。なんという偶然！！17フイイイイイイッシュ！

タコはフラグ的なもの。

fatteでタコと言ったらあの人。zoreでも苦勞したそうな。

今回は2学期の話。体育祭文化祭とイベントいっぱい。

それ・・・全部やるのか・・・ネタ作りがー！！

第18話 変人と体育祭。(前書き)

お久しぶりです。帰ってきたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
ようやく書けたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
って感じです。

節電のため出来るだけパソコンは使わないようにしてたからですよ。

今回は体育祭までの話。文化祭は次回。

第18話 変人と体育祭。

夏休みが終え、本日から2学期となった。今日は始業式のために登校。

「おはよう一成。久しぶりじゃの。」

「ああ、お盆開け以来か。」

「凜ちゃんも久しぶりじゃの。」

「ええ、『1日』ぶりね。」

あああ？昨日も会っただろお前え。と言わんばかりに皮肉を込めて言う凜ちゃん。

おっと、ノリで言っちゃったぜ。

「なんだ、また遠坂と遊んでたのか。」

「何よ。文句あるの？」

「フツ。別に何も。不満はあるがな。」

「凜ちゃん家、いろんな本置いてあつて面白いんやで？」

「へえ、そうなのか。興味がわくな。」

「残念じゃが、日本語じゃのうて中国語とか英語とかが多いから成には読めへんよ。」

「むう、残念だ。」

「読んでいい前提で話を進めないでほしいわ。」

会話も切るような凜ちゃんの声で俺と一成は振り向く。

少し不機嫌な表情を浮かべる凜ちゃん。むう、どうした？

「あなただから読ませたのよ。他はダメよ。」

「だってさ一成。」

「そうか。ラブラブだな。」

「なっっ！」

「違うで一成。俺と凜ちゃんはマブマブしてるんや。」

「まぶまぶ？」

「おう。俺と凜ちゃんはマブダチやからの。」

一成は語る。晋吾の純粹さに目がくらんだと……

この時凜は思った。……マブダチってなに？

俗語に弱い凜であった。

学校が始まって2週間がすぎた頃、今日はたいがーに連れられて町剣道場に行くことになった。

俺が行くと言った訳ではない。基本、たいがーによる突撃を受けて連れていかれるのである。

断るとうだうだ愚図るから面倒なのだ。お兄さんは大人だから黙ってついて行きます。全く、しょうがない子ね。

「む、晋吾ではないか。」

「おう。晋吾やで。一成。」

道場に向かっていたら、道着を持った一成に会った。何故に道着？

「ん？これか？今から空手道場に行くつもりでな。」

道着をガン見してのを気づかれてしまったようだ。どうやら空手を習っている模様。

「なんや、空手なんかしてたんか。」

「まあな。晋吾はどこに行くんだ？」

「俺はお……。」

チラッとたいがーの方を見る。するとサムズアップして

「負けんじゃないわよ晋吾！」

なんてのたまってきた。空手道場で竹刀振り回せと？それとも素手でも負けんなってことか？負けないよ俺。

謎の言葉を解説していたら、たいがーはすでにいない。

「お？どこ行つた？」

「もう行つたぞ。夕飯には帰つてこいと言っていた。」

「……まあええ。結果的に逃げれたわ。」

「逃げれたつて……何から？」

「これや。」

そう言つて背中に背負う竹刀袋を見せる。

「そう言えば剣道をやつてるんだつたよな。」

「俺はあまり好きでなか。」

釘バット振り回すのは好きだな。

・・・タダの危ない人である。

「これからどうする？」

「家に帰ってももう。たいがーの追及が面倒になるだけやし・・・
ついて行ってもええ？」

「フツ。別にかまわんよ。なんなら、空手やるか？」

「遠慮しとくわ。痛いのが嫌いやし。」

「やはり剣道の防具は当たっても痛くないのか？」

「知らん。」

「知らんって・・・」

「せやかて当たったこと一度しかないからのう。」

唯一当たった時はたいがーと始めて試合した時。痛くはないが、怖い。

それ以来避けまくっている。日に日に少しずつだが速くなっている
たいがーの剣が怖い。剣道止めたい。

一方、一成は『こいつはどこにいても非常識なのか・・・』と変に
納得してしまうのであった

昨日、冬木空手道場に見学に行くつもりだったのだが……

「晋吾、何で昨日帰ったのだ？」

「何でっってお前さん。」

パチンと額に掌を打ちつけ、ふうーっと溜息をつく晋吾。

「道場に入ったらすぐに俺達と年代の女の子が、男相手にしてフルコン決めてるんやで？帰るだろ。常識的に考えて。略してjk。」

彼女はjcだろうが。

「美綴のバカ者……。」

一成はそう呟き、はぁーっと溜息をつく。

「美綴？」

「男相手に連撃を入れていた女の名だ。下心のある奴は軒並み叩きのめしているらしい。おかげであの道場は空手道場なのに男性門下生が少ないのだ。」

なるほど、空手道場が女の園になっているんですね。そこに入っていける一成がカッコいいと思います。

本日は晴天なり。本日は晴天なり。

「晴れやがったヨ・・・」

「ニイさんは本当に体育祭嫌いだね。」

「ああ嫌いや。なくなっただ方がいいと思うわ。ほんまに。」

本日は体育祭の日である。いつも思うが、小学生は運動会で中学なら体育祭になるのは何でだ。

『会』より『祭』にした方がカッコいいと言っんかこん畜生め。

運動ができるようになった今でも体育祭は嫌いだ。長年染み付いた嫌悪感はぬぐえないらしい。

「休みたいよー。休みたいよー。」

「でもニイさん。結構任されてるんでしょ？」

「おう。ヤル気なかったのに凜ちゃんが無理矢理・・・」

あの娘っ子。何を思ったかリーダーシップを取り始め、体育委員そっちのけで種目を振り分け始める始末。

・
なのに一成以外誰も文句を言わない。これだから魅力チートは・・・
結果、リレーに騎馬戦等といった主役となる種目に入れられてしまった。

何故か知らんがうちの中学は種目が多い。

個人種目が1000m走、2000m走、4000m走、15000m走、

走り高跳び、走り幅跳び。

陸上大会じゃないんだぞ。と声を大にして言いたい。

体力テストとかは適当にやったから100mなどの個人種目に入らなかつたのは不幸中の幸い。

でも足の速い奴らの自慰競技だと思っていた学級対抗選抜リレーに出る羽目になってしまったのが鬱だ。

しかし一成と凜ちゃんは異常。個人種目全部とか。プラス団体競技も何個か出る。あいつらマジでないわぁ。

まあシロちゃんもだが。まあね！シロちゃんはほらっ、陸上部のエースだからさ！仕方がないのだよ！仕方が！！

団体競技も騎馬戦、綱引き、大縄跳び、二人三脚リレー、障害物競争と言つ具合にラインアップが並び、一人何種目出るんだコレ？つて状態。

前世では毎年大縄跳びと障害物競争に出て、後はグダグダ観戦。つて感じだったのに……

「もう行くよ。ニイさん。」

「うがー。うにゅー。今日は鬱だー。テンションが大暴落。」

「今日のお弁当はニイさんが好きな物を選んだから元気出して。」

「……ちよつと元気だね。」

現金な奴である

「いち、にーい、さーん」

現在、障害物競争のグルグルバットに挑戦中の晋吾です。額にバットをつけ、バットを支点にグルグルと回る廻る。

参加動機はバット。どんだけバットが好きなんだお前とツッコまれそうだ。。

ぶつちやけ幾らグルグル回った所で俺の三半規管は狂わないので、この後どうするか困る。

笑いを取りに行ってもいいのだが、どっちかと言つと、俺は行動よりもトークで笑いを取る方が好きなので何とも言えない。

結局普通に歩こうと思う。まあ競争だし早歩きでいいか。

スタスタ歩いて行ったら観客からおおーっと驚きの声が沸く。何故かいたたまれない気分になる晋吾であった。

「凄いのね。気持ち悪くならないの？」
「いや、全く。」

競技が終了した後、凜ちゃんが話しかけてきた。

凜ちゃんは座る暇もないくらい行ったり来たりしている。人気者は大変だな。競技に参加してなくても立って応援に行かないといけな
いし。

一成は体育祭実行委員としてクラスの主力として慌ただしい一日を
過ごしている。応援しかできないけどガンバレ。超ガンバレ。

お昼である。晋吾はもちろん切嗣達と食べるのだが、ふと、凜はど
うするのだろうかと思った。

恐らく一人で食べるか、家族がこれなかった友人と食べるだろう。
そこで、凜のマブダチとしてどうするべきだと考えた。

「凜ちゃん。」

「……何よ?」

「一緒にご飯食わへん? 親父やシロちゃんもいるんやけど……」

「ご飯? ん〜。別にいいわよ。」

おおーっと何故かクラスメイトの歓声が沸く。なんでや。

凜ちゃんを連れて親父たちがいるところに行ってみるとシロちゃん
はもう来ていた。

「親父。凜ちゃんも一緒にええ?」

「凜ちゃん？おお・・・おお！ー！ー！ー！どござ遠慮せず」。

落ち着け親父。

シロちゃんも口を開けてビックリしてる。姉ちゃんズはふくと凜ちゃんを観察してるようだ。

「そう言えば姉ちゃん達は始めてやったの。綺麗なのが舞弥姉ちゃんで、可愛いのがイリヤ姉ちゃんや。」

舞弥姉ちゃんが軽く会釈すると、イリヤはニマニマと悪い笑みを浮かべる。

「あなたが・・・『遠坂』凜ね。」

「・・・含みのある言い方ね。」

「ええ。遠坂家の長女ですもの。興味がないと言ったらウソになるわ。」

表面上ではニコニコしているが、ギスギスとした空気を醸し出す。

「止めや二人とも。楽しく食べようや。」

「・・・そうね。」

「別に私は何もしてないわよ？」

「姉ちゃん。」

少し怒った声で注意をしたのだが、素知らぬ様子で親父の膝に座る姉ちゃん。

・・・この二人は一緒にしてはならない気がした。

混ざらない水と油じゃなく、混ぜるな危険の次亜塩素酸と塩酸みだいに。

何が言いたいかと言うと、周りに被害が出る。

シロちゃんが被害を受ける姿を安易に想像できるのは何故だろうか？

体育祭は順調にプログラムを進行していく。

個人競技では凜ちゃんとシロちゃんが三年生にも余裕で勝ち、無双状態。

おかげでうちのクラスとシロちゃんのクラスはほとんど僅差であり、負けず嫌いの凜ちゃんが静かに闘志を燃やしているのが感じられる。学級対抗選抜リレーではどのぐらいで走ればいいのかよくわからなかったが、偶々並列してバトンを渡されたため、同じような速度で走り、最後で抜くことにした。

一緒に走っていた子はサッカー部で俊足を売りにしていたらしく、後々部活の勧誘だかウザくなったのだが、今の晋吾にはこの体育祭を速く終わすことが重要だった。

最後の最後までシロちゃんのクラスとは接近戦を繰り広げ、とうとう最後の競技になった。

最後を飾るのは騎馬戦。男の戦場である。

「前に出過ぎだ！陣形を崩すな！！」

ワーワーと歓声が飛び合う中、指示を飛ばす一成。

大将は一成。と言うか陣形組むとかガチでやり過ぎだろお前。騎馬戦なんて適当に手当たり次第やりあうもんだろ普通。

「アイツ、マジになり過ぎやる。」

「何言つてんだよ晋吾。B組との直接対決なんだぜ？マジになんのも当たり前だぜ。」

上からの声にそんなもんか、と納得する。俺には体育会的なノリは生まれ変わったも理解できん。

ちなみに俺らはA組、シロちゃんはB組。シロちゃんは騎馬の上、俺は騎馬の先頭である。

思ったよりがちりしてると言う理由でなった。筋肉質の体を恨んだ。

さらに俺は陣形の一番先頭に位置する。一成からは一撃を入れろというありがたい言葉をいただいている。調子に乗るな。

思ったより体育会的なノリに酔っている一成がウザくなる晋吾だった。速く帰りたい。

とりあえず手加減に気をつけながら突進する。ルールは騎馬を崩すか、上に乗る者の鉢巻きを取るかであるため、有効である。

何騎か崩したり上の奴が奪ったりして、上の奴が俺ら超強えとか調子に乗っている頃、

シロちゃんが現れた！！

「衛宮か！！」

「なんや。」

「いや、お前のことじゃなくて・・・」

「ごめんニイさん。漫才しているときじゃないんだ。」

シロちゃんもマジになっている。やべえシロちゃん熱いな。ガチイケメン。

一成の時とは360度態度を変える晋吾であった。

ちなみにシロちゃんは騎馬の上である。上の奴とバトルを繰り広げるシロちゃん。

しかし、俺や舞弥姉ちゃんと戦闘訓練と一緒に受けていたシロちゃんは腕を伸ばしてくる上の奴、

・・・めんどいから上野でいいや。

上野の腕を受け流し、鉢巻きの奪取に成功するのだった。

「おお、やるなシロちゃん。」

「やるなじやねえよ。なんで体当たりしなかったんだよ。」

「何言ってるんや。対俺用最終兵器であるシロちゃんが出てきた瞬間に俺らの負けは決まってたんや。」

「なんだよそれ。」

「簡単な話よ。シロちゃんは・・・うちの台所を握っている。」
「っ・・・つまり?」

ゴクツと咽喉を鳴らす上野。俺の周りはノリのいい奴が多いな。

「機嫌を悪くさせる、怪我をさせる等のことが起きれば・・・力
ツプラーメン生活が待っている!」

「すまん俺が悪かった。」

上野も分かってくれたようだ。

ちなみにだが騎馬戦は俺らのクラスが勝った。大人げない一成が戦術を持って無双するシロちゃんを打ちとつたらしい。

とりあえず、終わったー！ー！ー！ー！やふう~~~~!!

しかし体育祭は高校も合わせると後5年ある。鬱だ。はげしく鬱だ。

体育祭が終わった後、シロちゃんが個人競技で勝ちまくる姿を見て調子に乗った親父が寿司をごちそうしてくれることになった。

お前の金じゃなくて爺ちゃんの金だろニート。と言ってやりたくないが黙っておいた。

よくよく、毎年親父がシロちゃんの活躍に調子に乗って寿司を食わせてくれるんじゃないか?と考えたら元気になった。

全くを持って現金な奴である。

第18話 変人と体育祭。(後書き)

今回は凧とマブマブする晋吾。 土郎のある意味衛宮家最強伝説を書きたかった。

ちなみに晋吾に家事スキルはない。 台所？火を見てるのは楽しいのね？って感じ。
すつつごく危ないよ！！

凧とイリヤを知り合わせた理由は、二人が知り合いなら聖杯戦争もつとカオスになるんじゃないかね？って考えたからだったりする。

第19話 変人の文化祭。(前書き)

今回は予告通り文化祭の話。り・・凜ちゃん・・・って感じ。

第19話 変人の文化祭。

ある週の日曜日。

ピンポーン。

「……………誰？」

いつもの来訪者はアホみたいに呼び鈴を鳴らすので、誰が来たのか若干ビビり気味の凜であった。

「俺だ。 土郎だ。」

「あら？土郎君？珍しいのね。」

「今日は練習がないんだ。」

いつもの来訪者からは毎週日曜日にも練習があると聞いていたけど、珍しい日もあるものだ。

何となく、貴重な日に感じて家に招きたくなる。

「いらっしやい。」

「いいのか？」

「ええ。 土郎君なら許してあげるわ。」

『許してあげる』の部分でいけない妄想をしてしまう土郎であった。

「……………」
「お？どうしたん？」
「どうしたの？リン？」
「な！ん！で！あなた達もいるのかしら？」

いつの間にか居て、士郎作の菓子を食べている晋吾とイリヤがいた。

確か玄関では士郎一人だったのに…

「凜ちゃんあんな。」

「……………何よ？」

「今日は日曜日なんや。」

「それは分かるわ。」

「日曜日なのに家でゴロゴロしておるんは、うちにいるヒッキーと同じや。」

「ゴロゴロなんかしてないわよ。それにヒッキーって何よ。」

「ヒッキーってのは引きこもりしてる奴のことや。」

「……………引きこもり。嫌な響きね。」

「それを感じるんは、自分が若干引きこもってるのを自覚してる証拠や。」

凜は衝撃を受ける。

「そこでや！出かけるで！！！」

そんなこんなでやってきました海浜公園。凧は思った。どうしてこうなった？

「ごめんな。なんか巻きこんじゃって。」

「土郎君。……いいのよ。あいつと関わって何もなかったことはないわ。」

哀愁を漂わせる凧。守ってやりたくなる土郎。後ろでニヤニヤしている晋吾。よくわからないイリヤ。

「それで、どうしてこうなったの？」

なんとなくでついて来てしまったし、拒否できない雰囲気なのでありあえず理由を聞くことにした凧。

「お？俺がな、バッティングセンター行きたくての。」

「私が水族館に行きたくなったの。」

「それでの、凧ちゃんどうせ家でゴロゴロしてると思ったから。」

「シロウも休みだし一緒に遊びましょ？って」

「………そう。」

何故副音声で説明を受けないといけないのだろうか？晋吾とイリヤは嬉しそうにハイタッチしてる。

「一応お昼はお弁当作ってきたから。」

「土郎君が？」

「うん。まあ、一応。」

「ホント？楽しみだわ。」

恥ずかしそうに頬を掻く土郎。

「体育祭のときのお弁当もおいしかったわ。」

「特別なことした覚えはないけど。」

「そんなことないで、ハンバーグのシロちゃん特製ソースはギガウまやったで。」

「へ〜。特製ソースだなんて、土郎君凄いのね。」

凜ちゃんに褒められて照れるシロちゃん。可愛いなお前。

「体育祭で思い出したけど、シロウに好きなもの作らせてシンゴばかりずるいわ。」

「別に作らせたわけじゃなか。優しいシロちゃんが、体育祭で激萎えだった俺を元気に出すために作ってくれたんや。」

「今日は姉ちゃんの好きなものもあるから安心してくれ。」

「ホント！？シロウだ〜いすき！！」

嬉しそうに土郎の腰にしがみつくいりや。

はたから見ると妹にしか見えんな姉ちゃん。

まずは水族館に行くことにした。理由は先に行くことで姉ちゃんが

愚図るのを防ぐためである。

「凜ちゃん。水族館といったら何が好き？」

「ん〜。水族館行ったことないから分からないわ。」

「マジか。初体験やん。」

「そうね。初体験ね。」

「だってさ、シロちゃん。」

「いや、そこで俺に振られても……」

凜ちゃん始めてか〜。俺は水族館っていったらサメとタコだな。

サメは言わずもがな。タコは動き方が面白い。

「シンゴ速く速く!!」

楽しみにしていたイルカのショーの席取りを急かすイリヤ。

「一番前より真ん中ぐらいが全体を見渡せていいやで？」

「一番前がいいの!!」

全く。お子ちゃまやのー。まあ、来たばかりの頃と比べると大分大人になったか。

まだ駄々はこねるが、思い通りにならなくても癩癩起こさなくなっ
たしな。

「知ってるか姉ちゃん。イルカさんは大きくなるとクジラさんにな
るんやで？」

「ほんと!？」

「嘘教えないの。」

「いやほんとやって。」

成長的な意味ではないが。

しばらくしてイルカのショーが始まる。まあ何度も見たことある俺は、時々おおっ凄いじゃんと感じるぐらいだ。

例の如く俺の膝の上に座る姉ちゃんは、キラキラと目を輝かせてイルカのショーに釘つけである。

隣を見ると凜ちゃんも姉ちゃん同様に釘つけである。やるなこのスタッフ。凜ちゃんの感性を震わせたか。

ショーを楽しんだ後、水族館を見て回り、売店でイルカのぬいぐるみを姉ちゃんと凜ちゃんに買った。

俺に肩車されている姉ちゃんははご満悦の様子。でも俺の頭にイルカのぬいぐるみをグイグイ押し付けるのやめい。

海浜公園でシロちゃんの弁当を食べた後、食後の運動も兼ねてバツティングセンターに向かう。

シロちゃんは今日は大会前の休暇日なので、運動はしたくないから見学すること。

我らが凜ちゃんはミニスカでフルスイングしてバカバカと打ちまく

っている。

しかし、見えない。あれか、見えるんじゃないかとガン見してくる馬鹿な男どもを捕えるトラップか。孔明の罠だな。

俺はと言うと2回プレイして40球全部ホームランの的に当てて景品全部貰ったらもうやめてくれって言われた。

自分でもやり過ぎを感じてので自重した。

その後は「やああ！」とかいいながらバットを振る姉ちゃんを愛でることにした。

可愛らしくバットを振り、当たらないとむーと膨れて当たると満面の笑みを浮かべる。

アレを見ていると姉ちゃんはロリキラーストロングであると感じた。

どんなロリコンでも奥まで浸透！！みたいな

まあとにかくロリコンじゃなくて良かったと切実に思います。

「今日は遊んだのー」

「そうね。いい休日だったわ。」

凜ちゃんも満足げの様子。姉ちゃんは疲れたのかシロちゃんにおんぶされて寝てしまった。

「明日は学校や〜。おっ！そや、そろそろ文化祭の出し物作らなあかんね。」

「あ〜、あれね。」

同好会の顧問の先生から、文化祭にモノ作り同好会として出展しようと言われている。

一成は生徒会が忙しい中、暇を見ては木工細工にトライしているようだ。いいね。チャレンジ精神にあふれているよ。

凜ちゃんは見せるのが嫌みたいでこそそそ作っているみたいだ。どうせ当日に見るのにな。

「凜ちゃん何作るか楽しみや〜。のお？シロちゃん。」

「ああ。凄く楽しみだ。」

「フ・フ・フッ！せいぜい楽しみにしてなさい。」

楽しみやわ〜。

文化祭当日。俺の日である。

「行くでシロちゃん。はよ！はよせい！〜！」

「体育祭とは真逆過ぎだろ……。」

文化祭は体育祭と違って当日はグダグダできるからいい。

文化祭はね、当日までの準備が大切なんですよ。

だから当日に間に合うまでにこの日はあれやって、次の日はこれやる。みたいな分担作業ができるから好き。

露店や喫茶店やるとしても、工作側に回れば当日はやらなくていい。みたいなことも多いしな。

まあ公立中学だから喫茶店的なのは無く、合唱して、ぼけーと弁論大会的な聞いて、知り合いの絵とか発表を見てハイ終わり。

素晴らしい。アア素晴しきかな文化祭。

現在は弁論大会。大抵の場合、在り来たりなことを言うだけになりがちな弁論大会であるが、今年は違う。

まあなぜなら凧ちゃんとか一成が参加するからなんだが。ハイレベル過ぎて笑える。お前らほんとに中学生か。またファンが増えるね。

合唱はふつーに歌って終了。ちなみに練習の時、合唱部そっちなけでまた凧ちゃんがリーダーシップを取っていた。

舞台での発表が終わり、シロちゃんと校内で展示されている作品を見て回ることに。

まあ、見てもシロちゃんと凧ちゃんとか一成のぐらいなのだが。

シロちゃんの美術のセンスは、まあ無くはないんじゃない？って具合。しかしそんなの関係ねえ。

とりあえずシロちゃんブランドはカメラで激写しまくる。

シロちゃんに恥ずかしいから頼むからいい加減にしてやめてくれ。と切実な顔で言われたので30枚ほどで我慢した。

途中で先生たちやPTAの人達とお話してた一成と凜ちゃんに会った。

「おー。御二人さんお疲れ。」

「ホント、オジサマは同じ話を何度もするから疲れるわ。」

疲弊した様子で答える凜ちゃん。どうやらほんとに疲れたらしい。

「そう言えば一成とシロちゃんは始めてか？」

「むっ。そういえばそうだな。」

「えっと、知ってると思うけど、衛宮士郎だ。宜しく。」

「ああ。知ってると思うが、柳洞一成だ。宜しく。」

まあ、二人とも校内きつての有名人だしね。

「凜ちゃんたちが何作ったか楽しみや〜。」

「え？ニイさん知らないの？」

「おう。凜ちゃん達も俺がなに作ったか知らないで？おもしろくするために各自で顧問のセンサー提出することにしたんや。」

凜ちゃんが余りに隠すからみんなが当日まで分からないようにした。

その方が凜ちゃんも隠すのに罪悪感を感じないですむしな。

そう言っただけで展示されている教室に入ってしまった。

「これ、晋吾が作ったのか？」

「おう。そうや。」

「……ラクダよね？」

「おうラクダや。」

「……なんでシンバル持ってるの？」

シンバルを叩くゴリラみたいに座り、シンバルを持つラクダがそこに居た。

「背中が一番上のコブを押すとな。」

シャンシャンシャンシャン

「鳴るんよ。」

満足げな晋吾

「んでな、2つ目のコブを押すとな。」

シャンシャシャシャンシャンシャンシャシャシャンシャン

「リズムが変わるんや。」

「…………無駄に凝ってるな。普通におもちゃ売り場にありそうだ。」

「…………流石ニイさんと言つべきなのか？」

褒めるべきか呆れるべきか判断に悩む三人。

「一成のはどれなん。」

「これだ。」

一成は木で出来た小さな机やイス、棚などを作ったようだ。

「へー凄いわね。こんな小さいのにスゴイ細かく作られてるわ。」

「これ、木目とか自分で掘つてある。スゴイな。」

絶賛の嵐である。普段いがみ合っている凜ちゃんですら賞賛している。

おかしいな。俺の時とは大違いだ。

ちなみに俺の感想としては、シルバ アファミリーみたいだな。

…………今度作つて座らせてみるか。

んで

『い……一成。お前そんな趣味が会つたのか……。まあ、気にするな。俺はどんなお前でも受け入れてやるよ』

的なことを言つとけばたぶん一成ももつと友達増えるだろう。

「さて、お待ちかねの凜ちゃん作品や。」
「……やっぱり見ないって選択肢はないの？」
「ない。」

すっぱり断りを入れる。すぐに見えないのは凜ちゃんは小物系の机に置くタイプじゃないのだろう。

まあ、途中の感じを見ると大きめのパッチワークなのは分かる。

「おつ、アレや。作 遠坂凜って書いてあるわ。」

「ん〜。これは教室かな？」

「ほお。これはこれ。」

ニヤニヤし始める一成。

「……凜ちゃん。」

「なっ……な、何よ。」

頬を赤く染めながらそっぽを向いている凜ちゃん。

俺は、そんな凜ちゃんの手を取り。

「ちょ……ちよつと！」

「凜ちゃん。ありがとう。そんな風に思ってくれて。ホンマありがとう。」

パッチワークに浮かび上がるのは、長机が一つ、黒いソファにパソコン。そして種類に統一性がない本棚。

そう、それは晋吾が作ったモノ作り同好会の教室。

タイトルは

『放課後の安らぎ』

第19話 変人の文化祭。(後書き)

今回は少しでも『り・凛ちゃん……』って思ってくれれば満足。

今回は日常ほのぼのから脱却(?)を目指します。

まあ、だからと言って完全シリアスとかをするわけではなく、今までの

ブウン！グシャア！！

なエス リボ グ無双じゃなくて、ちゃんとバトルするよ？ってだけなんだが。

とにかく新章入ります！！

第20話 変人とホムンクルス。(前書き)

新章突入。しかし、まだまだ原作に入らず。
久々の爺ちゃん登場。ではどうぞ。

第20話 変人とホムンクルス。

「おつ、爺ちゃんからや。」

11月のある日のこと。家の郵便ポストから新聞を取りに来たら爺ちゃんから手紙が来ていた。

爺ちゃんと手紙のやり取りをしてからもう4年ぐらいか？気づいたら長いコトやってたな。

爺ちゃんの手紙は大体取りとめない出来事を書くぐらい。

この間こんなことがあったとか、そう言えば姉ちゃんが・・とか、シロちゃんと一緒にどこ行ったとか。

爺ちゃんはそのことに『そうかい。そうかい。』と、感想をたらず。まあ、普通の孫と爺ちゃんの手紙のやり取りだ。

「姉ちゃん。爺ちゃんから手紙が来てるで。」

「お爺様から？」

「おつ。『イリヤがイルカ好きだなんて知らなかった。今度飼つてやるう。』やつて。この間行った水族館のことやな。」

「シンゴ！そんなことお爺様に伝えているの！？」

「おつ。せやで。」

姉ちゃんは『そんなこと伝えないでよ！恥ずかしいから！』と、真っ赤になって怒っている。

しかし爺さんレベル高いな。イルカ買えるんかい。

「他にはなんて書いてあるんだ？」

「またシロちゃんにも会いたいわって書いてあるで？他には・・・おる??？」

「どしたの？シンゴ？」

「うん。どうしたんやろ？爺ちゃん。」

「何かあったのかい？」

「いやな、親父。『面倒なことになった。すまないのだが、シンゴの力を借りたい。一度ドイツに来てもらえないか？』やって。」

「???お爺様が？」

んっでもって、再びやってきましたドイツ。

「シンゴ。『私は帰ってきたー』ってやつは止めなさい。」

「くっ！言う前に言われてしまったと!?やるのお姉ちゃん。日に日にレベルアップしてるやないか。」

「まあね。」

今回は舞弥姉ちゃんを除く4人に来ています。学校？爺ちゃんが危ないかも・・・って言って休み貰った。

「お爺様どうしたのかしら？」
「さあ？いけば分かるやろ。」

「よく来たな。イリヤ。シンゴ。」
「当主殿。私もいるのですが・・・」
「お前なんぞ呼んでおらん。」

今回は前回入った（侵入した）客室に入れてもらい、メイドさんにお茶をもらった。・・・アレもホームンクルスなのかな？

「おお。こやつがシロウか。いい眼をしておる。」
「あ、イ・イヒハイセ、シロウ・エミヤ。イッヒ、フロイエミッヒ、ゼアー、ズイー、ケンネン、ツールルネン。」

空港で教えたドイツ語で挨拶するシロちゃん。爺ちゃんは表情は変えていないが嬉しそうにしている。

「んつ。すまない。シンゴが普通にドイツ語を話すからな。」
「なんや。爺ちゃん日本語話せるんかい。」
「私が話せるんだから当たり前でしょ。」

そう言えばホームンクルスは始めから知識を入れられるって言ったな。爺ちゃんもってことが。

「良かった。何言ってるかさっぱり分からなかったら、ずっとばーつとしてたと思うし。」

「んで？どうしたん爺ちゃん。」

「そうだな。その前にシロウは……」

「ん？別にソツチの話でも大丈夫やで。」

「そうか。」

一度話を切って全体を見回す爺ちゃん。……マジか真面目な話か。

「実はだな。数年前から弄っていたホムンクルスが一体いた。」

「数年前から？お爺様がそんな長い間作っているホムンクルスってどんなものよ？」

「まあ聞いておれ。私が鑄造していたホムンクルスは……そう、シンゴを参考にしたものだった。」

「俺？」

「正確に言えば『魔力硬化』であるがな。」

なんてことでしょう。俺がのほほんと日本で日々を過ごしている間に爺ちゃんはとんでもないことをしていた！！

チートを作るってなんてチート。

「しかし失敗してしまっただ。」

マジか。爺ちゃん元気だし！。え？元気でたつて？それはよかった。

「だがその失敗も実に興味深い失敗でな、しかし、失敗は失敗であり。望んだものを得られなかったため、放置しておいたのだ。その内気分が乗ってからでいいかと。」

その気持ちちよー分かるわ。なのにクライアントは速くシロ速く

シロってしつこいし。よけいヤル気なくなるつうの。

「そのホムンクルスはどのような代物なのでしょう？」

「うむ。・・・魔力を任意で放出させるのは容易ではない。故に体内での硬化目指したのだが・・・何故か体内の炭素成分の結合度を変化させるものになってしまった。」

炭素成分の結合度変化？・・・んでホムンクルス。・・・グリードさんですねわかります。

作品違うよ？流石爺ちゃん。なんでもありですね。最強の盾！！

「炭素結合度をコロコロ変えられて、そんなんで生きられるんかい？」

「ああ。ホムンクルスなので一様に短命であるがな。」

「どこにいるん？みたいんやけど。」

そしてぜひとも触ってみたい。スツゴイ失礼だと思っけど触りたい。

「実はだ・・・居なくなってしまったのだ。」

「は？」

「朝起きたら、いなかったのだ。」

いや、ペットがいなくなってたみたいに言われても・・・

「居場所はわかっているんだが、拾った飼い主が悪くてな。」

「飼い主？ホムンクルスって作った人が親的な存在になるんじゃないの？」

たしか刷り込みというやつよ。

「違うぞ。ホムンクルスの鑄造は人体錬成・魂の付着・星との接合の3つの工程がある。」

「星との接合？なんやそれ？」

「ホムンクルスに必要な知識と存在意義を自然、地球から引き継ぐのだ。この技術は聖杯戦争にも使われている。」

「ごめん爺ちゃん。最後のどうでもいい。」

「こいつは最後の『接合』の工程を踏んでいない。そこで面倒なことが起きた。」

「面倒なことねえ。」

「拾った飼い主が魔術師だったんじゃ。」

「うわああ。ガチでめんどくせ。」

「さらにこの魔術師はさらに面倒なことを起した。」

「何を？」

「ホムンクルスを使った『魔術師狩り』だよ。」

みんなでジーッと親父の方を見る。親父はヤメテッ！見ないでえ！
！（>|<）って顔をしてる。きめえ。

「細かくは分らんが、どうやら魔術を使い、偽りの記憶を植え付けたようだ。」

「記憶があると存在意義の代理になるか。なるほど、やはり生命にとって記憶とは必要なものか。」

「……晋吾？」

雰囲気が変わる様子を感じ、晋吾の顔を覗き込むイリヤ。

「ほ？んで？どんなったん？」

「うむ。実はこの件のホムンクルスがアインツベルンのものであることが、すでに魔術協会にばれている。」

「ウソでしょ！？」

「嘘ではないのだイリヤ。そして早急に内々的に処理することになった。」

「てことは？」

「ふむ。本来なら魔術師の処理も頼みたいところなのだが……」

「ご当主。それは、」

「分かっている。私も可愛いまだ手が綺麗な孫を汚させたくない。」

「お？別に殺さんでも複雑骨折と粉碎骨折の違いを教えればええやろ？」

「……」

「……」

釘バットを肩に担ぎながらキイキイと骨を折っている映像が安易に浮かび、なんかこいつ怖い。

と思ってしまう二人であった。

そんなことで飛んできましたベトナム。爺ちゃん曰くここにいると
のこと。

「今日もナビお願いします。」

「ああ。行こうか。」

かつて依頼をこなしていた時のように舞弥姉ちゃんをサポートにお
いて、爺ちゃんのお使いという名の任務にあたる。

「しかし難易度SSランクのお使いやな。」

「お使いってレベルではないがな。」

例の魔術師はあっちこっち逃げ回りながら自尊心を満たすために狩
っているらしく、舞弥姉ちゃんの事前報告からすると、どうやらな
さけない奴らしい。

簡単に言うと、『意識がないものに記憶を植え付ける』魔術しか持
たない者に格好な武器が舞い降りて、ビクビクしながらそれを振っ
つことにニヤニヤと楽しんでいる。

・・・分かりやすいやら、分かりにくいやら。とりあえずなんと
なく残念な映像が脳内で浮かぶからいいか。

廃れた田舎道を歩き、ターゲットがいるという住居に向かう。

しかし、どうやって登場しようか？・・・そう言えばみんな俺のこと中々気づかないんだよな。

親父も舞弥姉ちゃんも（全くを持って嬉しくないが）一流のアサシンになれるって言っていた。

・・・今日はステルスシンゴで行ってみるか。

こん、こん。

人っ子一人いないような田舎での訪来者。道に迷った旅人の線もあるが、追手である可能性が高い。

しかも堂々とノックをするぐらいだ。おそらく追手は腕自慢の相当な手だれ。

「も、もう追ってきたのか？もうばれてしまったのか？もうどこまでなのか？」

「大丈夫だ。マスター。俺が行く。」

そこで気づく、自分には最高の盾がついていることを。

扉を開けてみるが、そこには誰もいない。

「誰もいないぞ。マスター。」

気のせいだったのか？

ほっと気を緩めたところに……

「わりいごは居ねえーか！！」

「きゃあああああああああ！！」

後ろからの声に驚き、床を生えずりながら自らの『盾』の後ろに隠れる。

「なんや。ビビり過ぎやで。」

「な、何なんだ貴様は！！」

「お、中国語かいな。話せる言葉で良かったわ。おっちゃん。お縄に頂戴やで。」

妙な風格を漂わせる奴だが、月明かりに映る顔は若いと言っよりもあどけなさがまだ残る顔立ち。

まじっことなき『少年』である。

「ホームクルスを返しにもらいに来たで？」

「返すだと？」

自らの記憶にないことを言われ、不快感を醸し出す『盾』。

「俺はマスターの盾。返せなど言われる筋合いはない。」

「そ、そうだ！使命を果たすまでは死ねないのだ！このガキを殺せ
！！」

追手が少年であることに、精神的余裕が出てきた魔術師。

その魔術師の発言を聞いて晋吾は、豪く三下臭のする奴だな。とあの種の感心を抱く。

「ほー。そういう設定なんかい。」

「設定だと？」

「な、何を言ってるんだ！！」

「慌て過ぎやって。まあ、ええわ。とりあえず、魔術師の方は確保せなあかんし。盾の旦那はのいてくれへんのやる？」

「当たり前だ。俺はマスターを守る盾。」

「相分かった。つまり盾を取れば丸腰になるっちゆうことやな。」

そう言っただけで背中に背負っていた袋の様なものから、剣を取りだすように、何かを取りだした。

「・・・なんだそれは？」

「なんやバットを知らんか？まあ、そこな魔術師が知らんのやったらそれもそうやの。」

そういつて取りだして構える少年の手には、・・・何故か釘の刺さったバットと言われる木製の物。

舐められたものだ、我が盾に木で挑もうとなど。

「ほな、行くで？」

少年の体から眩い光が輝く。そして、体を沈ませると思っただら、一瞬で距離を詰められた。

田舎の一階建て一軒家であるこの家は確かに狭いが、玄関と少年の立っていたところまでは数mは離れていた。

炭素結合度を変化させて防御に備えながら、少年を観察する。

ホームクルスである俺が、目で追い切れないとは。

ギイイン！という甲高い音をあげて、自らの体に袈裟がけに落とされたバットが止まる。

「ほう。話にはきーとったが、これがダイヤモンドの堅さかい。」

「そうだ。誰にもこの盾を打ち破ることはできない！！」

「盾つつより鎧やがな！」

バットを跳ね除け距離をとり、左腕を剣のように変えて少年目掛けてバットを振う。

少年は半身を右側ずらしそれを見切り、お返しにと顔面目掛けてバットを振う。

しかし、ダイヤモンドの硬度を誇るその顔面は、またもや釘の部分とぶつかり甲高い音を鳴らす。

右腕も剣のように変化させ、少年の顔を目掛けて突く。すると少年は前に出されたままの左腕に足を掛け、飛び上がる。

突きだされた右腕を超え、天井に手を添えて一瞬停止した所で、少年は顔に向かって蹴りだした。

人間の蹴りなど屁でもない。そう決め込んで防御をせずに受ける。すると信じられないほどの衝撃が走り、体ごと宙に浮く。

マスターである魔術師をも巻き込んで、玄関の扉を突き破り、外に放り出されてしまう。

「……ちいと痛かったの。」

蹴りだした足をさすりながら家から出てくる少年。

「……少年だと侮っていたが相当の手だれだな。」

「だ、大丈夫なのか!？」

「大丈夫だ。俺が負けるわけがない。」

こちらに向かって歩いてくる少年に目を向け、評価を下す。おそらくは奴の武器は手に持つバットと言う木片ではなく、卓越した身体能力。

バットの振りも鋭いが、速さ・威力ともに驚嘆である。さらにダイヤモンドの塊でもある我が身体を蹴り飛ばしたのにも関わらず、少し痛がる程度。

耐久力も高い。やはり殴打よりも刃物での殺傷の用が有効であろう。……当たればだが。

そこまで考えてさきほど変化させた両腕を少年に向ける。

「ダイヤモンドソード×2ってか？しかし、当たらなければどうと
いうことはない・・・やで？」

「当たるかどうかは、やってみなければわからん！」

今度は自ら仕掛ける。右腕を体の内側から外側に向かって振り、矢
継ぎに左腕を突き出す。

少年は右腕を見切り、左腕をバットで受ける。左腕を戻そうとする
が・・・動かせない。

「クツ!？」

「捕まえたで？」

何とバットに刺さっている釘と釘の間で剣と化している腕の刀身を
絡めている。

その事実には驚愕していると少年はバットを力強く引っ張り、体を引
き寄せる。

その力は強く、逃げるできない。

苦し紛れに右腕を少年に向けるが、少年は両腕で持っていたバット
から左腕を離し、その腕で払いのける。

そしてがら空きになった顎に向かってその左手で掌底を放つ。

「ぐああ!!--」

浮き上がった所を左手で顎を掴み、地面に叩きつけられる。

「知ってるかい？ダイヤモンドはのお？」

上を見ると、月をバックにバットを振り上げている少年が見えた。

そして次の瞬間にそれが、己の右腕に振り下ろされる。

「ガアッ！！」

衝撃とともに、かつて感じたことのない感覚を抱く。これが・・痛みなのか！？

右腕を見ると粉々にされ、刀身が取れていた。

「靱性という割れや欠けに対する抵抗力がそこまで高くないんや。」

そう言っつて再び振りあげられるバット。

「グッ！！」

次は左腕、またもや粉々になる。

「ダイヤモンドってキズとかには強いって意味の硬度はあるんやけど、衝撃に強いって言う意味の固さはないんよ。」

また振りあげられるバット。

逃げなくてはと体を動かそうとしても、痛みが体を動かすことを拒

否する。

そして抵抗なく粉々にされる右足。

「まあつまり、こつやって叩きつけられると粉々になるっちゅう」
とや。」

最後に粉碎される左足。

「ふう。これで動かなくなるわ。再生せーへんって聞いたつたからの。」

動かないもなにも、両腕を粉碎された時点で動けない。始めて感じる、痛みと恐怖に怯えて。

「さあて、あとは魔術師の方や・・・な」

魔術師の方に目を向ける晋吾。しかし魔術師に取っては堪ったものではない。

バットを振り下ろし、キイキイと（そのように見える）四肢を粉碎していく少年。

次は私も・・・と考えた時点で魔術師はブラックアウトした。

「・・・一件落着やな。」

「マスターは？」

「ああ。シヨンベンもらしてアワ吹いて気絶してるわ。」

マスターは恐怖にやられたか。まあ仕方がない。

「さて、とりあえず舞弥姉ちゃんに来てもらうかの。あっ、しばらくは自分、寝てもらってから勘忍のお？」

相手が悪すぎたと考えるべきだな。

ホムンクルスと魔術師は一足先に舞弥姉ちゃんがドイツに届けた。魔術師の方は爺ちゃんが処理をするとのこと。

処理ねえ。やっぱり首ちょんぱなのかしら？魔術師怖いわ。死んだら何もできないじゃん。

あっ、もう何もするなと言いたいんですね。やっぱり魔術師怖いわ。

うんで飛行機を一本遅らせて、ドイツに到着。もうこのミュンヘン国際空港にもなれてきたな。でもベトナムからは疲れた。

んで舞弥姉ちゃんを待つ。しばらくして合流できた。

相変わらず面倒な道のりを我慢してアインツベルン城に到着。長かった。

「ご苦労だったなシノゴ。」

「おう。余裕だったで。」

爺ちゃんに軽く報告。詳細はもう舞弥姉ちゃんの口から聞いている。

「余裕と言われて、いい気分しないね。」

爺ちゃんが連れてきた達磨スタイルのホムンクルス。なんか新鮮。

「実際、苦戦の苦の字もなかったわ。」

「はっ！返す言葉がないな。」

ぶつちやけ再起不能にならないように注意してたし。やろうと思えば始めの一撃で終わりだったとは言わない方がいいだろう。

「んで？こいつどうすん」

「うむ。こうなると腕を蘇生するより始めから人体錬成した方がいい。意識がある状態だと星との接合も難しいからな。」

「ふーん。そなら、俺が貰ってもええ？」

「別にかまわんよ。」

「自分もええか？」

「俺か？少年に逆らう気は起きんな。またバラバラにされたくない。」

「そか。ほなよろしゅう。あっ、あと俺の名前は晋吾や。まあ、呼びたいように呼んでくんろ。……ところで。」

そう言葉を切ったとき、まだ名も与えられていないホムンクルスは嫌な予感が走った。

「機械の体って興味あらへん？」

その時の晋吾の目は、キラキラとマッドサイエンティストのよう
に輝いていた。

第20話 変人とホムンクルス。(後書き)

今回はやりたかったネタはステルスシンゴ、機人化計画第2弾。の二つ。

ステルスシンゴはステルスニックが元ネタ。F1好き以外の方にも知ってもらいたいネタである。知りたい人はグーグル先生に聞いてみて？

俺たちのニック！クイックニック！！遅くなっただけどマレーシア3位おめでとう！！

機人化計画第2弾は被験者の確保。ちなみにこのホムンクルスの名前はグリードで行く気満々。それは不味い。とか、違う名前の方がいいって方は感想版に。

んでもってバトルシーン。どうだったかしら？

俺的に満足度5割は超えてるんだが。

晋吾の釘バット格闘術。釘部分で拘束・貫通等々が可能。ただ殴る蹴るとか剣刀等を持たせるとありきたりになるからなんか変わったことしたかった。

ちがうssで見たよそれ？とか言われたら全俺が泣く。

次回もオリジナル。舞台は再び外国、イタリア。でもある作品の主人公登場！

ていうかあと10話ぐらいはオリジナルではないか？

こんなssみたことない。まあ、まったくりと待っててください。

第21話 変人の旅行（前書き）

お久しぶりです。リアルが忙しいとかそんな理由じゃないです。

某理想郷にて、とあるssにどっぷりとはまってしまったんや。

って理由もあるんだけど、ぶっちゃけ完全に更新しているものだと
思い込んでた。

2週間前に。

俺ってお茶目さん？いやいや、単なるド忘れです。大ボケです。

超久しぶりにユーザーページみて気づいた。エタったって思われた
お。

とりあえず、21話です。

第21話 変人の旅行

12月の中頃、そろそろ2学期も終わりに近づいた頃。

シロちゃんに夕飯の買い出しを頼まれて、商店街に買い物をしに来た。

「あらめずらし！今日は土郎君じゃないのかい？」

「おうおばちゃん。相変わらずテンション高いの。」

基本俺はここには来ない。

シロちゃんはここでも人気者らしく、その兄であるからか、やたらとハイテンションで話しかけてくるので、相手にするのが疲れるためあまりこないのである。

「はい毎度あり！」

「あんがと、おばちゃん。」

買うもの買ってサッサと帰ろう。次は八百屋だ。

「そうそう。これは忘れてた。」

「なによ。」

「はい。福引券。」

福引券？

「商店街で今やってるのよ。福引。」

「ほ〜。」

「一等は何と！イタリア旅行チケット！！」

「イタリア？マジで？スゲえな商店街。太っ腹や。」

「みんなでお金出し合ったのよ〜。2組までだからチャンスは2倍よ！」

確かにここの商店街は毎日のように人であふれてるが、ずいぶん金周りのいいものだ。

「まあええわ。ありがたく貰っておくで。」

その後八百屋でも同様に貰って、2枚になった福引券。どうしよう。俺くじ運あまりないんだよね。

「あつ、晋吾だ。」

「げえ。」

「げえじゃないでしょー。」

頬をふくらませてブーブーいうたいがー。・・・はっ！！

「たいがー。・・・なにするし。」

何故かチョップを受ける。そして痛そうにしているたいがー。

「タイガーいうな〜。いたいく。お姉ちゃんなんだぞー。」

痛そうに手をさするたいがー。流石チートボディ。堅かったのか。

「鍛えてますから。」

「ふーん。そうなんだー。」

アホでよかった。

「商店街で買いもんしたら福引券もらったんよ。」

「へー。商店街福引なんか始めたんだ。」

「そいでな。俺の代わりに引いてほしんよ。くじ運とかええやろ?」

「2等や2等の神戸牛を狙うんや。」

「福引って狙えるもんじゃないでしょ?」

いやいや、たいがーの運を信じてるんだって。

ゆっくりと抽選器（たしかガラポンって言ったか?）を回すたいがー。
!

そして出てくる金色の玉。

「何等?」

「おめでとございます!!一等です!!」

カランカランと鐘の音とともに熨斗のついた封筒を貰ったたいがー。
え?一等ってこんな簡単に出るもんなのか?

マジかよ……今度宝くじやらせてみよう。

「もう一枚あるんやけど、これも頼むわ。今度は2等な。」

「おねーちゃんにまーっかせなさい!!そりゃー!」

「一等を当てて調子に乗ったのか、掛け声とともに勢いよく回すたいがー。」

そして当然の如く出てくる一等の証のゴールデンボール。どんな確立だし。

「って言うことで買い物行ったらイタリア旅行券を貰って帰ってきた。」

「珍しく買い物に行かせたらこれかよ……。」

「シロちゃんなんか言った?」

「いや、なにも。」

「たいがーとともに帰ってきていつものように夕ご飯。もはやたいがーの存在がデファであることに驚きはない。」

「イタリア旅行か。行きたいけど部活があるんだよな。」

「何いつとるんやシロちゃん!ヨーロッパ旅行なんて中々出来るもんやないんやで!?!」

「この間ドイツ行っただけじゃん。」

「たしかし。」

「部活も休めないしね。」

これだから体育会ってやつは!!

「とりあえず、俺とたいg・藤ねえ？は行くやる。」

「なんで疑問形なのよ。私もいつてもいいの？」

「当たり前やがな。お前さんが当てたんやからのお。」

「ねえねえシンゴ。ナポリってどんなところ？何が有名？」

「行く気まんまんやな姉ちゃん。」

「イリヤが行くなら僕も行かないとね。」

「え？切嗣さんも!？……（小声で）ギター。」

「親父もいくん？うろろしたらあかんで。」

「アレ？それって僕のセリフだと思うんだけど。」

「どつちもだな。」

「士郎の意見に激しく賛成だ。」

シロちゃんも舞弥姉ちゃんもヒドイ!!

「それなら親父に姉ちゃん、ニイさんに藤ねえの4人で行くのか？」

「……かなり不安なメンバーだ。」

「何言ってるのよ士郎。おねーさんに任せなさい!!」

「何いっとするんじゃ。おめーさんが一番問題やがな。」

「どつちもどつちだと思っぞ。」

と、言うことでこの4人でイタリアに行くことになった。……
大丈夫なのか？

2学期も終わりクリスマスの数日後、イタリアに出発するため空港にきた。

「絶ツツツ対に問題起さないでね！」

「何いつとるんやシロちゃん。俺がそんなことさせるわけなか。」

ニイさんが一番不安なんだ。と喉まで出かかって飲み込む士郎。どうせ分かってわくれまい。

「旅行の間、セブの世話頼んだで？」

「ペットじゃないんだからさ。」

ちなみに例のホームクルスの名前はセバスチャンにした。愛称はセブ。

グリードで行く気満々だったのだが、姉ちゃんとシロちゃんの猛烈なダメ出しを喰らった。

後におもったんだが意味が『強欲』とかどこの厨二だよ。黒歴史だわ。もう少し考えてから言えば良かった。鬱だ。

結局、姉ちゃんの『ドイツ産』なんだからドイツ人ぽい名前にしなさいって意見が入り、俺がふと浮かんだ名前にした。

今はペット兼置物（まだ達磨状態）として俺の研究部屋に置いてあ

る。

「ほな、行ってくるで。」

「うるうる行っちゃダメだからな！」

全くもーシロちゃんは心配症やな。

「晋吾。」

「お？」

「『アレ』の運搬は成功したよ。」

「おお。流石親父。外国は物騒やからのお。『武器』がないとな。」

「晋吾。せっかく隠語にした意味がないじゃないか。」

「むっ。そうやった。」

とりあえず『相棒』がいればどんなトラブルもイチコロだぜ。

「晋吾ー。切嗣さん。」

「おー。今行くでー。」

危ないなら武器を持って行こう。という誰かさんみたいなテロリスト的思考回路になっていることを億尾も感じない晋吾であった。

約半日のフライトを経てイタリア・ローマへ。ここで2泊する予定。たいがーは長時間フライトでへろへろ。姉ちゃんはそんなんでもないが疲れたみたい。

親父はよく外国を行ったり来たりしていたので余裕とのこと。オレ？愚問だな。

仕方がないのでホテルにて就寝。まあ、こうなることを予想してたしな。

2日目。前日に俺と親父で決めた一般的な観光プランに沿って観光することに。

まずはスペイン広場にスペイン階段。有名らしい。

「なんでイタリアなのにスペインなの？」

「近くにスペイン大使館があるからだよ。」

ほー。まさか親父に教わるとは思わなかったぞ。

しばらく歩き、小舟の形をした噴水を発見。姉ちゃんがきゃっきゃと水で遊んでいたの。

「ほれ。」

「きゃー！ー」

軽く押して掴んだ。涙目で追いかけてくるので逃げることにした。

適当に逃げ廻って巻いたと思ったら迷子になったと思ったのか、姉

ちゃんが泣きながら俺と親父の名前を呼んでいた。

悪いコトしたなと姉ちゃんを抱き上げてあやしていたら思いっきりつねられた。

「ごめんな姉ちゃん。」

「・・・許さないもん。」

結構前に教えてもらった魔力の探索・察知とかで親父を探してみることに。分かりにくかったけど見つかった。

たいがーと親父はカフェでお茶をされていて、たいがーはいかに親父がカツコよく押し売りから自分を助けてくれたかを俺らに話したが、

はいはいよかったねーと軽くながした。

腹も減っていたのでこのカフェで食べることに、親父がペランペラのイタリア語で注文していたのをカツコいと不覚にも思ってしまった。

たいがーのね？ね？カツコいいでしょ？的な視線を向けてくるのではいはいよかったねーと軽くながした。

外国の紙幣を払う時にいつも思うのが、日本の札と比べてペラペラしていて頼りなく思うのは自分だけか？

しばらく歩いて着いたのがトレビの泉。

親父曰く、後ろ向きで泉にコインを投げると、またローマに帰ってこられると言う伝説があるらしい。

ワクワクとやりたそうにしていたたいがーと姉ちゃんを後ろ目に

「俺、日本に帰りたいから止めとくわー。」

っていったら興をそぐようなことはヤメテ！と怒られた。スイマセン。

次の場所へ歩いて移動。至る所に彫刻やら噴水やらがあつて中々趣のある町である。

あの彫刻の手の上に登りて と思うもぐつと我慢。噴水の噴水口を手で押さえたくなくてもぐつと我慢。

流石イタリア。俺の感性をこつも刺激するとは・・・やるなあっ

疲れてきた姉ちゃんを肩車して、ようやくコロッセオについた。

「俺、ドラゴンとかは知らないけど、虎とかなら貫けると思うんだ。・・・人指し指で。」

海賊王的に指銃でも圓明流的に指穿でもどつちでもおk。

「晋吾だったら無敗の剣闘士になれたんじゃない？」

「それじゃあ人指し指じゃなくって虎刺し指よ。」

虎刺し指・・・なんかかけえ。やるな姉ちゃん。年々レベルがあがつてるじゃないか。

コロッセオに入るまではなっがあああい列を1時間ほどで消化し、

ようやく入れた。

正直、俺がべちゃやくちゃ喋ってなければ姉ちゃんもたいがーもすぐに飽きたであろう。

けど1時間並んだけあってコロッセオは素晴しかった。

約5万人収容出来たらしく、構造も鉄骨を用いないものも火山灰を利用したコンクリートで出来ているため、現代のスタジアムにタメ張っている。

その大きさと歴史に大いに満足し、帰りは電車で帰る。姉ちゃんは親父の背中でもうおねむの様子。

ホテルについて夕飯。まあ、普通でした。

いつも思うのだが、普通のシロちゃんの料理がうまいから、こういうところに来ると本当においしいものしか美味いと思えないのは不幸なのか？

お腹一杯になったら姉ちゃんもたいがーはもう限界らしく、部屋で就寝。

「まだ8時とか眠れん。食後の運動がてら散歩してくるわ。」

「わかったよ。気をつけ・無くて大丈夫かな？」

「当たり前やがな。一応『相棒』連れてくで。」

と、言うことで夜のローマを歩く。ん、夜風が気持ちいい。

しかし近くにバチカンがあるせいかなんか変な感じ。だって教会な

のに死徒の匂いがぶんぶんするとかそれどうよ？

あと町外れにスツゴイ臭いの居たなあ。死徒より濃厚な匂い。姉ちゃん
さんが言っていた死徒二十七祖って奴か？

とりあえず、突撃だ。昏間に色々和我慢した鬱憤を晴らしてやんよ
！！

第21話 変人の旅行（後書き）

今回はここまで。ちょっと強引感は否めない。

ホムンクルスは普通の名前で行くことにしました。感想版に意見をくれた方には感謝と結局自分で名づけたことに対する謝罪を。

理由は作中にある通りです。実際よく考えてみて、ねえわ。って思った。

セブの扱いに対する励ましと応援のメッセージをお待ちしております。

実はこの話は2週間前に更新しているはずだったことは前書きにも書いたが、次の話が2週間空いてもまだ出来ていない……ってわけじゃないんですよ。

2話同時掲載にしようかと思って。理由としては、
数日空くと熱が冷めるんじゃない？続けて出した方がいいだろ？

と思ったからです。それなら1話にしろよ。とかは突っ込まんで下さい。

後ろの部分がまだできていないのでまだですが、今月中にはいけると思います。

今回は死徒二十七祖戦。しかしオリジナル二十七祖とかになりそう。やっちまった感は否めないが、楽しんでくれると幸いです。

長々と失礼しました。それではまた次回。

第22話。変人と『錬金』術師。(前書き)

イタリア編第2話。ちよつとねつ造話あり。

第22話 変人と『錬金』術師。

結構な距離を歩いて着いたそこは中々立派な洋館だった。

まあアインツベルンが誇る城とまではいかないが、凜ちゃん家よりデカイかな？

3mぐらいの見上げるような門を開けようとして見るが、当然の如く開かない。

めんどくさいが、ジャンプ一番。全く、なんだっぺ金持ちは何でも大きくするのかね？やべっダジャレいっつちった。

屋敷の扉は開いていた。ざっと気配を調べてみるが人ナシ、確実に二十七祖クラス1、死徒っぽいの1、グール一杯。

でも死徒っぽいのは殺さんでいい判定が出ている『同類』な変な死徒だからついてるっちゃあついているな。

しかし、ほんとに出来たよ遭遇戦。アレか、たいがーの運はここまであるのか。やべえなたいがー。

ガチで尊敬できるレベルですよ。ぜってー幸運EXとかもってるだろ。・・・あいつとは絶対に賭けごとしないようにしよう。

死徒っぽいのは1階の少し先に居るようだ。よし、いつもの如くステルスシンゴでいってみよー。

・・・只今ステルスシンゴ展開中の晋吾です。まあ、任意発動じやなく初見殺しなただけどね。

何故か4回目、5回目と会う回数が増えるうちに効きづらくなるみたい。シロちゃんには全く効かないしね。

んで、死徒っぽい人に近づいたんですが、あれですよ。グール蹴散らしてるんですよその人。

まあ見た目を軽く説明すると、紫の三つ編みにした髪に紫の服にミニスカート。

はい。シオンさんですねわかります。

俺の持ちキャラキターーーーーー!!!

くう・・・ゲーセンに入り浸った大学時代が懐かしいす。

てかなんでここに居るの？え？もしかしてここに居る二十七祖ってタタリ？いやいやいや。原作崩壊もほどがあるでしょ。

思考に耽っていたら、ふと顔を開けると突然ホールに大量にあふれ出すグール。うわぁ・・・きもiii。

しかしシオンさんは堪ったものじゃない。大変そうだ。なので手伝うことにした。

相棒・エス リボ グを取りだす。グールの集団に突撃し、一人きつちり撲殺していく。

バットで、足で、拳で、的確に脳天を捕えた一撃により、醜い音をあげながら下品な死体をさらす。ざつと十数秒と言ったところ。

ハツハツハ。自分のことやけどチートも大概にせい。って感じですねー

シオンさんは驚愕の表情でこちらに気づく。

「どうも、隣の突撃晩御飯ですー。」

「？もう食べましたが？」

真面目に返された。流石シオンさん。パネエっす。

「こんなところに子供？」

「所がどっこい、タダの子供やないんよ。」

「当たり前です。あれだけのグールを一瞬で倒す子供が、普通であつたら堪りません。」

意味はよくわからないが、ナチュラルに会話をしていることに、戸惑いの表情を浮かべながら会話をするシオン。

「ところでの、ここに死徒二十七祖？いるやる。」

「.....」

「手伝わせてくれんかの？二十七祖殺し。」

シオンにはその少年が何者なのか、計り知れなかった。

side シオン・エルトナム・アトラシア

二人は晋吾による先導で二十七祖の元に向かう。何故かは知らないが、この少年はどこに居るかが分かる様子。

はっきりした足取りがそれを証明しているようであった。

シオンは晋吾との会話をしながら時々出てくるグールを蹴散らしつつ、彼女の持つ分割思考の一つを使い、この少年について考えていた。

話をしていくつか入った情報は日本人であること。旅行でここローマに来て、散歩がてら、死徒の匂いがしたので潰しに来たと言っている。

散歩がてらとか、死徒の匂いなどと言っている時点で普通ではないコトは容易に分かるが、一番不可思議であるのは・・・この『空気』だ。

初対面でなおかつ、二十七祖に列ねる死徒がいるであろう屋敷に侵入している状況にも関わらず、こうもリラックスが『できる』こと。

この少年が来てからのこの『安心感』。魔術を使っているようには

感じられない。異能か何かか？

こっそりとエーテライトを用意することを決意する。会話の中で視線を使い、前方に注意を向かせた隙に脳の『ハッキング』を試みる。

見えてくる。

煌々と光る星々。無限に広がる宇宙^{そら}。金色の髪をした少女。その後ろにいる銀髪の男性。白い世界。

そこは何もかも、自分でさえ白く

S I D E O U T

「ねーちゃん。おーいねーちゃん。」

いきなりポーっとし始めたシオンさんのほほをぺちぺちとはたく。

「なんやー。いきなりどないし……なんやこれ？」

なんかシオンさんから俺の頭に伸びていた細い糸を取る。

「ハッ！」

「おっ。気づきよったわ。」

「……これはあかんわ。エーテライト使われてたお。やべえ超焦るわー。」

幼女神と会った時のうん十倍焦るわー。

これは高校の時に、青い扉で青い壁のトイレに入って行ったら女子トイレだったときと同じぐらいの焦り具合だな。

「いきなりどうしたん？大丈夫かい？」

「いえ、大丈夫です。……少し気が抜けたみたいです。」

極力冷静さを保とうとしているようだけど、戸惑いの様子を隠せないシオンさん。マジで何を見た？

ぐあー、しかし俺に気づかれないようにエーテライト使うとは流石過ぎる。悔しいが、何とか話題を変えて空気を濁すしかない。

「そっいえばの。」

「……なんでしょうか？」

「名前聞くの忘れてたの。」

「……そう言えばそうでしたね。私はシオン・エルトナム・アトラシアです。」

「シオンさんな。」

「別に敬称はいりませんよ？」

「そか。俺はシング・エミヤヤ。よろしゅう。」

「ええ。よろしく。」

フツ、少し空気が入れ替わったぜ。さて、気を取り直して先を進むぞ。

歩いているうちに少しシオンさん改め、シオンについて聞いた。まあほとんど知っているがな。

アトラス院の錬金術師。いつも思いが、人体を演算装置として事象を変換つて、なんじゃそりゃ？

つうか『錬金』術師っておかしいだろ？異議あり！姉ちゃんの実家見たいならまだ分かるけどさ。

てかね、あのメルブラの空中移動とかもその事象の『錬金』らしい。実際に見て、2段ジャンプすんな！とか空中走るの禁止！とか色々突っ込みたくなった。

チートの俺でも出来ないことを平然とやってのけるシオンに脱帽。？

べっ・・・別に懂れてなんか居ないんだからねっ！！

つい凜ちゃんの真似をしてしまったよ。

んでもって、二十七祖の死徒とどうやって勝つつもりだったの？っ

て聞いたら出てきた例の弾。

タタリの残骸から作ったものはどうでもよかったが、もう一つのアレはヤバいわ。

銃身がレプリカなのが救いだが、多分俺も喰らったらきつい。まあ当たればの話だがね。

当たらなければどうということはない！！

あとね。絶対に見えないスカートは計算なんですか？って聞きたいけど聞けない。

ちなみにここに来た理由はやはりタタリ絡みで、最近ここローマで、炎に抱かれて歩く人の噂が飛びまわっていたからとか。

え？何ソレ？殺人鬼の再来なんかより怖いんですけど？

「しかし、凄いですね。」

「お？」

「あなたのその魔力硬化でしたか？ひどく興味を引かれます。」

「マジで？」

「ええ。ぜひ研究させて欲しいですね。」

恐れていたことが現実に！？

「いやいや。俺も研究することあるから遠慮してもらいたいわ。」

「研究？なにかしているのですか？」

「おお。ロボットの的なことをの。」

「こんな魔力を持っていて科学側ですか。なんてもつたない。」

「いやなに、俺はこんななんおまけ的にしか考えてないからの。」
「……フツ、面白い人ですね。」

鼻で笑われたわー。お兄さんショックー。

「おつ、この部屋やで。」

他のと比べ、やたらとデカイ扉の前に立つ二人。まさにいかにもという所だ。

「ここにタタリが……。」

ぎゅーっと拳を強く握り、目つきがきつくなるシオン。

「まあ落ち着きや。それに、タタリとは限らんかもしれんしの。」

「？それはどういう……。」

「異様にグールが多すぎやない？タタリってこんなだっけ？」

「……確かにそうでしたね。なるほど、飄々としているように、あなたはなかなか冷静なのですな。」

なんか褒められた。

照れ隠しに、何もなかったかのように扉を開ける。

ただっ広い部屋の中に、椅子に座った金髪の男が一人。そしてその目の前で何かを燃やしているようだ。

「……貴様らが余の鑑賞の時間を邪魔するものか。」

火に向けていた目をこちらに向けて不快感をあらわにする男。

「あなたは……」？

男は再び目を火の方に向けると火は勢いよく燃え上がり、燃やしていた何かを灰に変える。

「余はスフィア・ヘリオポーズ。」

「スフィア・ヘリオポーズ！死徒二十七祖の紅蓮皇帝！！」

シオンは焦った。彼は死徒の中でも人間に対する興味が高い。それも悪い意味で。

彼は人を燃やすことに一種の美を感じている。

「……シオン。」

晋吾も困った表情を浮かべる。目の前の死徒の力量を感じたのか？

「せめて英語で話して？私イタリア語わかりませーん。」

「……」

「……」

二人の冷めた目線を受けている晋吾です。シヨンベンちびりそうです。

いやな、しゃーないじゃん？知らない言葉で盛り上がられても訳が分からん。

でも言葉分からなくても潜水艦映画とかならイケるよ？何言ってるのか分からないのにドキドキする臨場感は異常。

「人間・・・いや人間もどきの少年よ。これでいいか」

金髪の男は英語で話してくれた。感謝です！！

「いやーありがたい。話についていけなくて困ったわー。あと普通じゃないけどこれでも人間なのでよろしゅう。」

「あなたって人は・・・いえ、晋吾がどういいう人間か分かってきた気がします。」

「人間でなく人間である存在。・・・なるほど。フッフッフ。久しぶりに燃やしがいのある人間に会えた。貴様の魂がどのように燃えるか興味がある。」

興味を持たれてしまった。つーか若干気づかれてるのはなんでだ？

「いやはや、那由他の彼方から態々ご苦労なことだ。そんな器で使命を果たせるのか？」

「おう。最高級のモノにしてもろつたからの。・・・試してみるか？」

「クツクツク。楽しくなってきたぞ。余の炎技。とくとご覧あれ！アポストロスよ！！！」

勢いよく立ちあがり、両手を振ると現れる炎が一つ。驚いた表情のシオンを小脇に抱え横に避ける。

着地とともにシオンを手放し、両手で『相棒』を握り、突貫。

上段で構え、振り下ろす瞬間に左手を外側に開き、軌道をずらす。

すると脳天をガードしていた右手を避け、首筋の左側に直撃する。

しかし、死徒二十七祖の肉体ポテンシャルは高いらしく、釘部分が刺さらない。

予定と違ってしまった晋吾はいったん距離を取る。

「いやー。こいつは骨が折れるのー。」

「ぐっ……。肉の器に閉じこもっても使徒は使徒と言うことか……」

今ここに、使徒と死徒の戦いが始まる。

第22話 変人と『錬金』術師 (後書き)

ちなみに他のメルブラ勢の空中移動術の方法については特に考えてない。

第23話 死徒と使徒。

side シオン・エルトナム・アトラシア

シオンは異様な光景を目のあたりにしていた。

見た目12、13歳の少年が釘を打った黒塗りのバットと体術を駆使してで死徒二十七祖を圧倒している。

驚いている一方で、分割思考を働かせる。死徒が漏らした言葉。

アポストロス

確かそれは・・・エルトナムの家で見た文献で・・・

SIDE OUT

おほー。今日は調子いいわー。飛んでくる火の弾を避けながら接近する。

左手でバットを持ち、顔面目がけて振う。ガードされるが左の脇腹に神速の右ミドル一閃。スフィアの体がくの字に曲がる。

右ジャブで顔をあげさせ、左打席でフルスイング。ちなみに俺は右投げ両打ちです。

吹っ飛ばすフィアに並列になって走り、左足で床に叩きつける。ドラゴンボールかつ！って感じですね。

再び顔面目がけてバットを振う。おっ、今度は刺さったか。

頬を貫いた釘を、右手を内にまげて口内で絡ませる。

「オイシヨツ！」

「グガツ……」

勢いよく引つ張って強引に立ち上がらせる。右手を元に戻し、少々強引に釘を引っこ抜き、再びフルスイング。

クリティカルな手ごたえを感じながらのフォロースルー。スフィアは弾丸のように吹っ飛び、壁に激突。

壁は大きなクレーターの様な穴を開け、その振動は屋敷中に伝わる。この部屋に吊るされていたシャンデリアはユラユラと大きく揺らめき。

最後には落下した。

ガツシャーン！という大きな音をあげながら部屋の中央に落下。

電気でなくろうそくを使用していたためか、火が絨毯に燃え移り、炎は熱と光を与えてくれる。

ピクリとも動かない死徒。警戒しながら近づいて行く晋吾。

「晋吾！！」

シオンの呼ぶ声が聞こえるが、その前に晋吾は行動を開始していた。不穏な空気を察知して横に身を投げる晋吾。元いた場所には、何故か部屋中央にあった炎があった。

「なんや？部屋中央にあった火が移動しとる？」

「彼は紅蓮皇帝。火の操作はお手の物です。」

「紅蓮皇帝・グレンエンペラー。いやグレンカイザーやな。グレンダイザーみたいや。いやダイザ 版カイザー的な・・・」

「晋吾？」

「えほおん、えほおん。なんでもあらへんよ。」

揺らめく炎を前にして死徒は立ちあがる。

「舐めていたのかもしれんな、所詮人であると・・・」

スフィアが手をかざすと、炎を蛇の形にしたものに変え、晋吾を襲う。

晋吾は避けようとするが、蛇は首を常に晋吾の方を向き、追ってくる。

「ホーミング!? ならば・・・ゴオオッドスラツシュタイフリーン!!!」

晋吾は左腕とバットを持つ右腕を伸ばし、独楽のように回転する。

しかし、その回転速度は凄まじく、迫りくる炎をかき消し、足元に引いてあった絨毯に焦げ跡とともに穴を開ける。

「そのようなまやかしは効かんぞおお!!!」

シオンは唾然とし口をあけ、口内を晒しながら分割思考の一つを使って回転速度やらその回転からの遠心力やらそこから発生する全エネルギー値やらを計算し、そんな馬鹿なことが!と現実に怒った。

スフィアは気が狂ったかのように笑う。笑う。笑う。

「ハハハハハハハハハハッ! そうか! これが『使徒』か! 混血でも人外でも英霊でもなく! ただ! ただ人の身で!!! フヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!」

しばらく笑い続けた後、肩を上下させながら息を整える

「ふうふう、すまない。下品に笑い過ぎた」

「律義なやつぢやない」

フツ、つと笑いながら前髪を指で撥ねて取り繕う。

「全く持ってすまない。舐め切っていたよ、宇宙を相手にすると言
うのだ。」

「そら?」

シオンは死徒の言うことを理解できない。晋吾は確信した。コイツ、俺の正体、分かってるな。

「人類の最後の守護者たるあなたには余の存在は認められないだろう。だが、余も黙ってやられる訳にないかんだよ。これは種としての当然の行為だ。生きると言っね。」

「それはそうやる。だが、『可能性』を摘むお前の様な存在は我慢ならんのだ。」

「・・・そうか。あなたは人類に可能性を見出しているのだな。」

「人はいつかは親離れしなければあかん。この母なる地球からも・重力と言う名の手を借りずとも、人は歩かねばならんのだ。」

「それがあなたの想いか。」

スフィアは両手を広げ、宣言する。生への執着を。

「想いが相容れない種と種は争い、勝利しなければならない。だから、私は私の『可能性』賭けよう。あなたの想いを・大いなる意思を超えると!!！」

スフィアの体から魔力があふれ出す。晋吾ですらひるむ威圧感。彼の目は紅蓮に染まっていた。その魔力に共振するかのように屋敷が揺れ始める。

「っ！晋吾！させてはなりません!!！」

「もう遅い!!！」

シオンが何かに気づいて慌てて言おうとするが、それを塞ぐかのようにスフィアが叫ぶ。

晋吾は何が起こるか分からなかったが、咄嗟にシオンを抱きかかえた。

「固有結界

イグニートブリズン・インフェルノ
紅蓮なる地の獄」

そして世界は紅蓮に染まる。

そこは灼熱地獄さながらであった。

足を着く地面は無く、一面マグマ。空は黒く、まるで本当の地獄に居るようであった。

熱気が肌を焼き、開けている目や、息をするたびに気管が痛む。

そんな中で晋吾はいた。地面もない所に彼はいた。シオンを出来るだけ外気に当てないように抱きかかえながら、灼熱のマグマを『走っていた』

沈む前にマグマを蹴り、足を出す。水の上ですら走れる彼にとって粘性が高いマグマの方が容易であったが……

靴は溶け、魔力に覆われた足は『炎症』をおこして痛みます。ここ

まで来れば分かる。

落ちたらシオンは確実に死ぬ。おそらく、俺でも……

魔力で覆っている晋吾にとってみればマグマは兎も角、この『紅蓮地獄』の熱気はどうということはないが、シオンにとっては致命傷になりかねない。

しかし、今だにシオンはその白い肌を保っている。これは晋吾が咄嗟に張り直した魔力によって『シオンごと』覆って守っているのだが、晋吾とシオンの表情は優れていない。この状況で襲われでもしたら……

スフィアの姿は見えない。探す晋吾。それに答えるかのようにマグマの中から姿を現す。

白目まで紅蓮に染めた眼はまさに化け物まなこそのもので、マグマの中から来たにも関わらず、何も変わっていない服が異常感を漂わらせていた。

そんな彼が手をかざすとマグマから、5つの竜の頭を模したマグマの竜が首をもたげる。

「行け、溶解せし火竜よ！」

迫りくる火竜。避けようとするもマグマが地ではうまく動けない。

「晋吾！離してください！！このままでは二人ともっ……！」

「……………」

晋吾は一撃必殺の意を決して、シオンを高々と放り投げる。そして強く蹴りだし一撃を……

ボコッ

そんな音が時が止める。シオン、晋吾ですら驚愕の表情。足場として使ってきたマグマが、音とともに気泡と化す。

それは地面がなくなったのと等しかった。

「ここは余の世界。勝手に地に足をつけてはならんぞ？」

スフィアの会心の笑みに「糞が。」と悪態をつきながら、晋吾は灼熱のマグマに身を抱かれる。

「晋吾
！」

シオンの絶望の声は晋吾には聞こえない。相棒は灰と化し、服は燃え、毛が焦げる。晋吾はただマグマに沈むだけでなく、スフィアが生んだ火竜の体当たりをうけ、体を痛めつけられる。

だが死ぬほどの痛みであるが『死』という言葉はリアリティにかけていた。

晋吾は『寿命』と言う言葉を信じている。病気、事故、老衰。死因は違えど死んだらそれが寿命であると。

かつて死んだ晋吾が冷静でいられたのは、晩年であったことも一つ

の理由にあるが、死んだと言うことは「寿命であった」それだけであつた。

いままでの彼であつたならば、この場は寿命が来たと言って諦めていただろう。

ここが死に場と言っても過言ではない状況。何故こんなにも死をイメージしない？いやイメージしたくないのか？

『シロちゃん。どうしてももうダメだー死ぬわーって時はどうするっ？』

『？うーん。諦めないかな？どうにかして足掻く。』

『ふーん。』

『お父さんとお母さんがさ、俺達が大人になる前に死んじゃったからさ。俺はそうならないようにするんだ。』

『……シロちゃん。』

『まあ、それ以前に、俺が諦めが悪いだけさ。俺はニイさんみたいに才能がないから、泥臭く生きるんだ。どんなことにでも、俺は簡単に諦めないよ。ニイさん。』

シロちゃん。……士郎。そうさ。俺だっつ。

お前を残して……死ねるもんかよ!!

テトラクテュス・グラマトン

そんな言葉が脳裏に浮かぶ。神の名を示した四つの子音。神の法の執行者。

何故この言葉が浮かぶか疑問に思うが、神が創ったものだからか、通過儀礼のものなのか知れない。

人から『使徒』へと変わる儀式。

「テトラクテュス・グラマトンッ！」

体から魔力があふれ出す。肉の器に内包されていた魔力は、歓喜に沸くかのように銀色の光を発する。

その光は自らの光を分散させ、プリズム光をとどこどこに彩らせる。

「っ！」

晋吾はシオンに向けて手をかざす。するとシオンのを囲む光の球体が出現する。

シオンは驚くが、先ほどまで肌を熱していた熱気を感じなくなったことを知り、この球体は自分を守ってくれるものだとして理解した。

晋吾はさも当然がの如く宙に浮く。

「肉の器から解放したか！？アポストロスッ！！」

スフィアの声に答えマグマはうごめき、大津波を起す。

晋吾はその手に銀色に発光する魔力を集め、剣の様な形をなす。

「おおおおおおおー！！」

鞭のようなしなりをしながら振られる剣は、大津波をまるで『無かったかのように』かき消す。

「なんだと！？消された？いや・・・排除された！」

眼を開ける。体の痛みは消えていた。この体は回復力も凄いやうだ。今まで怪我したことすらなかったから知らなかった。

元の屋敷に戻ってきた。魔力は再び体内に閉じたようだ。スフィア
の存在は見当たらない。

「っ！そうだ！シオン！」

急いでシオンを探す。少し遠くにだが存在を確認。

「良かった。無事……うっ。」

シオンの姿は……酷かった。数秒であるが、あの熱気の中にいたからであるう。

肌は真っ赤にただれ、全身水ぶくれ。全身に重度のやけどを負っていた。

「シオン……クソッ！どうにかせんと……」

こんなことになるなら、回復系の魔術でも習っておけばよかった。

しかし、自分に悪態ついてもどうにもならない。知識・記憶を総動員させ、解決策を探る。

「……姉ちゃん達の所に運ぶにしても時間がない。その前にシオンが……それに間に合ったとしても、姉ちゃん達が直せなかつたら意味がない。」

俺に出来ることは……

そう考え、ある出来事を思い出す。それはイリヤと話している時であつた。

「なあなあ。ドラゴンの血を飲むと不老不死になるとか、なんでも効く霊薬だつてほんとなん？」

「私は飲んだことないから知らないけど」

「のんでたらビックリやわ。」

「そうだって言われてるわね。いきなりどうしたの？」

「いやな。俺の血とかどうなんやろ？つて思つて。」

「……そうね。極上の魔力が詰まつてるんですもの。余裕じゃない？」

俺の……血。

手段は決まつた。後は方法だ。問題はどうかやって『キズをつけるか』だ。

ひとまずガラスを割って持つてくる。そして右手にガラスの破片を握り、魔力を固める。

「まさか……自分で矛盾したコトやることになるわなっ」

勢いよく左手の掌に突き立てる。左手だけ解除。そんな器用なこと出来たら苦労しない。

魔力硬化で覆われた掌に、魔力硬化したガラスの破片で攻撃。なんてバカなことをしているのやら。

真剣な表情で掌を打ちつける晋吾の表情は、いつもの飄々とした顔と打って変って、鬼気迫るものがあった。

何度も何度も打ちつけ、諦めかけた時

「っ！」

痛みを感じた。

ツー・ポタ

ごく少量であるが、掌からシオンの口に落ちる赤い雫。

晋吾は固唾を飲んで様子を見る。・・・が

「はは、はははははっ」

見る見るうちに、治っていくシオンの顔を見て、苦笑いにも似た笑みを浮かべる晋吾。

「ホンマに、チートも大概にせーやって感じやな。シオン。」

ほっつと安心しながら、現在全裸である状況に、再び苦悩する晋吾

であった。

ようやくホテルに戻ってきた晋吾です。シオンはベットで眠っております。

あのあとシオンを背負い、屋敷を出て、某蛇のようにスニークングするかと思いきや、途中で干してあった洗濯物を拝借。

普通に帰ってこれました。親父は「その子どうしたの？」と質問攻め。息子が朝まで帰らんかったのに女のことばかり聞きやがって。

アレ？朝まで帰らない？・・・朝帰り。女づれ。・・・おk。
分かったよ親父。違うんだって、そうじゃないんだって。

しばらくしてシオンが目覚める。そして事情説明。・・・めっちや怒られた。

すごく心配してくれていることが分かったので素直に謝った。ごめんな親父。

シオンはもう行くとのこと。体調を気遣ったのだが、最高に絶好調らしい。・・・すげえな俺の血。

「ありがとうございます晋吾。私一人ではどうなっていたことが・・・」
「なに。俺はやりたいたままでじゃ。」
「それでもありがとう。」

差し出された手を握る晋吾。

「おう。日本に来た時は、俺を呼んでくんろ。力になるさかい。」
「・・・ええ。その時は、是非」

そうしてシオンと分かれた。今回の件はシオンが事後処理をしてくれるらしい。

なんでも教会とかに説明が必要だとか。シオンがいてくれてよかったわー。

ノリで力になるとか言ってしまったが、まあいいだろう。

彼女とはまた会うことになる。今度も大変だろうが、任せろ。

友人が困ってるときぐらい、手を貸すのは、友人として当たり前だろ？

第23話 死徒と使徒。（後書き）

実はアポストロスのコンセプトは、

人間版イデオン

だったりする。みんなイデオン知ってる？知ってるよね？
最後はほぼイデオンソード。ちなみに俺はイデオンガンよりソードの方が好き。

一応死徒戦はこれにて終了。次回もイタリア編。シオンの事後処理と、バチカン観光がメイン。それではまた次回。

第24話 変人の年末。(前書き)

予告通りにシオンの事後処理およびバチカン観光をお送りします。

前話のあとがきでイデオン知ってたかな？と書きましたが感想で結構知ってる人が多かったのでえかったえかった。

スーパー裏設定ですがイデオンドならぬシンゴエンドは存在します。ほら、ステータスで書いた宝具ですよ。

晋吾、人類の可能性に絶望 ビックバン・ミゼン！！ 終焉の宇宙
宇宙再生。

みたいなく。

第24話 変人の年末。

side シオン・エルトナム・アトラシア

頗る体調の良さに有頂天になりそうな意志を抑えつけながら、教会への報告が終わり一息をつく。

足がつかぬように書いた手紙であるが、アトラスの錬金術師である私が書いた手紙を教会は否定できないだろう。

12、13歳程の東洋人の少年が死徒二十七祖の一角を滅ぼす。

言葉に、文にするのは簡単であるが、それはひどく異常なことであった。実際目にした私でさえも、書きながら違和感を感じるほどに・

教会のひざ元のローマに居を構えたスフィア・ヘリオポーズはその力が強大であったため放置されていた状態であった。

それが教会の物以外に滅ぼされたとあつたら対外的には権威の問題でマズイ。

しかし、アトラス院のものが『事実である』としたものは限りなく事実であり、覆したくも覆せるものではない。

ゆえに恐らく教会は内々にこの事実を処理し（手紙を燃やすだけで
終わりだが）、教会の手柄にするだろう。

これにより、教会はこれまでの成果も含め、12、19、22、2
3、25、26位の死徒を殲滅したことになる。

数十年ぶりの死徒二十七祖の殲滅であるので、本来なら大いに沸か
せる事実なのだが、教会は今や大忙しでそんな暇はない。

なぜなら手紙の最後に爆弾を乗せておいた。

その少年は使徒^{アポストロス}である。

それこそ『神の子』の復活どころではない。『神の化身』がやって
来たのだから。

曰く、人類の守護者。

曰く、人類の審判。

曰く、人類の終焉と始まりをもたらすもの。

文献等で様々なことを語られているが、実際にこの星に誕生したの
は初めてである。

使徒の存在にある者は歓喜し、ある者は不安を覚える。

人類が対面したことの無い使徒の存在を知るのは、星、地球の端末である真祖の存在があるからである。

多くの文献は真祖が謳った使徒を募ったもの。真祖は言う、使徒は『敵』ではないと。

躍起になって教会は使徒となった少年を探すだが・・・絶対にばれないだろう。正直、冷静に見ればただの変な子である。

本当におかしな子供であった。初対面から抵抗感なく話せる雰囲気を持ち、安心させてくれる力強い少年。

また会えるような気がしてならない。分かれたばかりなのに既に心待ちしている自分がいる。

損得抜きに力を貸してくれると言ってくれた少年を思いながら、絶好調の体で地面を蹴り、シオンは歩き始める。

しかし後日、何故か『吸血衝動』が消えていること、何故か分割思考の5つが

『ああ晋吾。あなたのためなら私は・・・』

と言うファイル名の元、嚴重な封印がされているのに気づき、最大

7つであつた分割思考が

35と単純に5倍になっていて大いに慌てるのであつた。

S I D E O U T

シオンが慌て始める三十時間と数時間前、晋吾達ご一行は旅行の最終日を過ごしていた。

最終日はバチカン観光。親父はまさかバチカンに行くことになるとは……と感慨げな表情で言っていた。

大みそかも近いための、ミサの準備がされている所もあり、一年の終わりを感ぜられる。

そう言えばうちも帰ったら準備しないと。まあ、シロちゃんが粗方用意しているだろうが。

俺たちの内に宗教家のものは一人もいないが、学術的に興味や、芸術的な興味を刺激するこの国はこの世に生を受けたならば一度は行

つてみた方がいいと

実際に目のあたりにして感じた。んー。流石バチカンと言ったところか。やはりシロちゃんも来ればよかったのに。

バチカン宮殿は流石の一言だった。前世でフランスの美術館に行っていた時は小難しい言葉を並べたくなっていたが、逆にバチカンは一言で纏めたくなると言うのだから面白い。

ちなみにだが宮殿に入る前に1時間ほど並んだのだが、その列の並びに沿うようにアコーディオン弾きの男の子がちらほら。

つい『俺の歌を聞けー！』と乱入したくなっていたが（というか目の前まで行った）、姉ちゃんに首根っこ掴まれて止められた

ぬう、最近姉ちゃんが俺に対して全くの遠慮がなくなったのは、喜ぶべきなのか悲しむべきなのか？

またステンドグラスは、爺ちゃんの家にもあったがまた違った凄味を抱かせる。

でもサンタンジェロ城が爺ちゃん家より小さかったのにはなんとも言えなかった。

サンピエトロ寺院はでかくて綺麗だった。親父曰く、露出が多いカッコだと中に入れないらしい。短パンでもアウトのコト。

幸い全員普通の服装だったので問題ない。というか、姉ちゃんは兎も角、たいがーの露出過多の服とか見たことないんだけど。

冬はたいがーカラーのしましまTシャツに緑のワンピースみたいな上に着て、夏はTシャツにサブリーナパンツ（多分あってる）を着る。今？いつもの服装冬バージョンだ。・・・あとでいってやろう。あのオシャレ？ナニソレ？な舞弥姉ちゃんの方が服装しつかりしてるぞ？って。

上に登れるらしいので行ってみることに。しかし、狭い・長い・壁が斜め・傾斜が急という訳の分からん階段を上るはめに。

すれ違う人達もひいこらと息切れしながら登っている。親父？階段を見た瞬間に「下で待ってる。」と宣言しました。

へたれの極みだがいい判断だ。姉ちゃんは俺が抱っこし、たいがーと一緒に登って行く。

「着いた！」

「お疲れさん。」

疲れたと言いなながら元気に騒いでいるたいがーに苦笑しながら景色に目を向ける。

「いい景色やー。見えるか姉ちゃん？」

「よく見えるわ。一面赤土色の屋根が連なってるのがいいわね。」

「おっ、中々ええコメントやないの。」

フフンツと胸を張る姉ちゃん。どれどれーっとへばっていたたいがーもやってくる。

途中を通り過ぎたサンタンジェ口城もよく見える。素晴らしい天気

感謝だな。

「ん？」

眼を凝らしてみると、なんといつぞかの青い髪のシスターが見える。マジか。城に住んでるんか？

「なあなあ姉ちゃん。」

「なに？」

「シスターってあの城に住んでいるん？」

「シスター？」

そう言っつて目の前の城を指差す晋吾。

「・・・晋吾。多分それはシスターじゃないわ。」

「マジで？」

小声で話すイリヤの言葉に驚愕する晋吾。マジか、コスプレだったのか。

「サントンジエロ城は観光地としても有名だけど、実は・・・死徒の保管所でもあるのよ。」

なにそれガチで怖い。

「そんなところを我がもの顔でウロつけるのは・・・十中八九埋葬機関の人間ね。・・・人間じゃないのもいるけど。」

そうなのか・・・キチガイエリート集団の埋葬機関で殺さんでいい判定の死徒でシスターのコスプレをする。うん。素晴しき変人で

すね。

「ちょっと速めだけど帰った方がええかのお？」

「何で？」

「いや昨晚二十七祖狩りましてね。」

「は？」

帰り道、姉ちゃんが寝るとき以外ずっと怒られた。要約すると、

「もうツ！心配したんだから！！バカバカバカああ〜！！」

って所だろう。自分の姉が最強の萌えキャラであると誇っていいだろうか？

日本に帰ってきて家についたらもう大みそかの準備、正月の準備が万全な状態であった。

おう・・・もうやることねえ。流石シロちゃんと言っておこう。今日で部活の冬練習が終わったと言っのにこの子は・・・

久しぶりの土郎料理長の食事を頂いたら涙が出そうになった。おふくろの味ならぬ弟の味である。

ちなみに、流石のたいがーも年末ぐらい実家で過ごす。

藤村組組長の一人娘として、新年のご挨拶を務めるらしく、毎年親父とシロちゃんと一緒に組長さんに挨拶に行ったときに見るが、孫にも衣装っていうか虎にも衣装だった。

が、一年で一回の女を見せた反動か、二日から四日まで俺ん家でひたすらミカンを食べる寝正月。

ミカンが切れるとガ ガうつさいので大量のミカンを購入しているのである。・・・俺もミカン好きだし。

大みそかは例年の如くガキつかか紅白かでシロちゃんとじゃんけん大会。

今年も俺が勝った。フツ、じゃんけんなんぞ高速後出しで必勝よ。

よって今年も「笑っては行けない衛宮家5時間」を行う。何故5時間か？

簡単な話で姉ちゃんがもたんのよ。

無敵の霸王・舞弥姉ちゃんは今年も笑わなかった。ガンバレ日テレ！

途中まで見て、今年は一成の家(寺?)でお蕎麦をご馳走になることになったので、寝ちまつた姉ちゃんをおんぶしてみんなで出かける

除夜の鐘を聞きながらそばを啜る。うん、乙なものですな。

「シロちゃん。今年もよろしゅうな。」

「ああ。宜しく、ニイさん。」

波乱万丈の人生であるが、今日も衛宮家は平和であった。

第24話 変人の年末。（後書き）

シオンさん死徒化停止、うんでもって微使徒化。ご都合主義ワロス。

まあ、血にすごい力を持つ型月世界ならいいかなーと思いました。封印された分割思考は真っ黒く晋吾に傾倒しています。

色々と素晴らしい使徒の血は、のませるだけで強制的に血の契約をさせます（いいことばかりではないのだよ）が、そこはシオンさん、人間PCとしての力を遺憾なく発揮させて（気絶中なのに）掌握される前に排除までは至りませんでした。ロック（封印）に成功しました。

流石シオンさん、ウイルスバスターなんか目じゃないぜ！！

封印させているので、普段通りのシオンさんですが、使徒の血により身体能力強化・分割思考増加・高速思考高速化と、まあ、晋吾程ではないですがチートと化しています。たぶんシエルクラスには余裕で勝てるんじゃないの？ごめん結構適當。

シエルさんを埋葬機関所属と知った晋吾。月姫編でシエルさんが起こすシリアスな雰囲気を一瞬にして晋吾ワールドにすることを期待する。

イリヤが最強の萌えキャラかどうかは・・・知らん。ごめん俺、萌えは弱いんだ。

でも燃えには俺強いよ？

長々とあとがきスイマセンでした。次回はほのぼの3学期の衛宮家をつづる予定。そのあとは2年生編に入ります。桜が満を持して登場。それでは次回。

第25話 変人とセバスチャン。(前書き)

PS3がソニータイマー発動で動かなくなりました。俺号泣。スパロボとかテイルズとかパワプロとか買いたいゲームいっぱいあるのに……。

気を取り直して、今回は衛宮家の新住人・セブのことセバスチャンの話。

エーテルに関して自己解釈が少々。深く考えないでくれると幸いです。

それではどつぞつ。

第25話 変人とセバスチャン。

「なあ……マスター。」

「なんやセブ。」

正月も終わり、2月の中旬に差し掛かった頃。晋吾は自室兼研究室で何やら作業をしていた。

ちなみに和室である。和室におかれたパソコン数台はわりとシユールであった。

話しかけたのはもはや置物と化しているホムンクルスのセブ。好きに呼べと言っていたが、まさかマスターと呼ばれるとは・

「私の体はいつになったら出来るのだ？」

そう。実はこのセブ、まだ達磨状態でなのだよ。

「んー。もう少しや。」

「この間もそう言っていたぞ。腕と足の動作実験だったか？あれは成功したのではないのか？」

実は四肢を1つずつ取りつけての動作実験は成功した。

魂と肉体を結ぶ精神及び神経を疑似的に形成させるエーテル。ホムンクルスの鑄造の時にも使われるらしい。

姉ちゃんは『知識』はあるけど技術がないため、セブの魂と機械の

腕をエーテルでつなぐことができないとのこと。

仕方がないので爺ちゃんに聞いてみた。そしたら広辞苑10冊分ぐらいの本が送られてきた。ちよつと感動した。

二人で10月あたりからあーだこーだ言い合つて先週、何とか作ることができた義手・義足の様なもの。

セブにつけて、指やら関節やらが動いた時は二人で飛びまわつて喜んだ。フツ、やはり開発はいい……

しかしエーテルとやらは反則だ。魔術協会において第五架空元素であり、すべての物質の素であるエーテル。

これに熱・冷、湿・乾の要素が加わることで風火水地の四要素になる。四大の要素に溶け合い、形を成す為に必要な媒介とされる。

魔術の世界で言うエーテルはこんなものだ。簡単に言うとこれがなると魔術が成立しないというもの。

しかし、科学的見方は違う。俺から言わせるとこれは高性能情報変換粒子とでも言うか？

ちよつとした科学的な話になるが、こいつがあれば8バイト64ビットの情報が一瞬にして膨大な数に変換できる。しかも逆も可能ときている。

正直これさえあれば人工知能なんぞ余裕だ。人の思考情報も演算できる超高性能CPUがあるからな。

どーしよー。めっちゃ使いて。科学的なアプローチでのエーテルの証明は……多分可能。

2・3年ぐらいの時間はかかると思っけど何となく筋道は見えてい
る。

しかし、そんなことしたら魔術側の攻撃が半端なくなることは必然。
シロちゃん達も危なくなる。

クッ！こんな裏コードみたいの知りたくなかったわ。やりたいけど
我慢我慢。……最終手段としておこつ。

まあ、とりあえず実験は成功したのだ。しかし、まだセブが達磨で
ある理由は……

ぶつちやけ出来具合が気に入らなかったからである。

それもそのはず、晋吾がかつて製作していた時はある程度材料工学
が発展していて、より柔軟な運動を見せた。

簡単な話、ウィーンガチツガチャガチャ、と言った鈍い機械音が何
とも言えないのだ。

まあ、駆動音にロマンを感じないわけではないが、俺が目指してい
るのは違いのだよ。

「と、言うことでなんかないの姉ちゃん？」

「柔軟性がある金属ね。お爺様に聞いてみましょう。」

「おう。」

爺ちゃんフル活用である。ちなみに始めの材料も爺ちゃんから貰いました。爺ちゃん大好きだぜ。

2月14日。女たちの・・・いやある意味男たちの聖戦でもあるバレンタイン当日。

そんな中、晋吾と凜はいつもの部室で・・・

「うめえ」

「中々美味しいわねこのチョコレートケーキ」

「おう。舞弥姉ちゃん御用達のケーキ屋さんのや。」

いつものようにのんびりとしていた。ちなみにケーキは晋吾が買った。買った。

クラスメイトにはバレンタインでなんか動揺しない熟練カップルとして見られ、男子からは羨望を、女子からは尊敬の視線を浴びていた。

が、二人は「そんなこと知ったこつちゃねえ」といった様子。

実際、

「これバレンタイン割引で安かったんよ。」

「へへ。私も買いに行こうかしら？」

「そんな金あるんかい？」

「……馬鹿にしてるの？」

こんな感じである。お前ら中学生か？

「ところで凜ちゃんはチヨコ誰かにあげたん？」

「……誰にもあげてないわ」

「あれか。高嶺の花を演じているとチヨコもあげられないんやな。」

バツカでーって顔をしてたらレイガン打たれた（ガンドって言うらしい）痛くも痒くもないのでそのままケーキをパクつく。

凜ちゃんも何度も経験して（遠坂邸にて。始めは驚くってレベルではなかったが）悟ったらしく、平然としている俺に突っ込みも入れなかった。

「義理チヨコぐらいやったらええのに。」

「なによ。私があげようがあげまいがあなたに関係ないでしょ？」

「クラスの連中めっちゃ狙ってたんやん。」

比喩ではなく、クラス一の美少女である凜は今日一日、監視と言っほどの目線を受けていた。

スゴイ勢いでアピールしてくる奴もいて、本来ならうざったらしく
つてありやしないのだが、そこは我らが遠坂凜。華麗に綺麗に優雅
にスル　した。

ちなみに、何故晋吾がこんなことを言ってくるのかと言つと、若い
子の恋愛を酒（今飲んでるのは紅茶）のつまみにするおっさんく
おりていーが発動したただけだった。

「所であなたは貰ったの？」

「おお。何個か貰ったで」

自他ともに認める変人である晋吾だが、フレンドリーになった席周
辺の娘とかに貰ってたりもしていた。

意味合いとしては一成のおこぼれと言うのが近かったりする。

「へ〜。ふ〜ん。そう。」

「俺。凜ちゃんからも欲しかったんやけどなー」

「え？あ・・・ん・・・ゴホン。そつ・・・そう？」

「マブダチなのに義理チョコくれないのはいわー」

「・・・なんか釈然としないわね。」

まあ、恋だの愛だのそんなのかんけーねえいつもの晋吾であった。

ちなみに士郎は、兄も凜からチョコを貰っていないことを知り、

まだまだ望みはがあると、来年はもっと凜ちゃんと仲良くなることを
強く決意するのであった

爺ちゃんから頼んでおいた素材が来た。

ダマスカス鋼だつてさ。……包丁でも作れと言うのか？木目状の模様を持つ金属を見る。

「へえ。ダマスカス鋼なんて流石お爺様ね。」

マジで？姉ちゃん曰く、柔軟性に富み、木目に沿って容易な魔力伝達が可能な金属とのこと。

「爺ちゃんからくるからファンタジー鉱石が来るもんだと思ってたわ」

「ファンタジー鉱石？」

「ミスリルとかオリハルコン的な。」

「んー。でも一般的にダマスカス鋼は製造方がはっきりしないという神秘が含まれているわ」

え？ああ。そうか、この世界ではまだ分かっていないのか。魔術師たちが神秘を減らさないように化学的研究をさせないとか？

気を取り直して製作に入る。ダマスカス鋼は刀剣の金属として有名で、

もし絹のネツカチーフが刃の上に落ちると自分の重みで真っ二つになり、鉄の鎧を切っても刃こぼれせず、柳の枝のようにしなやかに曲げても折れず、手を放せば軽い音とともに真っ直ぐになる

なんて伝説もあるぐらい有名である。まあ、海外版日本刀のようだ。

この世界だから知らんが、その伝説が誇張ではないことが分かった。本当に柳の枝みたいになつて戻つた。ねえわ。って思った。

ありえねーと思つてもこの柔軟性は非常に助かる。と、言うことで。

「シロちゃん。複製頼む。」

「ホントにいいのか？こんなことして？」

「ダイジョーブデース。」

不安を煽る博士のような発言をしてシロちゃんに投影を促す。なんかあつた時のストックは必要なのだよ。おもに壊れた時とかね。

ちなみにシロちゃんは金属の投影が得意らしい。一番楽なのは銅だつてさ

親父曰くだけど属性が金属なんだと。なんかカッコいいよな属性・金属。・・・やつぱ厨二か。

2回目なのでサクサクと作業が進み、1週間後、完成に至る。

「どっ？セブ」

「うむ。悪くない。新鮮な感覚だな。」

「うっ〜ん。ええんやけど・・・うっ〜〜ん」

びみよーだ。腕や足のしなやかさは完璧。まるで人間見たいだ。しかし関節部が微妙。結果としてバランスが……

「少しぐらい妥協しなさい晋吾。セブだって、いつまでも達磨さんじゃ可哀想じゃない。」

「な……んだと？」

姉ちゃんに諭されるとわ……

「まあ……我慢するかの。改めてよろしゅうな。セバスチャン」

「ああ。今まで働けなかった分存分に働くぞマスター。」

働きもののセバスチャンであった。

3月に入りかけたある日の晩こと。

「親父。人間ドックって知ってるか？」

「人間……ドック？犬？」

「確か日本語訳は船渠せんきょやったかの？」

「……もしかして病院？」

「Yes」

そう言うと逃げようとする親父。しかし舞弥姉ちゃんに拿捕される。どこに逃げようと思ったんだ？

「放すんだー。放すんだ舞弥ー。」

「すみません切継。しかし、私も不安なのです。」

「え？何？切継さんどこが悪いの？」

「それを調べてもらうのが人間ドックやろが」

パタパタと暴れる親父を抑える舞弥姉ちゃん。なんかシユールだ。

「まあ、ええ。明日行くからな。」

「明日!?!」

「おう。もう病院はおさえてるんよ。」

「ニイさん相変わらず行動が速いな。」

「それが俺の強みです。」

特に深く考えず、親父ぐらいの年齢なら定期健診ぐらいしなないとないと思っていた晋吾。

しかし、この行動が衛宮家を大きく動かすとは露にも思えるはずがなかった。

第25話 変人とセバスチャン。(後書き)

セブようやく動けるようになるの巻でした。彼は衛宮家の名執事として働き、のちに赤い弓兵の師(弓のではない)となるのかないとか。

そしてさりげなくバレンタインイベント実行。中1ではこんなもん。年々、年を重ねていくとともに起こる変化に注目！！ってところでしようか。

そして切嗣病院フラグ。舞弥の心情としては確実に悪い結果だろうと分かっているが、実際どの程度なのか知りたいって言ったところ。

今回は切嗣初めての病院。月姫フラグ1。桜との出会い。までいけるといいなあってところ。それではまた次回！

第26話 変人の転機 (前書き)

お久しぶりです。最近鼻肩の大阪の野球チームが好調で気分がいいです。

お酒がおいしい。

この間久しぶりにアクセス解析を行ったところいつの間にか100万pv、15万ユニークを軽く超えていてちょっとビックリ。読んでくださる皆様様に感謝です。

それではどうぞ。

第26話 変人の転機

人間ドックにブチ込んだ親父の診断結果が来た。医者曰く、

「即刻入院してください。」

「マジで？」

「マジです。」

肺とか心臓とかが虫息とのこと。てゆうか内蔵全部ヤバいらしい。

一番近い病状は老衰とのこと、全体的な機能低下が著しく、絶対安静を心がけること、ご家族の協力と努力で自宅休養もできること、最後に

いつ死んでもおかしくないと言われた。

「なんか現実味がないんやけど。」

「……」

舞弥姉ちゃんと二人で院内の休憩室で珈琲を啜りながら、晋吾は事実を真に理解できないでいた。

頭の中に浮かぶのは「あのオヤジが？なんかの冗談か？」という疑問。

余りにも普通に生活していた切継が深刻な身体機能の低下に見舞われていたとは露にも感じなかった。

いや、風邪がひきやすかった。すぐに息が切れていた。睡眠時間が

長かった。よくよく考えればいくつかその節が見える。

ひ弱だとか使えんとか言っていた俺が恥ずかしい。

「晋吾。」

「ん？」

「実は・・・切嗣がこうなった原因があるんだ。」

「なんやと!？」

「親父!！」

「こらこら晋吾、病院は静かにしないとダメだぞ？」

「舞弥姉ちゃんから聞いたで。アリンコにやられたって。」

「アリンコ?」

「・・・アンリ・マユの呪いのことを話したんですが、アリンコって呼ぶんです。何故か。」

親父はアリンコにやられたらしい。思えば親父に会った時に遭遇した猫嫌いの黒いのがそうなのかもしれない。

まだ冬木に居るか?いるようには感じないが・・・まあいいか、どうせ犯人は現場に戻ってくる。

今はそんなことよりも親父だ。

「呪い消せば治るんか?」

「いやどうだろう?もう大分弱ってきていると感じるし・・・けど大

丈夫。病気は気合で治すんでしょ？」

むんツと胸を張る親父。いや・・今まで確かにそう言い続けたけどさ。

結局親父はひとまず入院することに。数日様子見て自宅休養することのこと。

この時の俺は、それでもまだ、現実味を感じられず。問題を先送りにしてしまつのであった。

再び桜の咲く季節になった今日この頃。とつとつ俺らも2年生となった。

「一緒のクラスだとなえのー。シロちゃん。」

「どうだろう？普通双子って一緒のクラスにしないんじゃない？」

結果・・・違うクラスだった。

「な・・ん・・・やと」

「あつ、柳洞一成ってニイさんの友達だよな？確か柳洞時の子だった？一緒のクラスだ。」

「マジか。超いい奴だからよろしくな。」

一成はシロちゃんと一緒らしい。

「おっ、凜ちゃんと今年も一緒やわ。」

「ふーん」

一生懸命キョーミありませんよーって感じを出しているシロちゃんだが、めっちゃめっちゃ気にしている。

相変わらず可愛い奴だな。

「と言っこと今年もよろしゅう。」

「……おかしいわね？今日の星の巡りはバッチシだったのに。なんで同じクラスになるのかしら？」

アレじゃね？相手が宇宙そいつだからじゃね？

始業式が終わって数日が経った後。

「衛宮家緊急会議よ。」

「姉ちゃんどうしたんー？」

突然姉ちゃんが入院中の親父以外（俺、シロちゃん、舞弥の三人）を集めて緊急会議を始めた。

セブ？洗濯してるよ？

「実は・・・真祖の姫君が日本に来ているのよ。」

「ッ！真祖の！？」

舞弥姉ちゃんが驚くが、俺とシロちゃんはなにそれー？って感じだ。

「死徒については知ってるな？」

「おうよ舞弥姉ちゃん。前に教えてもらったね。」

「真祖は一言で言えばはじめから吸血鬼だったモノよ。」

あー。そう言えば前にちろっと言ってたかも。真祖にかまれると死徒になるってな。

「んで、姫君ってなによ。」

「んー。説明すると長くなっちゃうんだけど聞く？」

「いや、いいです。」

「ともかくやんごとなき人ってこと？」

シロちゃんの言葉に、まあそれでいいわと姉ちゃんは言う。結構いい加減になってきたな。姉ちゃん。

「で、なんでこんな会議くわい始めたん？」

「結論から言うわ。しばらくの間、門限16時ね。」

「んなアホな!!!」

「仕方がないでしょ〜っ。真祖の姫が来てるんだから！」

「異議あり！長子の横暴を許すな！説明を要求する!!!」

「とにかく寄り道しないで帰ってくればいいの！シロウもしばらく部活休んでね。キリツグの看病とか言えば大丈夫だわ」

「ちよつと姉ちゃん。横暴だよ。」

「イリヤ。それでは晋吾達も訳が分からんだろ。」

舞弥姉ちゃんの助け船。このロリっ子じゃ話にならんわ

「真祖が来ている理由はあの『ロア』なのよ？魔術師だったらしばらくは外にでないわ。」

「いや俺ら『ロア』すら知らないし。」

「簡単に言うると普通の死徒のウン十倍強い奴らが殺し合うのよ？確か三咲町ってところで、場所は関東首都圏だから遠いけど、用心すること他ないわ。」

「おk。状況を把握した。シロちゃん早く帰ってきてきてね？」

「うん。分かった」

みんななんかの拍子で火の粉が降りかかると嫌がっているんですね。慎重で陰湿な魔術師ならではのですね。

あつ、真祖。思い出した。あれか、星が作ったって奴か。吸血鬼だったのか、知らなかった。

ん〜、一応親戚(?)みたいなもんだし挨拶しに行った方がいいかね？ほら、裏社会って挨拶が基本(表もだな)みたいだから

と、言う訳でやってきました三咲町。門限は守りますよ？16時にかえりやいいんでしょう？俺にとって関東に出るぐらいの距離なぞあってないモノよ。ぶっちゃけ日本狭いお。

町に入るとすぐに分かる真祖の存在感。一言、すんげえ。こんな圧倒的な存在感を何でみんなは感じないんだ？

ああ、自然とリンクしているからか。ある意味納得。人間には無理やな。精霊を感じろって言っているのと同じだし。

こうして真祖がいるであろう。マンションの前に立っているのだが……どうしよう？

多分6階なのだが、その前にはセキュリティが立ちふさがる。セム入ってます。

……うん。凜ちゃんと同じ感じで行くか。真祖ーって呼ぶの微妙だから姫ーって呼ぼう。

ん？呼ぼうと息を吸い込み始めたら真祖が移動を始めた。どうしたんだろ？

しばらくするとエレベーターから降りてきて真っ直ぐこっちに向かってくる。

「……」

「……………」

無言である。なんか言え。

しかし、アホみたいな美人である。まつ毛なげ。胸でけー。あと金髪からの光の反射具合がヤバい。キラキラ。

「……………」

「……………」

まだ無言である。あと目線がブリザード。

「こんにちは」

「……………こんにちは」

しゃべった！しゃべったよ！！

「何しに来た。アポストロス」

「ほ？挨拶に来ただけやで？あつ、これつまらないのですが」

そう言っていせんべいの詰み合わせと玉露を差し出す。失礼のないように上のほうを買ってきたぜ。

「買っておく。」

買ってくれるらしい。

「……………うち来る？」

「…厚意に甘えさせてもらいます。」

そのあと20分ぐらい俺がもってきたせんべいを片手にお茶を二人で飲んだ。

んで、「また来るわ、なんかあったら呼んでなー。力になるでー」
っていったら「うん。分かった」って言ったのを確認して家に帰った
見送りは不要。もうすぐで3時半だから、流石の俺も急がんといい
ないのですよ。最近姉ちゃんが姉の貰禄が出てきたのか怒ると怖い
のよ。

「てなことがあったんよ」

「・・・どう考えても嘘だと思えるのに、コイツだったらって考
える自分が憎い。」

昨日の姫に会ったことを凜ちゃんに言ったらこう言われた。凜ちゃ
ん。そんなに自分を責めたらあかんで？

「そう言えば、分かっているとと思うけどしばらく私は同好会出られな
いわよ?」

「おー。凜ちゃんはことが終わるまでじっとるんやな」

「当たり前でしょ?過去にも巻き添え食った奴らもいるのよ?」

凜ちゃんは真祖の件が終わるまですぐに家に帰るとのこと、本格化し始めたら学校も休むってさ。

「まあ、安心して新入生の方は任せとき。」

「こんな同好会来る人いるのかしら？」

「来たら来たで、来なかったら来なかったでええと思ってるから別に平気や」

「まあ、そうね。別に人数いなきゃ出来ない訳じゃないし・・・」

「そんな所や。じゃ凜ちゃんまた明日な。」

「ええ。さようなら」

無駄に優雅に挨拶して帰る凜ちゃんであった。

先ほどの会話からも分かる様に、今日から新入生の部活動の参加が始まる。

しかし、正直勧誘とか乗り気じゃないため、いつもの教室の前で一成と作った奴で遊んでいるだけだが。

「おー、一成まつてたでー」

「何してるんだ？」

「二足歩行式無線ラジコン熊。『クーちゃん』を散歩させてるんねん」

そう言ってコントローラを操り、一成の足元まで前進し、一成の足にソツ・ソツと手を添えるクーちゃん。

「・・・なんか可愛いな」

「そうやる？2号機『マー君』を作ってあるさかい。部屋から椅子と一緒に取ってき」

「ホントか？」

そうして二人で熊を散歩させていた。一成は始めラジコン操作に苦戦していたがすぐに慣れたようだ。

おかしいな。二足歩行でしかもちよつと大きい（普通のぬいぐるみサイズ）から普通のラジコンよりもはるかに難しんだけど・・・このチートめが！

俺だって自分で作っておいて、なれるのについていか普通にか歩かせるのに時間がかかったのに・・・

若干ひねくれながらクーちゃんはさすが歩いて行く。歩いて行く。しばらくして、・・・蹴られた。

「「「あつ」「」」

俺、一成、蹴った人物が同時に声を出しクーちゃんは足を260度開脚し、右腕を120度回した状態で地面を熱い抱擁を交わした。

「クーーーーウウウウウー!!」

「え・・・あ・・・」

「大丈夫かクー！返事するんや！」

そう言ってコントローラの中央のボタンを押す。

『クウ~~~~~』

「クーお前って奴は……」

晋吾が勝手にし始めた一人芝居にオロオロとしていた加害者Aは一成になだめられていた。

「少女よ。落ち着くんだ。こいつのことは無視してかまわん。」

「え……でもこの子怪我しちゃってる……」

「安心せい。このぐらい余裕で直せるわ」

そう言うと少女は幾分か落ち着きを取り戻したようだ。

「そうですか」

「……なあなあ。嬢ちゃん」

「？何でしょうか？」

「なんか作るの興味あらへん？」

「え？」

「晋吾。嬢ちゃんとか失礼だぞ」

「何いっとるんねん。お前やて少女とかぬかしてたやろ」

「ぬっ。これは失礼。」

「あっ、私、間桐桜です」

「柳洞一成だ。」

「晋吾や。衛宮晋吾やで」

間桐姓で衛宮って名前前で反応したってことは、あの家のご息女ですねありがとうございます。でも、そんなの細かいことは気にしない。

「同好会。入らへん？」

第26話 変人の転機。（後書き）

いつまでもつかキリツグ！実は原作キリツグはこの時期（士郎中2）ではもう死んでるんですよ。

原作5年前ですから中1の時点でお亡くなりになっているはず。ここまでキリツグを生かしているのは何か？それは気合という名の家族への愛です。とか言ってみる

まあ、とりあえず晋吾の血による治療は絶対ないと断言しておきます。

そして2年生になった晋吾たち。はたしてどんな1年になるのやら。

そして月姫フラグ1、アルクとのお茶会。それってフラグか？って言われる恐れありだが、絶対予想できた人はいないと思いたいのだ
がww

ちなみに月姫の方も原作なぞりはほどほどにしたいと思います。というよりも今の脳内構想では晋吾が前線に出過ぎてる（爆）。もうシッキー空気でいいやって開き直ったらそのまま書くかも

最後に桜登場。2年生編ではメインヒロイン級の登場回数を誇るかもしれない。

しかし、今の予定で変更なしのままなら義妹ルート一直線なんだが。

今回はこのへんにして次回の話。桜と同好会、相棒復活、月姫介入1をお送りしたいと思います。それではまた次回！！

第27話 変人と月の姫。(前書き)

どうも久しぶりです。テストもようやく終わりました。ナントカノ
リキッタヨ!

それと26話であった冬木と三咲町の距離関係を修正させてもらい
ます。

どうやら設定では関東と九州ぐらいの差があるらしいです。

てことで三咲町を関東首都圏としておきます。申し訳ないですm)

——) m

それではどつぞー

第27話 変人と月の姫。

少し考えさせて下さいと言われ、間桐さんと分かれた後、一成と部屋でクーちゃんの修理にかかる。

「なあ、晋吾。」

「お？」

「どうして彼女を誘ったんだ？」

「そりあ……気分の問題よ。」

「どんな問題だ……」

偶々クーちゃんを蹴ったのが間桐さんだっただけよ。

「まあ、別に無理に入ってもらおうとは思っておらんし、やっぱりええって言われたらそこまでや」

「そんなものか？」

「おう。だから言ったやろ？気分の問題やつて。」

後日、間桐さんは同好会に入らせてもらいますと言いに来たが、言わされてきましたオーラが丸見えであった。

間桐のご当主に監視してこいと言われたんですね？わかります。

間桐のご当主の話は親父からよく聞いている。

やたらと嫌っており、ここ数年ポワポワしてきた親父ですら機械の様な無表情で『糞蟲』と呼ぶほどである。

出会ったら即抹殺を息子娘にすら言い渡す始末。どんだけ嫌いなんだ親父？てか俺ら間桐の爺さんがどんな顔かしらん。

まあしかし、魔術師たちの思惑なぞ心底どうでもいいので、俺は彼女を快く迎え入れるだけだがな。

「ホンマに魔術師ってよくわからんわ」
「………そう」

ゴールデンウィークも終盤の5月始め。凜ちゃんがヒッキーになった。

「あなたも魔術師の家庭のモノなら、分かるでしょ？」

とか言われて、ゴールデンウィーク中に遊びに行っても門前払いにされる始末。スイマセン、分からないです遠坂先生。

創作意欲も湧かないのでスーパー暇になった俺は、真祖の姫さんの家に遊びに来たのだった。

遊びに来たと言っても特にすることもなく、二人で茶を啜りながらボケーっとしているだが。

まあ、俺を見るか真祖の姫であるアルクエイド・ブリュンスタッドを見るかで、爺の茶飲みか、王族のシエスタであるかの差はあるがな

「平和やのー」

「平和？」

「こつこつという穏やかな時間を平和って言うんよ」

「……そう」

「悪くないやろ？」

「……」

晋吾が口を開き、それに対して真祖が一言二言言葉を返して黙りこくる。その繰り返しだが、晋吾は実は気に入っていたりする。

なんだかええの、この空気。顔は全く似てないが嫁を思い出すわ。

前世における晋吾の結婚は、ある研究でお世話になった、企業の重役が持ってきたお見合いの縁談がきっかけであった。

当時の晋吾は結婚に対して否定的でも肯定的でもなく、自らの夢に一直線だったために、周囲が見かねて持ってきた縁談であった

相手は非常に寡黙な女性で、親ですら何を考えているか分からないと言われるほどであったが、

観察眼が優れ、ベラベラと話したがる晋吾とはいい関係が築け、最終的には「意心地がいいから」と結婚に至った。

恋愛をしたことのない晋吾は、知らず知らずのうちに『真祖の姫に惹かれていく

だがしかし、ある少年によって短く儂い恋に、と言うよりも恋だと気づく前に終わってしまうことを晋吾には知りうるはずがなかったのであった。

「所で、ろあ？だったかの？見つかったんか？」

そう言うところアルクエイドは新聞を晋吾に差し出す。

「連続殺人事件。．．．．．ロアの仕業だというんかい？」

真祖の姫さんは静かに頷く。おかしいな、朝見た朝刊にはこんな記事はなかったはずなんだけど。

アレか、魔術師による情報操作って奴か、どうせなら現地でも情報操作しておけよ。

「あなたは．．．．．ロアを追ってきたんじゃないの？」

「お？入る時言ったやろ？暇つぶしやって。それに追っただんのはお前さんやろ？」

「．．．．．」

「でももう動いてるってわけや、これは探しやすいかのお」

「．．．．．ホント？」

「おう。次動く時が勝負や。」

次の日、学校から帰ってきたらすぐに、ロアとの対決を想定して『

相棒』の作成に取り掛かる。

やはりですね、安く仕上げようとか考えていたから悪かったのですよ。本当にすまない我が聖剣エス リボ グよ。

今回のバットは既製品バットではなく3月に依頼していたオーダーメイドバット19950円、素材は天然メイプル。

重さ、長さ、ヘッドの位置、グリップの太さ、全てが俺に適した新しい相棒である。

それに、「しばしの痛み、許せよ」と言いながら釘を打つ。計20本。んでペンキで黒く塗る。完成。

聖剣エス リボ グ？爆誕である。

「二万もかけたのに本来の用途に使ってあげないのって、可哀想に思うんだけど・・・」

「フツ、流石やなシロちゃん。その優しさが世界を救うやで。」

「そんなのにやられる死徒がかわいそうだわ」

死徒に同情なんぞいらんのや、姉ちゃん。

ちなみに、二十七祖とやったときの覚醒みたいのは何度か試したけど出来なかった

厨二なセリフを何度か口調を変えて試したのにも関わらず、うんともすんとも言わん。めっちゃめっちゃハズい。

あれか、気力150で発動する特殊技能って考えておけばいいのか。

そして21時。姉ちゃん就寝の時間である。フッ、お子ちゃまめ！
さて、今のうちに抜け出しますか。

午後9時半。真祖の姫さんと合流。ヤッホーって言われた。あんた
誰よ？

なんかあったのかと聞いてみたら

「いやねー。殺されちゃってさ。調子でないのよねー」

って軽く言われた。ノリがメツチャ軽い。あんた誰よ？クールな姫
さんを返せ。

「むーっ。姫さんじゃなくて名前で呼んで欲しいな」

「名前？・・・ある・・・アル・・・アルでいい？」

「んゝ、まっいつか！特別って感じがするし！」

何が特別何だかよくわからんがな。

「俺は晋吾でええよ。」

「言われなくてもそう呼ぶわ。」

マジか。クールな姫さんを返せ。これはアレやな。殺してくれやが
った奴は制裁を与えねばならん。

「てか俺、名前教えただっけ？」
「星が教えてくれたわ。」

なんだそのチート。個人情報もへったくれもないじゃないか

「フフツ、安心して。星が教えてくれたのはアポストロスの名前だけよ。プライバシーを覗いたりはしないわ」

「ホンマかい。」

「でも、私個人としては興味があるわ」

「っておい。」

真祖の姫は本当に楽しそうに笑いながら、夜の道を歩いて行く。本当に楽しそうに……

「ねえ、本当に分かるの？」

「大丈夫やっていうとるがな。」

俺とアルの二人はロアを追うと言う名目で夜の街を徘徊していた。

現在三咲町にある死徒の気配は3つ。いつぞかの変人シスター、ごちやごちやした奴、そして魂が汚い奴。

最後の奴はヒドイ。魂の汚れが俺ですら感じられるほどである。

アルに聞いてみたら、ロアとやらは転生無限者と呼ばれているとのこと。

なるほど、幼女神の元にはいかないでいるとこんなことになるのか。今逝ったとしてもこんな頑固な汚れ落ちるのか？

ジョイくん召喚しないと無理じゃない？こっちの又メ又メもちよちよいのジョイやで？

まあ、とりあえず居場所が分かっているので、先回りして待ち伏せしましょ？って感じだ。

移動経路を先回りしてみようとしていたら、途中で人がロアの進行方向上にいることが分かった。

「うげ、人がいるやん」

「どうしたの？」

「コラあかんわ。ちょっと急ぐで？ロアの進む先に人がおる。」

電柱を駆け登り、電柱から電柱へ、家から家へと空を駆ける。

うはっ、距離的にギリギリのタイミングか？

「間に合うの？」

「ギリギリかも知れんな」

「私、先に行く？」

「行ってくれたら助かるわ。」

「貸しだからね？」

「おう。人命には変えられへん。頼んだわ」

「任せて！」

凄いスピードで走って行くアル。これなら間に合いそうだ

俺が辿り着くと、これまた凄いスピードで格闘しているアルと多分
ロア。

そして、凄いスピードであわあわしている女子高生がいた。

「ねーちゃん。落ち着くね。」

「あわあわあわっ、何何っ？今度は何!？」

「落ち着くね。こついつときは深呼吸や。吸って 吐いて」

「すーはーすーはー」

しばらく深呼吸を繰り返したら落ち着いたようだ。

「とにかくのお、ここは危ないから移動しよか。」

「うわー何が起きてるか見えないよ〜」

「はいはい。あまり見てると巻き沿い込んで首とぶでー」

「何それスゴク怖いんだけど!？」

騒ぐねーちゃんを抱きかかえてその場を離脱する。

「とりあえず物騒やし。家まで送るわ。」

「てかなんなのいったい？あつ、人生終わった・・・と思ったらスツ
ゴイ綺麗な人に助けられて、ありがとつってお礼を言おうとしたら
いきなりバトルし始めるし・・・」

「空飛ぶし？」

「そう！すつごく怖かったんだから!！」

「でも楽しそうやったで？」

「・・・うん。」

「ねーちゃん絶叫系好きやろ？」

「うん」

どうやら素直な子らしい。

「ここしばらくは夜は出歩かない方がええで？」

「そうなの？」

「おう。ねーちゃんを襲った奴みたいのがもう一匹いるの。」

「うへー。三咲町って平和な町なのになー」

「しかたあらへんがな。災害みたいなもんや。家でじっとしているのが一番や。」

魔術師の連中ですら通りすぎるのを待つてるぐらいだな。

「結局アレってなんなの？」

「吸血鬼や。」

「え？」

「吸血鬼や。」

「え？吸血鬼って、美女の血を吸うって奴？」

「おう。ねーちゃん美人やからの。」

「えへへ、そんなことないよ」

「そうか、そんなことないか。」

「え？」

「理解したわ。」

まあ、カワイイ娘ではあるがな。美人ではないと思われ。将来はどうなるかわからんがな

「あつ、家ここなんだ。」

「おつ、そうか。基本昼間は比較的安全や。夜は一人でぶらぶら歩くの禁止やで？ちょっとコンビニ行ってくるが、奴らにとっては頂きマンモスや」

「怖いコト平然と言わないで……」

プルプルと震えるねーちゃん。よーしよーしと背中をさすってやる。

「今日はありがとね。」

「おう。」

「あつ、そう言えば。名前聞いてもいい？」

「名前？晋吾や。衛宮晋吾。」

「私は弓塚さつき」

「またの、さつちん」

「さつちんって言わないでよっ!？」

さつちんを家に送った後、先の道に戻ったら誰もいなかった。マジか。

もう夜も日付が変わりそうなので家に帰ることに、念のためにアルの家のベランダに『家に帰ります。探さないでねっ』と書いた手紙を投げ入れておいた。

これで大丈夫。さて、帰りますか。

「先輩。ここどうやるんですか。」

「ここはな、ここをここここここよ。」

「……もう少しゆっくりやってくれませんか？」

さっちゃんを助けた次の日。きちんと学校には登校する俺。マジで偉い。

そして放課後。桜ちゃん（ちゃんと許可を得た）はぬいぐるみに興味があるらしく、教えてあげているのだ。

女の子らしくて実によろし。一成？生徒会やがな。

「桜ちゃんは家で何しとるん？」

「え？家で……ですか？」

「おう。趣味的な話よ。」

「趣味ですか……特には何も。」

「ほつかほつか。なら家でもぬいぐるみ作ってみ。材料とかはやるからの」

「いいんですか？」

「おう。桜ちゃんにも作る喜びをな、家でも味わってほしいねん。

凜ちゃんやって家でチクチクやってるらしいで？」

「……凜？」

「あつ、そう言えば言っていなかったの。俺らと同年代の女の子がいるんよ。遠坂凜ちゃんって言ってな。カワええんよこれが」

「知ってます。」

「マジで？」

「ええ。有名ですから。美人で、優秀で……」

おふつ、桜ちゃんからダークサイドが噴出してきた。誰かー！ジャダイを呼んでくれ！

「桜ちゃんー！」

「はい？」

「もつと笑うがええよ!」

「え?」

「アレなんですよ。桜ちゃんはもつと感情を外に出した方がええで?」

「感情をですか?・・・正直苦手です。」

「苦手な桜ちゃんに今すぐニコニコ笑え言っんわ無理なことだと分かるで。せやから・・・笑いの勉強や」

「笑いの・・・ですか?」

ポカーンとした表情の桜ちゃん。フツ、衝撃を隠しきれんか。

「まずは基本や。何でやねん!」

「??????」

「ツッコミは笑いの基本やで?復唱や。何でやねん!」

「なんでやねん?」

「『で』の位置がアクセントや。何でやねん!」

こうして下校時刻までツッコミの練習をしていた晋吾と桜であった。

桜の向かう先はどっちだ!?

「何でやねん!」

「ほづ。悪くないで、さっきの」

第27話 変人と月の姫。(後書き)

はっちやけ姫誕生。誤字にあらず。

晋吾、知らず知らずのうち初恋終了のお知らせの回でした。南無♪
なんでアルって呼ばせたか？・・・ぶっちやけ気分です。

弱ってるはずのアルクェイドとロアが戦えた理由は、ロアが「おな
かが減って力が出ない・・・」って状態だったで勘弁。まあ血が足
りなかったのですよ。

てかさっちゃんと晋吾絡ませるの超楽しいわ。名コンビですね。今後
もちよくちよく出すのでさっちゃんの出番をお楽しみに！

相棒に関しては木製バットに釘っていうシンプルな作りを崩さず、
グレードアップさせてみました。どこがって？いやね、既製品バッ
トじゃなくてオーダーメイドバット手にした感動はすごいものよ？俺
はパターンオーダーだったけど、超感動したし
そんなところです。はい。

桜はえーっと、スイマセン。やっちまった感は否めません。まだ、
まだ大丈夫！

シロちゃんへの突っ込みが強くなるだけだから！！

今回はこの辺にして次回の話。次回からは月姫本格参戦！相棒を手
に晋吾がはっちやけます！それではまた次回！！

第28話 変人と混沌。(前書き)

祝・月姫編開催！

ようやくここまですたどり着きました。

不定期+遅筆で申し訳ないのですが、楽しんでもらえると幸いです。

それではごっぞー

第28話 変人と混沌。

「やっほー」

「あつ、晋吾だ。やっほー」

今日もいつものようにアルの家にお邪魔しています。しかし、今日
はいつもと違う。

「え？君は？」

「俺のセリフやがな。」

メガネをかけた学ランのあんちゃんが一人。第一印象、ヘタレっぽ
い。

「どちら様？」

「私を殺した子。」

「よし、メガネごと目ん玉潰したるわ。」

「え？」

「え？」

有言実行。その変な目ん玉貰ったッ！

しかし、既の所で止められる。

「何すんや。」

「いや、俺のセリフだよな？」

ちい、ヘタレかと思ったたら中々やるなこいつ。

「私のことで怒ってくれるのは嬉しんだけど、サッサと移動したいからいいかしら?」

「移動?」

「実はこの子にやられた傷がまだ回復してないの。だから隠れ場所として利用してるホテルに行こうと思って」

「どうやらマンションには金品の回収のために立ち寄っただけらしい。

そう言われてジト目でメガネを見る。ウウと呻くメガネ。どうやら引け目は感じているらしい。

ちなみに殺した動機とかは聞く気はない。

まあ、『ついカツとなつて、でも反省はしてる』みたいなこと言われたら、流れでチヨメチヨメしてしまう自信があるからな。

「俺もついて行く。心配や。」

「え?ほんと!?!」

花が咲いたような笑顔になる真祖の姫。 . . . なんや、悪くないの。こつこつのも。

ホテルに向かう途中でメガネのあんちゃんの名前を聞いた。遠野志貴と言っらしい。

「ほなシツキーやな」

と言うと微妙な顔をしていた。あだ名とかに慣れてないなあんちゃん。

対するあんちゃんは『衛宮君』とか呼んできたので晋吾と呼んでと言っておいた。

二人は二十七祖の一人、ネロ・カオスに見つかって逃げている最中とか。

シオンとの出会いにより、忘れかけていたメルブラの思い出が刺激され、色々なものを思い出した。

その中の一つであるネロ・カオス。ホアー！ホアー！カマキリホアー！あとカラスうざい。

マジで？アレとやるの？ハツ・・・ハメコンされないようにしないと。

ホテルについたらアルは寝ると言って寝てしまった。男二人気まずい空気に。

「・・・君は？」

「それは俺とアルの関係を聞いてるんか？それとも、『ここ』に留まるのか？と聞いてるんか？」

つきついで口調になってしまふ。ぬう、今日の俺どうしたんだろ？

「・・・まず二人の関係を聞きたい・・・かな？」

「俺は親戚みたやと思つとたで。」

「親戚？じゃ晋吾は吸血鬼なのか？」

「俺は人間よ。ただ、在り方がちよつと特殊なだけや」

人間であり、アポストロスという存在だから。

「留まるつていうのは？」

「なに、若干逃げたそうにしとつたさかいに……な？」

そういつてウインクしてやると、目をそむけるシツキー。キモかつたんか。スイマセン。

「……包帯買つてくる。」

「ほ？」

「いや、アルクエイドの傷がさ」

そういつてアルクエイドの服から血がにじんできているのを指差す。

「クツ、ククツ。そうかい。そうかい。ほな、はよ行つてき」

「ああ。行つてくる。」

バタバタと出ていくシツキー。

「自分で殺しといて包帯かいな。クツクツク。こりゃシツキー二重人格かなんかやな」

しばらくしてアルが目を覚ました。

「おはようさん。夜やけど」

「おはよう。私吸血鬼だから合ってるわよ？」

「なるほど。面白いやんか。」

軽く寝起きのあいさつをしてから、真祖の姫は

「志貴は？」

と聞いてくる。・・・なんだろ、なんかおもしろくない。

まるで答えるかのように扉が開き、志貴が入ってくる。

アルはあんちゃんに外に出ると危険だと怒り、あんちゃんが包帯を買ってきたと言うとアルはいい人ねと言って笑いかける。

・・・なんだろ、なんかおもしろくない。

もやもやしていると、ホテルにゴチャゴチャした死徒が近づいてくる。教授が！教授が来る！！

ネローきつとくるーきつとくるー。ガチホラ なんですけど。

アルとシッキーはナイフ取り出してなんかやってるけど、俺は一般市民がホアーされないように行きますか。

「アルー。」

「なに？晋吾」

「ちよっと教授とホアってくるわ」

「??????」

ロビーにつくと阿鼻叫喚の巷と化していた。

具体的には開かない扉をドンドン叩きながらジワジワと詰め寄るワ
ンコに怯える人々。

恐慌にかられる皆さんを見て悦ってるのか教授？趣味悪いぞ。

とりあえず、相棒を取りだし、魔力放出＋魔力硬化でワンを消し
て入り口の自動ドアをたたき割る。

雪崩のように割れた自動ドアから人が逃げ出す。これ、隠匿とかど
うすんのよ？まあ、教会と協会のどちらの仕事か知らんがガンバレ。

「ほお、アホストロス使徒か。」

「よお、ゴチャゴチャしたの。」

「ゴチャゴチャ……まあ、間違えではないが」

カウンターを背にたたずむカオス混沌。

「幸運だな私は。貴方を取り込むことができれば、根源に至るど
るか、『会える』ことができる」

「幼女メツチャうるさいで？イケメンツンデレだし。」

「ほう。して、どちらが？」

「教授的に会いたいのは幼女の方やる。魂関係やし。」

「なるほど。リトルレディのエスコートの勉強をせねばならぬな」
「なんでやねん」

にやりと笑うネロ・カオス。絵的にやばいだろ、190cmに近い教授と幼女神って。

「まあ、できたらの話や。お前に喰えるか？宇宙そふを」
「フツ、喰らうてみせるさ、宇宙そふよ。」

晋吾はバットを下段に構えて擦りよる。そしてキュツツという地面と靴のゴムがこすれる音とともに一気に距離を詰める。

ネロ・カオスの呼吸に合わせて動いた完璧な間の取り方であったが、彼は混沌。攻撃に呼吸なぞ関係ない。

足から洩れるように獣が晋吾に襲いかかる。晋吾はバットを上に乗ね上げ、獣を一撃で消し、返し刃でネロを狙う。

左の肩口目掛けて振られたバットをネロは何か分からない生物なまものを生み出し、防ぐ。

防ぐと言ってもその生物は醜く潰れ、気味が悪い断末魔をあげる。晋吾はそれを気にもせず、右肩に蹴りを入れる。

「ガッ！」

蹴りと言つても何かが爆発したかのような音を立て、大きなネロの体が吹っ飛ぶ。

飛んだ先に回り込んで、晋吾の左打席。ブシイイ！と空気を切り裂く音と共に脇腹にバットがめり込む音が聞こえる。

混沌の体に打ち込んだバットから伝わる感触は違和感。骨や肉の感触ではなく、固い何か。

ネロの顔は苦痛に歪んでいるが、背から生まれる無数の顔と爪のナ二力。

「アアアア！！」

「ちいいい！！」

放り投げるようにバットを手放し、右拳で側部を殴りつけるが、左肩に当たってしまう。

魔力硬化をつきぬけて傷を付けるまでは行かなくも、その衝撃は十分な痛みを与える。

晋吾は痛みに顔をしかめるが、当たったその勢いそのまま体を左回りに回転させ、左の順手でネロの腹にめり込んだバットを掴む。

ネロ・カオスは転がる様に地面に叩きつけられるが、柔道の受け身の如く立ちあがり、腹から2mはありそうな大きな獅子の様なものを生みだす。

晋吾はそのままバットを左の腰ために構えて、右手でバットをしっかり握る。獅子もどきは咆哮をあげながら牙をむける。

「カアッ！」

晋吾は気合と共に息を吐き。

「エイヤアアアアア！」

居合一閃

獅子もどきは消えはしなかったが、はじき返され、口元はぼろぼろであった。

「ハアアアアアア」

呼吸を整えるとともにバットを両手で上段の構えを取る。

深く吐く息を切り、息を止め、奥歯を噛み締め、右足の親指に力を込めたところで……

「晋吾！！」

「ッ！」

『姫』の声が聞こえた。

振り向くと焦った様子のアルクエイドと所々傷が見え、ナイフを手に持った志貴がいた。

押せ押せの状況に水を刺されたことに心の中で舌打ちし、心配してくれた様子のアルに、嬉しさからか、笑みが出る晋吾。

「グ……これがアポストロスだと言うのか？ 足りぬ……餌が……餌が必要だ」

こちらを見ずに入口に向かう混沌。

「逃がすかよ。」

晋吾がそれを追いかけて、アルクエイドがそれに続き、志貴が慌てて後に行く。

しかし、獅子もどきが動き始める。

「晋吾！」

アルクエイドは晋吾を助けようと急ぐが、晋吾は見えていた。

前足の爪で切りかかれた晋吾は、バックステップでそれをかわし、自らの左足でその足を蹴りつける。

崩れた所に右足で獅子の足を踏みぬき、さらに脳天にバットを振り下ろす。

流石にこれ以上は耐えられないのか潰れて消えていく獅子。

時間稼ぎには十分だったのか、すでにネロの姿は見えない。逃げられたのだ。

「ちい、逃げられたわ。」

「しかし、流石ね晋吾。混沌とやりあえるなんて。」

君が来るまで『圧倒的』だったとは言わない。彼女が俺のことを本当に心配してくれたのは分かる。

彼女は俺が強いことを知っているが、『強さ』を知らないのだ。

緊張が切れたのか、疲れたのか、しばらくして志貴が琴切れたように倒れる。

死ぬなよ主人公！と一瞬焦った晋吾であったが、寝息が聞こえたので、ビビらせやがって！と殴りたい気持ちを一生懸命我慢した。俺偉い。

しょうがないので俺が背負ってアルクエイドのマンションに運んだ。

アルと二人で歩いている中、ふと、空を見上げた。

月が見えた。太陽の光を受けて映る月が、今夜は自ら光を発しているかの如く、綺麗に輝いていた。

第28話 変人と混沌。(後書き)

とりあえず一言。シツキーサーせん(焼き土下座)

しかしだ、アルクエイドと晋吾なんかええわ。結論は出さんけど。なんかええわ。

教授について、ホアコンやられるたんびに台パンしたくなる俺。しないよ？したくなるだけ。とりあえず、教授はうざいです。

ちなみに今話の教授が言った『会える』発言ですが、スルーしてくれると幸いです。一応、裏設定です。裏設定好きでスイマセン。とりあえずfate編入る前ぐらいに公開しようかなと思います。

んで今回の戦闘シーン。無双乙。ちなみに居合のイメージはガンガンnextのニューガン後格闘です。後 特 BZとか超好きだった。ちなみにだが、晋吾の剣術の才能はセイバーレベルぐらいあるけど振ってるのがバットだから剣豪にはなれないけど、GORIZAとかICHIROにはなれんじゃね？

教授の捨て台詞の

>グ・・・これがアポストロスだと言うのか？

がものすごく三下臭がする件について。でもなんか気に入っちゃってさww

ちなみにいくらご飯食べても晋吾には追いつけない。

なんか教授が可哀想になつてきた(涙)

そして最後に、月を見せたのはもちろん。月姫原作同様です。プロローグですよ。

今回はここまでにして次回のお話。次回はネ口の章完結編！あらかじめ言っとく。
シッキーさーせん。それではまた次回！

第29話 使徒と人と。(前書き)

ネ口編完結。永遠の中ボスである教授に敬礼！

ちよつとオリ設定話あり。

それではごっごー

第29話 使徒と人と。

夜が明ける前に家に帰ってきた俺。てかこの体やっぱすげえな、寝なくても全然平気だわ。365徹とかできそう。

今起きてきましたよーオーラを出しながら食卓へ、さてさて、今晚は決戦やからしっかり飯食って力つけんと。

ちなみに今日もちゃんと学校に行きますよ。俺、学生ですから。

「ニイさん」

「なんや。」

「昨日の夜どこ行ってたの?」

バ……レ……テるだど?

「?なんの話や?」

とりあえず惚けてみた。

「はあ、ニイさんのことだから心配ないと思うけど、心配している人もいるんだってこと。覚えておいてね」

「……おおきに」

「姉ちゃんには黙っておくからさ。」

ううう、いい男になりやがって。惚れてまじやろ。

「あつね。」

「なんよ?」

「誤魔化す時、額に手を当てて眼を閉じる癖。直した方がいいよ。姉さんが気づくのも時間の問題だと思うからさ」

「さて、なんのことかのお」

そう言って、眼をつぶる晋吾だった。

シロちゃんが朝練に行った後、朝のニュースを見ていたら昨夜の事件が報道されていた。

数十人がなくなったらしい。ロビーだけじゃなかったのか教授。逃がさなかったら百数十になってたかも知れんな。

一人で全てを救えるとは思っていないので、少しでも救えたことに若干の満足感を抱く。

しかし、全く隠してないのかよおい。でも逃げた人のインタビューが出ないってことはそこら辺で動いているのか?

全てを隠さないで、一部を隠して迷宮入りさせるのか。流石魔術師えげつない。流石代行者えげつない。

学校は何事もなく終わり(凜ちゃんはいなかったが)、すぐに三咲町に向かおうと思うので桜ちゃんに今日の活動は休みであることを伝える。

そしたら若干泣かれそうになったのには困った。そんなにやりたかったのかと思ひ。部屋の鍵を渡して好きなように使つていいと言つ。さて、そつこいで着替えていきますか。

「アレ？晋吾くん？」

「およ？さつちんやないの。」

「さつちんって言わないでよね！」

いつぞやの弓塚さつきさんじゃないですか。

「夜歩きしてへんで家でじっとしてたかのあ？」

「もちろん！あんな怖い目に会つても外に出歩くななんてバカじゃな

いもん

「さよけ

「あゝっ、その目は信じてないでしょ。ホントだよ？」

俺を指差してそう騒ぐねーちゃん。元気だなおい。

「それやなか

「？なに？」

「バカじゃないって話や。」

「????？」

「信じてないって話や。」

「……もしかしてバカにされてる？」

「おっ

むっ、と怒るさっちゃん。その顔で怒っても微笑ましかけただぞ？

「アツ、そう言えば、ありがとね。」

「？助けたお礼ならもう貰ったで？」

「違うの。昨日、ほら。ホテルで事件があったでしょ？」

「おっ」

当事者ですが何か？

「実は家族でホテルにご飯を食べに行こうとしてて、私が慌てて止めたの」

「ほう。そんなことがあったんか」

「おかげで助かったよ。九死に一生とはこのことだね！」

「それは良かったが・・・」

「ん？どうしたの？」

「いや、何でもあらへんよ」

九死に一生の使い方が違うと思うのだが・・・どちらかと言うと紙一重？

「まあ、無事で何よりや」

「うん。本当にありがとね。」

「何言ってるんや。ねーちゃんが止めたんやろ？ねーちゃんの判断が褒められることであって、俺に礼を言うのはお門違いや」

「それでもありがとね」

「・・・なら、どういたしましてと言うところかの」

にこにこ笑うさっちゃん。ストレートな感謝の感情に若干照れます。

「ところでお」

「お？」

「晋吾くんてさ、いくつなの？」

「なんでそんなこと聞くんや。」

「だって身長的に中学生なのに大人っぽいから、ちょっと疑問に思っただけ」

「……ジジイ臭いとか思っついてないやろな」

「そっ……そんなことないよっ。うんっ。」

まあ、ぶつちやけ元ジジイだからしょうがない。

「13や、今中2。」

「2年生なんだ。じゃ、来年受験だね？」

「高校受験なんぞ余裕じゃ」

「あゝっ！そ　ゆー考えの人は危険なんだよ！」

「まるで経験したかのような言い方やな。」

「うぐっ」

先輩しつかりして下さいよ。

「さっちん何年生なの？」

「私？高校2年生」

「おまんも来年受験やないの」

「うぐっ、言わないでよー」

「アレやな。親とかに『大学どうするの？』って聞かれても、まだ早いとか言っつて逃げてる口やろ」

「うぐっ」

懐かしいなあ。娘が受験する時もこんなことあった。下の息子と娘はすんなり決まったがな。懐かしいわ

「進路相談とかしてやるうかの？」

「いくら大人っぽくても年下にそんなことして欲しくないよお」

「アレよ。弟に相談するって考えればええんよ」

「……弟。有り……かな？」

ひとりっ子なんですね。分かります。

そんでその後17時まで1時間さっちゃんの進路相談してやった。ちよっと大学に前向きになっただらしい。

フツ、俺、いい仕事したな。

「アルやっほー」

「晋吾やっほー」

アルクエイドのマンションで合流する晋吾。案外この挨拶を気に入っているようだ

「あんちゃん大丈夫かい？」

「ああ、もう大丈夫だ。晋吾が運んでくれたんだって？ありがとうございます」

今日はお礼を良く言われる日である。

「教授うるうる動いてるみたいやけど、行く？」

「行くわ。志貴も手伝ってくれるって。」

「え？マジで？」
「……迷惑かな？」

俺的に殺し屋さんと一緒に居るのが怖いだけです。暴走して殺人貴になられても困るし

まあ、実際に暴走されても大丈夫だけどさ。面倒なだけで。一応釘を刺しておくか

「いや・・迷惑とかやのうて、シッキーさ、その眼。使わん方がええよ」

「晋吾も志貴の魔眼のこと分かるの？」

「おう。俺を誰やと思ってるんや」

「そう言えば晋吾って何なんだ？特別って言ってたけど」

話の腰を折るなよシッキー。

「アポストロス。古代ギリシャ語で『使徒』。貴方達人類の守護者でも断罪者でもあるのよ？」

何故か自慢げに話すアル。ドヤ顔が可愛いです。

「俺が名乗ってるわけやないで？幼女が決めたんや」

「幼女？」

「おう」

「恐らく『管理者』の一人ね」

「その管理者ってのは？」

「人間が言う『神』のことよ」

俺を見るシッキーの眼が引き気味になるのを感じる。そんなビビる

ことないやん。

「まあ、話もどすけど、その眼な。シツキーにも負担が凄いだけやなくて、コツチ側も迷惑なんよ」

「コツチ？」

「幼女の仕事の関係よ。魂の管理と掃除と作成な」

「なんかスケールがでかくて疲れてきたな」

「ガンバレ。んで、その眼で死の点を突かれると、魂が『死んだ』状態で幼女のところに行くんよ」

実はこつちに転生してくるまで、設定に時間がかかって幼女とイケメンの二人と体感時間で約数年の時を過ごした。

そんな中、幼女発の話でよく出てくることは、転生したら出来るだけ私の仕事を減らせとのことだった。

特に直死の魔眼に関しては口うるさく言われた。

壊れてるからって捨てるはもつたいなくて、一応直すんだけど大抵汚くってとてもじゃないけど使えないから

消すんだけど、その消す作業が一番面倒なんじゃコラ！さらに絶対数が減るからまた作らなきゃいけねえじゃねえか！的なることを延々と

俺、怒られてもどうにもできへんがな。

てか最初っから消しておけば手間かかかんないじゃね？と思っただけど黙っておいた。こつというときは下手なこと言わないで相槌打つてるのが一番。

「だからヤメテ？つて感じや」

「そんな軽いノリでいいのか？」

平気やる、幼女やし

「まあ、とにかく、その眼使わん・妥協点で点を突かなかつたら別にええよ？」

「・・・分かった。使わないよ」

「まあ、安心せい。」

「？」

「俺が、ヤル。からのお」

現在は公園にて待ち伏せ中。俺を倒せんと見て逃げ出したんだから、衰弱しているアルを囿にしたらホイホイ寄ってくるだろう。

と思い、教授ホイホイを設置。アルを囿にするのはちょっと心苦しかったが、彼女はいい作戦ねと言っていた。

自分で作戦立てといてスマンが、どこが？つて感じですよ。

シッキーは不満そうにしていたが、そんなん知らん。ならもっとい作戦ブリーズ

「真祖の姫か」

「あら、どうしたのかしら？ずいぶん焦っているようだけど？」

教授登場。煽るアル。余計なことせんでええから戻ってこい。

「晋吾にやられて自信でもなくなった？相手を考えてから言いなさい。」

いい終わると同時にアルクエイドに大量の獣が襲いかかる。

しかし、爪で切り裂き、貫き、圧倒するアル。あれ？俺いらない？

完全に出ていくタイミングを逃した俺ら。アルを中心に台風のような虐殺が始まって出るに切れなくなっている。

しばらくすると、獣を全て切り終わり、肩で息をするアルクエイドの姿が見える。

「アルクエイド！」

「ちよっ・・・シッキー不用意やって！」

心配してか、いきなり飛び出す志貴

死徒二十七祖第十位である死徒、ネロ・カオスが持つ固有結界「獣王の巢」

体内に666体の獣の因子と同数の命を持っており、放たれた獣を普通に殺しても混沌に戻るだけであり

生命因子は死なずに残ってネロ本体に還元され、すぐに復活させられる。

つまり、いくら殺しても意味がないと言っていること。

ネ口の体から、晋吾が戦った獅子と同じほどの大きな犬が出現し、志貴を襲う

咄嗟に出したナイフで応戦するも斬ったその体が志貴の体を覆ってしまう。

「グッ・・・」

「志貴！」

少し目を切ったアルクエイドの回りには先ほどより多くの獣が囲み、爪で対応するも、2本の腕ではカバーしきれず

腹を、腕を、噛みつかれて血を流す。

一気に不利になった状況に、晋吾は困惑よりも怒りが沸いた。

そんなことを知らず。混沌は笑う。

「真祖の姫である貴様を取り込めさえすれば、届く。届いてみようもはや当初の目的を忘れているようだ。真祖の姫を倒すことが目的でなく手段に変わっている。」

俺に近づくための・・・道具でしかない。

また怒りがわいてきた。

志貴の体を覆っていた数メートルはある犬を蹴り飛ばして、アルの回りにいた獣を巻き込み

アルに噛みついていていた獣を怒りのままに手で握りつぶす。

「くっ・・・アポストロス」

「アルを取り込むって、アホのこと考えてたのはおんどれか」

飄々とした晋吾の空気が、少しずつ重くなるのを感じる真祖と死徒と人間。

「なんやろ？俺、怒つとんのか？」

「晋吾？」

「さがつてる、アルクエイド」

「あっ・・・」

少し冷静に考える。今ある感情は怒り、喜び、愛しみ。

怒りは分かる。アルに対する教授の発言に怒ってるんだろうか？

喜びは何だ？怒れることに対して？

愛しみはなんだ？この感情はどこかで？

ああ、そうか、俺は重ねていたんだ。アルと性格が似ていたあの人と。

そして、改めて惹かれているのだ。コロコロと笑う。今のアルに。

だから怒れるんだ。だから嬉しいのだ。守れることに。愛おしいのだ。この可愛い姫が

今なら出来そうな気がする。

なるほど。キーは他者に対する激情か。皮肉だな幼女。使徒も人アポストロスつてことかい。

人を思わないと生きられない。

「テトラクテュス・グラマトン」

愛しみと内なる怒りとともに紡がれた言葉は、断罪の執行宣告だった。

この言葉を聞いてすぐに動けた自分を褒めてやりたい。そうネロ・カオス、フォワプロ・ロワインは思った

666の獣の因子の半数を使って練り上げる『創生の土』。真祖の姫であるアルクェイドが万全でも破壊不能であろう。

これを破壊しようものなら、身動き一つできぬ状態で、大陸一つを破壊するのに等しいほどの難易度である。

しかし、捕縛したはずの土からは銀色の光が漏れ

遠野志貴は思わずメガネを外してしまう。言葉と共に溢れるように銀色に光り輝く晋吾。

眼を開けてられないほどの光なのだが、志貴は限界まで眼を見開く。死の線が見えな。・・・いや、ないのだ。

メガネのおかげで見えなくなったと言っても、外せば見える。死の線がないこの光景に志貴は眼と心を奪われ、安らぎを感じる。

彼は常に疲れていた。何度も気絶しても、いくら寝ても、どんなに休んでも、眼が与える負担は大きい。

肉体の疲れは徐々に精神を蝕む。この眼を持つてから始めての十全な安らぎに

志貴は涙を流す。

真祖の姫は自らの感情を制御できずにいた。

名前を呼んでくれたことの喜び。怒ってくれたことの喜び。守る様に立ちはだかってくれたことの喜び。知識だけでしかなかった女としての喜びを感じる事ができる喜び。

初めて感情というものを与えてくれた彼が愛おしい。初めて安らぎと平穏を与えてくれた彼が愛おしい。

そして、溢れるような吸血衝動。

絶対の美味しいに違いない。彼なら快く飲ませてくれると。心赴くままに。という自分に都合のいい考えばかりが浮かぶ。

そして、血に溺れて私は彼のモノになる。彼の存在が私の意味にな

る。真祖の宿命から逃れられる。

しかし、恐れる。血を飲む自分に。彼の血を嬉しそうに飲む私を・・・殺したくなる。

そんな自責の念を銀色の光が洗い流すかの様に射し込む。まるで、彼が私を優しく抱きしめてくれるかのように。

動く晋吾。まるで動きを追従するように彩るプリズム光。

ネロ・カオスは急に足が浮き、視界が高くなることに驚く。そして首を掴まれていることに気づく。

徐々に銀色の光が一混沌>カオス<を覆う。

「なんだこれは！？何なんだ!？」

「消える混沌。其の行き先は、無・・・だ」

四肢の先から光が拡散していく。光が晴れた先には、何も無い。

混沌は無に還る。

この銀色が、彼が見た最後の光だった。

第29話 使徒と人と。(後書き)

嗚ませ犬臭がぷんぷんする教授に敬礼！

普通オリ主の怒りイベントってかけー胸熱ぐって感じになるのに、晋吾・お前、かわいいやつだな。って思った作者です。

祝アルクエイドヒロイン化決定！！ドンドンバフバフ。

これに伴いハーレムにすることにしました。あとでキーワードに入れておこう。

アルクヒロイン昇格のために教授が嗚ませ犬になったんだと思えば必要な犠牲だったのだな。もう一度敬礼！

後直死の設定はシツキーをでしゃばらせないようにしたためだったが、結局出しゃばってきた。あるえ〜？ちなみにもう一人の直死持ちについては触れない。体が『』とか晋吾と会わせるわけにはいかないじゃないか。と思ったからです。

『』の一部であるため、その気にさえなれば彼女の思い描いた新しい世界で古い世界を握りつぶし、世界を思うがままに変えられる能力を持っている。って何だ空？あつ、ダジャレになった。

と、言うよりもぶつちやけると空の境界の話面倒なんよww

さっちゃんが一話速くでたのは出たそうにしてたからです。よかったねさっちゃん！

次も出番あるよ！！その代わりシエルさんが消えた。あれ？じつ・次回出るよきつと！

今回の話はここまでにして次回の話。戦闘は一旦お休み日常パートをお送りしたいと思います。それではまた次回！！

第30話 変人と志貴と。(前書き)

とりあえず一言。シツキーすまん。こんなことになるとは……

今回の合言葉

「俺がアポストロスだ」

第30話 変人と志貴と。

side 遠野志貴

「ここは……」

知っている天井であった。

「おはようございます。志貴さま」

いつものように起しに来るメイド。昨日のは……夢？

「昨日……俺は？」

「昨夜、中学生ほどの少年が志貴さまを届けてくれました」

独り言のように呟いた疑問に答えるようにメイド……翡翠が答える。

そうか、晋吾が……

『死』にあふれた世界を急いで隠すようにメガネをかけて、体を起す。

ズキリと頭に痛みが走る。目を閉じて『アノ』光景を思い出す。少し痛みが和らいだ。

もう一度あの優しい銀色の世界を思い出す。心に安らぎを与え、害を排除する銀色の世界。

人の害を払い、人に安らぎを与え、人を救う光。

アポストロス。『神』に与えられた彼の役割。守護者で在り、断罪者。

違う。

彼は守るモノでも罪を断つモノでもない。彼は……

救うモノなのだ

俺は救われた。この『すぐに死ぬ』世界から、『本当』の世界を見せてもらった。死があふれない世界を

……俺もなりたい。救うモノに。『殺すモノ』ではなく、救うモノに。

「アポストロス」

「志貴さま？」

「いや、何でもないよ。なんでも……」

志貴がつぶやいたのは……己の心に住み着いた『神』の名であった。

SIDE OUT

昨夜、ネロ・カオスを消した晋吾は、いつもと変わらず学校に行き、一日を過ごしていた。

比較的眞面目に聞くことにした授業中。いつものように違うことを考えているのだが、しかし、少し晋吾らしからぬことを考えていた。ぶっちゃけ、女のこと、アルクエイドのことである。

なるほど、これが恋か。と達観した意見を出したりしていたが、若干戸惑いを隠せないで居た。

初めての感情つてのは結構、なれないモノだな。いやはや、いかな。ねコレ。

今アルと会ったら表情無理に隠そうとして、無表情になりそうだわ。

「珍しい顔をしてるな」

「何、俺も男だつてことよ」

「ほお、興味深いな」

いつの間にかに授業が終わっており、昼と一緒に食べるために一成が教室にやってきた。

シロちゃんはロアの件の関係上、放課後の練習に出ていないので昼休みを使って練習しているらしい。

スゲえなシロちゃん。俺にその根性はないわ。

「スマンが一成。今日は一緒できへん」

「クツクツ。遠坂が聞いたらなんて言うかな？」

何故ここで凧ちゃんが出てくる？ちなみに凧ちゃんは今日もお休みです。

俺？アルが近くに来ているみたいだ。こっちに向かってくるのを感じる。

さて、顔洗って気合入れますかね？あつ、弁当も持ってこ

「ヤッホー」

「あつ！・・・ううう」

嬉しそうな顔をした後、真っ赤にした顔で俯く姫。

この表情を見て、少し落ち着く俺。なるほど、始めては俺だけではないか。

「昨日は少し怪我してた見たいやけど、大丈夫かい？」

「う・・・うんっ。大丈夫」

両腕をプルプル振って健康をアピールするアル。こいつこんなに可

愛かったっけ？

「それは良かったわ。ほなら、飯でも食わへん？」

「飯？」

「おう。ピクニックと行こうか」

近くの公園で二人で飯を食う。と言っても、シロちゃんが俺に作ってくれた飯を二人で食うだけだが。

「ほれ、これも食べい」

ひな鳥の如く、ひよいひよいとアルの口に飯をやる。箸が一つだから仕方がないのよ。

「美味しいやる？」

「・・・よくわからない」

「ふむ。ならそれが美味しい味って奴や。覚えとき」

ハムハムと食べるアルを見て和みながら、俺も食べる。

「晋吾はいつもそうよね」

「何が？」

「よくしゃべるけど、深いコト。聞かないもの」

「深いコト？」

「真祖のこととか。・・・私のこととか。何で会いに来たのかとか」

ふむっ、アルの顔を見ながら少し考える。それは聞いてほしいってことなんだろうけど、聞かないでほしいってところか。

なるほど、難しき乙女心って奴ですね。

「何で会いに来たか・・・か。何、分かるからよ。」

「分かるって？」

「己惚れじゃなければやけど、俺に会いたかったからやる？」

「え？」

「俺も、アルに会いたかったから来た。」

「ッ
！」

ゆでダコのように赤くなるアル。あれ？なんか失敗したか？

しばらく話しかけてもそっぽ向かれる状態が続いたが、ようやく落ち着いた様子を見せるアルクエイド

「所で、肝心のロアは見つかったん？」

「・・・まだね。でも、ある町はもう死者で溢れてるわ」

「なるほど、死者の処理と蛇探しの両方をしないと行かないんか」

「ええ」

んー。正直、両方とも俺がやっちまいたいな。アルはまだシッキにやられて本調子じゃないみたいだし

しかし、流石のチートな俺でも分裂して2つにはなれん

「やっぱシッキにも手伝って貰うかの？」

「でも、点を突かれるのは困るんでしょ？」

「なに、俺に任せい」

『線』だけを見せればいいんだろ？シッキには変身ヒーローになつて貰おうか

「何か策でもあるの？」

「おう。俺は出来んことは言わへん。アルに教科書にも載った、いい言葉を教えてやろう。」

「なに？」

「可能性を信じる者に、不可能はない。不可能とは、可能性を信じないことだ。by 昔の俺。」

「昔の？」

「なに、ちよつとした過去自慢よ。昔の……な。」

また今夜会おうとアルと分かれた後午後の授業を受け、放課後、部屋に向かう。

さて、シッキー用の装備を作るとするか。

「……何を作っているんですか？」

桜ちゃんが怪しんで聞いてくる。

「何、ちよつとしたものよ」

「……ちよつとしたモノには見えなんですけど」

コンセプトは視覚情報の制限です。一言、エーテルすげー。と、言っても流石に部屋にはエーテルを持ち込まない

ノウハウはセブの実験にて貯えた。特に脳関係。ホムンクルスと人

間でどこまで違つか分かんがな

とりあえずある程度完成させて、帰ったらシロちゃんと姉ちゃんにも手伝ってもらお

よくよく考えたら衛宮家合作品だな。シッキー、大切に扱わなかったら俺のエス リボ グが火噴くぞ？

そして夜になり、アルのマンションの前につくと、シッキーがいた。

「おっ、シッキーや」

「あっ……」

驚いた顔をするシッキー。そして俺を見る目が睨んでる訳でもないのに怖い。何でや

「……まだ、この町に居るのか？」

「居るのかつて言葉は語弊やな。俺はこの町に来てるんや。」

「そうなんだ……。どこから来てるんだ？」

「冬木市って知ってるかい？」

「……ゴメン。知らない」

「まあ、西の微田舎やからのお。関東もんには分かんか」

「え？西？」

目が点になってるシッキー。

「で？俺になんか用かの？・・・いや、アルのマンション前に来たってことは、アルになんかあるんかい？」

「・・・ネロが死んだのに、町の猟奇事件が終わらないんだ。」

「ほお、せやから吸血鬼であるアルのせいだと思っただってことか」

コクリと頷くシッキー。

「ロア。ちゃんとしたフルネームは忘れたが、他人の魂を勝手に使う、『こちら』的には重罪人よ」

「そいつが・・・この事件の犯人・・・」

「犯人とか、あいつには微妙な言い回しやな。俺からすると敵や」

「晋吾の・・・アポストロスの敵・・・」

「とりあえず、アルん家に上がらせてもらっつかの」

後に、『神』を見ているシッキーの目を、良く見ておくべきだったと晋吾は後悔することになるのだが、後悔先に立たずとはこのことかな

アルにマンションのセキュリティを解除してもらい、二人で部屋に向かう。

「いっ・・・いらっしやい」

何故か身構えた様子のアル。なにを緊張してるやら。

「入口でシッキー拾ったわ」

「志貴？」

見えてなかったらしく、驚くアル。

「アルには前にも話したとおもっがの、シッキーにも手伝って貰いたいんよ」

「手伝う？俺が？」

「おう。ロアが作った死者を如何にかしてもらいたんや」

「死者？」

「説明が面倒やから雰囲気で察せい」

困ったように苦笑いをし、分かったと答えるシッキー

「とりま、外に行こうや」

2人を連れて晋吾は時間帯的に人通りが少ない広場に移動した。

「シッキーほれ」

「おっとっ」

志貴に向けてなにかカードの様なものを投げつける。

「……これは？」

「変身グッツよ」

いきなりドヤ顔でそんなこと言われても疑問しか生まれぬ。現に

アルクエイドと志貴は首をかしげている。

「まあ、かせい。使い方を教えるわ」

「あ・・・うん」

じゃ渡すなと言いたかったが、ぐっと飲み込んだ志貴

カードを人差し指と中指で挟み、バツ！と勢いよく腕を水平に広げ、バツ！勢いよく顔の前にカードを垂直に持つていく。

「変・・・身ッ！」

カードが光ったかと思うとヘッドギアに暗視スコープがくつついたようなヘンテコなメットをつけた晋吾がいた。

「かつ・・・かつけえ」

「???」

ゴクリと固唾をのみ込む志貴。どうやら男の子としての感性は持ち合わせているようだ。

かたや、どこか？と言っ言葉が出かかって飲み込んだアルクエイド。どうやら種族を超えて男女の感性とは相容れないものらしい。

「まあ、こんな感じよ。ちなみに解除ってイメージしたら勝手にカードに戻るで」

カードに変身を解きながら話す晋吾。

「でも、どうしてそんなものを？」

最もな質問をするアル。待つてましたーな表情な晋吾。

「魔力伝達の優れた金属プレートに転移の魔術を利用した技術により、コンマ数秒での変身が可能！エーテルを練り込んで作ったヘッドギアとマイクロチップにより視覚情報をメモリーに記憶させて使用者が望む情報のみを映すことが（ry）」

少々お待ちください。少々お待ちください。少々お待ちください。

「つまり、脳の負担を抑えて見たい対象のみの『死線』が見えるってこと？」

「まあ、要約するとそうやな」

はじめからそう言つて欲しかった志貴であつた。

「しかしのお。ホムンクルスで得た結果をもとに作つてあるからの」「え？」

すつごく不安になる志貴であつた。

「つてことで実験しにいか」

そして移動してきたのは8階建てのビルの上。なんでか？そりあへッドギアに暗視スコープつけた姿でうろついてたら捕まるがな

どうやって来たって？エレベーターと階段で普通に来たが？

「で？どうよシツキー？」

「ん・・倍率とピント合せるのが難しい・・・」

「死線は消えとるか？」

「うん。見えない。」

うーん。微調整で何とかなるレベルだなこりゃ。流石爺ちゃんの本ムンクルスと言ったらいいか？人間とほぼ同じとかパネエ。

「じゃ次行くで。あそこの奴見てみ」

「あれ？」

「おうそつや。」

サラリーマン風の男に指を指す。

「晋吾。やっぱり貴方も死者が分かるの？」

「おう。当たり前やがな」

「アレが・・死者？普通の人にしか・・・」

「見えへんか？」

コクリとうなづくシツキー。

「さて、そいつの死線を見るんやなくて、視界に映る中で一番太い死線を見ようとしてみ」

「・・・・・・」

気持ち悪いものを見たように顔をゆがめるシツキー。

「気分は大丈夫か？」

「・・・なんとか」

「どないに見える？」

「肩グチから腰にかけてと、顔を斜めに横断するように太い線が一本」

「なるなる。他は？」

「・・・見えない。」

「じゃ次な。一定レベル以上線が太い奴を見るようにしてみ」

「・・・ぐつう」

少し辛そうに呻く。

「真つ直ぐに居る奴と、奥の自販機の前に居る奴。手前のシャッターが閉まつてる家にいる奴」

「完璧やな。」

志貴の眼は死者の死線だけをしっかりと捉えていた。その結果に満足そうにうなづく晋吾。

「後は家に持ち帰って若干修正やな。シッキー、もう外していいで」「もういいのか？」

「おう。次には戦闘中でも使えるようししてきたるわ。今回は俺にまかせい」

そう言つて胸を張り、志貴からカードを受け取る晋吾。志貴は晋吾を頼もしく思った。

その後、晋吾と死者の戦闘を見たのだが、晋吾が作るザクロにしばらくバットが怖くなった志貴であった。

志貴と分かれた後、晋吾はアルと歩いていた。

「そう言えばさ」

「なに？」

「ロアの件で相談があるんやケドええ？」

「……いいけど、何？」

歩みを止めてこちらに体を向けるアル。

「ストレートに言うわ。ロアは俺にやらせい。」

「……晋吾は、私とロアの因縁を知らないんでしょね。だからそんなこと言えるのよ。」

「知らん。……が、会ったとしてもやることは殺し合いやる？」

そんな因縁を断つことは所詮自己満足でしかない」

「自己満足でも、私は……」

「自己満足なら、俺の想いを聞け」

「……」

「アルとロアとの間に何があつたかは知らん。せやけど……気に入らん。奴を追いかけるアルも、アルを待っている奴も気に入らん」

「晋吾……」

「こんなくだらん因縁。この俺が断ち切る」

晋吾の想いを受け、感情を抑えられなくなったアルクエイドは感情のままに晋吾を強く抱擁する。

アルクエイドの抱擁に愛おしさが溢れ、晋吾は奪うように唇を重ね

た。

そんな二人を、二人だけを照らすように、街燈と満月に近くなって
いる月が輝いていた。

第30話 変人と志貴と。(後書き)

シッキー「俺が！俺たちが！！アポストロスだ！！」

シエルさん「私もですか！？」

「って感じなことをしてもらいたいなーとか思ったり？やってしまった感が否めない

すまん。シッキー。

>可能性を信じる者に、不可能はない。不可能とは、可能性を信じないことだ。

好きな女の前ではつい自慢したくなるのが男ってやつよ。晋吾も男だってことさー

衛宮家合作の変身グッズ。メットだけ。カードとかの素材は土郎が、肝心の変身機構とエーテル関係はイリヤが、機械関係は全て晋吾は、何が言いたいかと言うと、

衛宮の技術力は世界ーイイイイイイ！

>カードを人差し指を中指で挟み、バツ！と勢いよく腕を水平に広げ、バツ！勢いよく顔の前にカードを垂直に持っていく。

変身ポーズ。とりあえずライダー変身動画像で勉強して考えた。動画像を見たときの感想。ブラックのキレがヤバいww

最後は嫉妬全開の晋吾。道端で抱き合ってキスとかバカップル乙。

今回の話はここまでにして次回の話。恐らくようやくシエルさん登場と思われ。

それではまた次回！！

第31話 変人と殺人貴。(前書き)

どもーお久しぶりです。2週間ほど風邪を患ってました。

全く、しつこいっただらありゃしない。みなさんも風邪には気を付けましょう。

という訳で31話ですが、若干長くなったので分けました。後半は連投します。

それではどうぞー。

第31話 変人と殺人貴。

アルと分かれた次の日の朝。

「……クツ。ククククククク」

「ニイさん。不気味だからやめてくれ。」

昨日のことを思い出すたびについニヤけてしまう。口元隠さないで。

「所でニイさん。台所になんの用？」

「おう。これや。」

とって冷蔵庫から取り出した牛乳を取りだす。

「ゴツゴツゴツゴツ……パハッ」

「2レッキかよ……」

「今度から牛乳は俺が買ってくるわ。」

「どうしたのいきなり？」

べっ……別に背伸びしないと届かなかったのが悔しんじゃないからな！

「とりま187目指す」

「何で187なんだ？」

分からののか？流川だよ流川。

いつものように学校に行き、午後10時にアルとシッキーと待ち合わせしているので三咲町に向かう。15分前集合やで？

「だーれだ？」

「キヤツ!？」

「俺や。待たせたの」

「もっつ!晋吾!！」

「てか真祖の姫に気づかれずに背後を取るなんて出来るの俺ぐらいやから。」

早速バカップルを始める二人。志貴は晋吾の5分後についたが、何とも行きにくそうだ。

「シッキー遅かったやんけ。20分遅れやで？」

「遅い!志貴!！」

お前らのせいだと言いたい志貴であった。

「さてシッキー。微調整が終わったからの、今日は実践や。覚悟はええか？」

「……ああ。出来ている」

真剣な表情のシッキー。晋吾は満足げに頷く。

基本は俺とアルが探してシッキーが狩るって感じかな？

あと2日もすればアルも大分回復するだろうし、そうしたらアルとシッキーの二人に死者狩りは任せて。

俺が奴を消す。

「所でさ、ちよつと気になったんだけど」

「おん？アルどうしたん？」

「志貴つて、メガネしてると『死』が見えなくなるの？」

「ああ、そうだよ？」

「ちよつと見せてくれない？」

志貴は見たらすぐに返してくれとだけ伝え、アルクエイドにメガネを渡す。

「やつぱり、すごい魔眼殺し。志貴、このメガネくれた人。まだこの町にいる？」

「いや、子供の頃偶然あっただけだから……」

アルクエイドはその人物が現存する4人の魔法使いの内の一人。ミスブルーであることを告げる。

「は・・・ははっ。本当に魔法使いだっただ。」

「なあ、アル。ミスブルー？つてどんな奴？」

「私の聞いた限りだと、『破壊』に関しては他の魔術師の追隨を許さないの技量を持つ、破壊特化の魔術師つて話よ。」

「危ない奴やな」

「確かに初対面で顔蹴り飛ばされそうになったっけ」

「男？女？」

「女だよ」

絶対男だと晋吾は思った。

「どんな魔法使えるん？」

「確か・第五魔法『青』って行ったわね。どう言ったものかは分からないけど」

「『青』？マジで？」

「晋吾知ってるの？」

「知ってるも何も、赤毛のねえ ちゃんに銀髪イケメンが教えてたのがそれだっしてしっとるだけや。」

「それって……」

「志貴。聞かない方がいいわよ。死にたくなかったらね」

魔法に至る道は根源に至ることではなく、根源にいる管理者から授かることである。魔術師たちの目的を根本から崩壊させる一言だった。

図らずも知ってしまった志貴だが、ぶっちゃけよくわかっていなかった。そして晋吾も、その価値を分かっていないのだから救いようがない。

死者の匂いを追って着いたのは、鉄筋だけが組まれたどこかの工事現場。

「さてシツキー。アドバイスや。」

「アドバイス？」

「おう。正直な話や。シツキーがこれからやることは『殺し』やない。」

「……」

「俺は『殺すコト』とは『意志を潰すコト』だと思ってる。せやから意志のない死者はもう殺されてるんや。ロアにの」

「……」

「今からシッキーがやることは救うことや。」

「……救うこと」

「そう、魂があるべき場所に返すためや。」

「……あるべき場所に」

「そのために今やるべきことは……」

「分かつている。……変……身ッ！」

光と共に暗視スコープ付きのヘッドギアを装着した志貴。

「目標を駆逐する！」

志貴は地面を這い走る蜘蛛のように疾走し、鉄筋を駆け上がる。

「疾ッ！」

一体の死者とすれ違いざまに首、両腕、胴を切断し、さらに駆ける。鉄筋から鉄筋を移動し、寄って来る死者たちは蜘蛛の糸に絡まるかのように動きを止め、次の瞬間には細切れになって行く。

死者たちは鉄筋を崩し何とか止めようとするが、崩れゆく鉄筋から鉄筋に飛び移り、死者を頭を掴み地面にたたき付け、胸に一指し。そして斜めに切り裂く。

後ろから立ち上がり際を狙った死者が襲うが、斜め下から蹴り上げ、反対の足で消し落とす。

衝撃でバウンドする死者を着地した瞬間に消えるように駆け、体を5つに解体する。

「……最初から最後までクライマックスやなシッキー。」

思ったより強くてビックリした晋吾であった。

「シッキー平気か？」

「ああ、大丈夫だよ。」

シッキーが少し疲れたようなので近くのゲーセンで一休み。現在11時で閉店間近だが、人が一人もいない。大丈夫かこのゲーセン？

「お茶でええ？」

「ありがとう晋吾。」

「ほれ、アルも。」

「ありがとう。」

「……吸血鬼なのにお茶飲むのか？」

「晋吾が前に持ってきたわ。でもこれ、晋吾が持ってきた奴の方がおいしいわね。」

上の玉露と比べちゃいけません。伊右衛門には伊右衛門の美味しさがあるんですよ。綾鷹には綾鷹の美味しさがあるんですよ。

だが、生茶スパークリング。俺は貴様の存在を認めねえ。

「ほな、明日も同じ時間でええ？」

「ああ、分かった。・・・所で晋吾の家は大丈夫なの？」

「大丈夫？」

「あ・・・いや、家の人とかさ平気なのかなって。」

「理解ある弟がいるから平気や。姉ちゃんは夜、親父がおらへんと起きてられんしの。」

「両親は？」

「親父は入院中。おふくろはおらん」

微妙に困った顔をするシツキー。少し面倒だと感じる。まあ、同情を駆るのには相応な人生だしな。仕方がないか

「まあ、てことで俺の家は平気や。シツキーは平気なん？」

「俺は・・・秋葉、妹にばれなければ大丈夫。」

むんっ、と胸を張るシツキーだがもうとつくにはれてるようにしか見えないのはなんでだ？

ふと、会話に参加してこなかったアルに気になると、どうやらクレインゲームに夢中らしい。

「どうしたアル？やってみるか？」

コクリと頷くアル。・・・可愛い奴め。

どうせ小銭とか持ってないだろうと思いい、財布を出して1000円を入れてやる。

失敗。もう1000円。失敗。むーっと唸り声をあげるアル。カワええ奴め

「これ取れないわよ晋吾」

「まあ、このゲームはこんなもんや。」

「晋吾、取れないの？」

上目遣いで懇願するアル。ぐはあ。

いや、俺アーケード派だったからさ。クレイゲームとかさっぱりなんだよね。別に取れなくてもいいならやるけど？

結局、1300円ほど使ったら取れた。……執念だな、俺。

「てかさ、何でこんな騒ぎになってんのに教会の奴らこんの？」

「さあ？この国が無神論者の国だからじゃない？」

「そんな関係あるんか？」

「もしくはもう来るとか」

「マジか」

「教会？」

シッキーが頭の周りに？マークを飛ばしていたので、アルに説明させる。メンドクサイからではない。アルの方が詳しいと思ったからだ。

「その人たちも吸血鬼退治が目的なんだろ？その人たちと協力すれば早くカタが付くんじゃないか？」

「……ダメね。奴らにとってはヒト以外の霊長類は存在自体が

悪なのよ」

「……そっか、アルクエイドや晋吾も悪って訳か。」

「晋吾は違っわよ？むしろ歓迎されるかも」

「なんでさ？」

「簡単に言つと教会ではアポストロスが神の化身とされているから

よ。」

「あ〜。」

納得したと言つたようにこつちを見るシツキー。こつち見んな。

「まあ、埋葬機関とか来ても、狙われるのは私だけだから安心して？」

「アホ。俺がキチガイをアルに近づかせる訳ないやろが。」

「晋吾〜」

アルのハグを、両腕を広げて受け止める。シツキーが熱いのか手で煽ぎ始めた。どうした？このゲーセン、ガンガンに冷房ついてるぞ？

「そう言えば最初、志貴のこと教会の人間じゃないかと思つたんだっけ？」

「……もしかして。俺に盾になれとか無茶なこと言つてたのはそう言うことだったのか！」

「アホ。男だろシツキー。盾になるのは当たり前やろ」

「男とか女とかの前に、吸血鬼相手なら盾になった瞬間終わりだから」

そう言つて納得いかない表情を浮かべるシツキー。

「贅沢な奴め。じゃ誰の盾ならなるんや？」

「そう言う問題じゃない。」

「アハハッ。志貴みたいな凄腕の殺人鬼なら、盾になるより剣の方が似合うわよ」

「ちがー！ーう！」

うがーと唸る様に吼えるシッキー。

「あのな・・・一応言っとくけど、俺が人を殺してしまったのはおまえが初めてだよ。殺したいって思ったことも。この眼を使おうと思っただけでも、おまえに会うまで一度もなかった。」

「・・・嘘。あんなに卓越した殺人技術を持っているのに？」

「あれじゃね？退魔の血が騒ぐ！・・・的だな。」

二人が一斉にこっちを向く。アレ？俺、何か失言した？

「おっと失敬、時間の様だ。また明日10時に会おう！」

「ちよっ・・・晋吾！待っ・・・」

逃げるように帰る俺。くっ、こんなくだらな所でポロるとはッ！凜ちゃんのうっかりがうつつたか？今度一成の所でお被いしてもらおう。

第31話 変人と殺人鬼。(後書き)

晋吾の身長は140cm後半ぐらい。ちなみに中学2年生男子平均身長は159.9cm。

何も言っなッ!

ルカワはぶっちゃけ作者が少年の時に思い描いていた淡い期待。現在174cmですが何か問題でも?

魔法に至る道云々とかは軽くスルー推奨。簡単に言うと、自ら辿り着くものじゃないんだよ?という他人の手を借りずに努力をし続けた魔術師の夢丸つぶしなオチ。幼女神出した時から考えていた設定。魔術師がち涙目。

>さてシッキー。アドバイスや。

助言じゃなくて洗脳な件について。うちのシッキーは本当にどこに向かっているんだか……

>生茶スパークリング

認めねえから

>クレインゲーム

ぶっちゃけ作者の実話。男のプライドをかけた戦いだっただの。

>凜ちゃんのうっかり

うつるものではありません。しかし、遺伝するものです。

今回の話は突っ込みどころがたくさんだ。次回は元々一つの話の後半の話。

シエルさん登場!!最後だけだけど……

第32話 変人と素晴らしき同類。

次の日の朝・・・晋吾は土下座をしていた。

「で？何か言うことある？」

「姉ちゃんごめんなさい。」

ぶつちやけると姉ちゃんに夜抜けだしていたことがばれました。何故だ？

兎に角、お姉ちゃんオーラがパネエ。J〇J〇のドドドとかワンピースのドン！とかそんなチャチなもんじゃねえ。

まあ、いつかはばれんじゃねー？って程度には思ってた。ばれたらばれたでテヘッペロで済ませようかと思ってたけど無理っす。昨日までの俺死ね

「晋吾。」

「アイマム！」

姉ちゃんの赤い眼がスツ・・・と細まり、ゴミを見る眼に変わる。

・・・怖い！！ちびりそうになった。

「私、門限16時って言ったわよね？」

「門限とは帰らなければならぬ時刻のことであってですね・・・」

「口答えはいいの。出歩くなって意味で言ってるの分かってるわよね？」

「イエスマム！」

怖いよー。シロちゃん助けてー。っと目線で探したら、「行ってきまーす」と逃げるように出かける土郎の声が聞こえた。

「と・に・か・く！今日出歩いたら承知しないから」

「具体的には？」

「土郎達連れて城で暮らすから勝手にすれば？」

姉ちゃんがガチ切れしているのがよくわかります。

ゴメン、アル。今日は行けないみたいだ。そしてシツキー、アルに怪我させたら殺す。

この日はおとなしく学校に行って真っ直ぐ家に帰る。もちろん、このままアル達をほっとく訳にはいかない。ので、

「姉ちゃんお願いします！」

「……………」

頭を下げにきました。あと何か喋ってください。怖いです。

「……………晋吾、私は、不安なの。切嗣は入院してるし、これ以上家族に何かあつたら……………不安で」

「姉ちゃん」

「晋吾が平気だって分かってる。でも、勝手に居なくならないで」

「……………ごめんな。姉ちゃん。」

「許さないっ」

「……………何をすれば許してもらえますか？」

「今日、一緒にお風呂に入って一緒に寝てくれないと許さないんだ」

から！」

この日は小学生のころ以来、久しぶりに姉ちゃんと一緒に風呂入って寝ることに。姉ちゃんも一人は寂しかったらしく、嬉しそうにグツスリ眠っていた。

今日はちゃんと姉ちゃんたちに、行ってきますを言ってから三咲町に向かう。うむっ、これだけで気分が違うな。

約束をすっぽかしてアルが拗ねてなきやいいけど。とりあえずいつもの公園に向かいますかね。

公園に向かうと、シッキーがリストラされたリーマンみたいにブランコを漕いでいた。

「シッキーどうした？哀愁が漂ってるで？」

「ッ！晋吾！？」

「おうよ。」

ひどく驚いた様子のシッキー。むっ本当にどうしたんだ？

「昨日はどうしたんだ！？アルクエイドはずっと機嫌悪かったし、大変だったんだぞ！？晋吾ん家に乗り込もうとして止めるのが！」

「ぶっちやけると姉ちゃんにはれて怒られました。」

「あー。うん。なんかごめん。」

「いいってことよ。」

シヨンポリした晋吾の表情に居た堪れなくなってしまう志貴

俺、なんかシツキーと仲良くなれた気がする。

「ところでシツキー。元気ないけどどうしたん？」

「ああ、実は……」

「アアアアアア！晋吾！！」

「ヤッホー。」

「バカ！バカバカバカバカ！！なんで昨日来なかったのよ！！」

「ぶっちゃけると姉ちゃんにばれて怒られてました。」

「あー。うん。なんかごめん。」

シヨンポリした晋吾の表情に居た堪れなくなってしまうアルクエイド

なんか凄いデジャブ。

「ごめんな。本当は連絡取れたらよかつたんやけど、ケータイとか持っていないやろ？」

「ケータイ？ないわ。……持ってた方がいいの？」

「んーまあ、ないよりは」

ムムムツと唸り始めるアル。嫌な予感しかしない。行動を起こす前にケータイでもプレゼントしとくか。

「で？シツキーの相談事ってなんや？」

「相談事？」

「ああ、実は……」

「志貴がロアじゃないかですって？そんなわけがないでしょ？」

「このバカが！」

「なんでそこまで言われなきゃいけないんだよー!!」

ノリですサーセン。

「正直な話やけど、シツキーがロアだったらとっくの昔にサーチ&デストロイで消えとるで？俺がほっとく理由なぞなか」

「あっ、そうか。」

納得した表情のシツキー。

「とりあえず、今日も行くで？」

「んー。今日は居ないみたいやのー」

「ほんと？」

「ロア自身もじつとしとるみたいやし、死者もおらへんのお」

じゃ帰る？って雰囲気に来た。ふとシツキーを見ると、胸元なら血が滲み出していた。

「おい。シツキー。胸元が大変なことになつとるで？」

「え？あ、いや、心配するほどじゃないんだ。痛くもないし。古傷

からちよつと血が滲むだけだから・・・」

手に付くまで滲んでいるのにちよつとどころじゃないだろ・・・
と、内心で思っていたらアルの様子がなんだか変だ。

「アル。どうし・・・」

「近づかないで!!--」

肩を触ろうとしたら叩かれた。・・・結構なレベルでハートブレイク。

「あつ・・・ごめんなさい。・・・私、疲れちゃったみたい。また明日の夜、公園で会いましょ」

そう言って逃げるように走り去るアル。・・・かなりのレベルでハートブレイク。

「あわわわ。どないしようシッキー!どないしよう!?!」

「お・・・追いかければいいと思うよ?」

「おお!ドラマみたいな展開やな!ほならシッキーまた明日!」

シッキーのアドバイス通りにアルを追いかける俺。正直アルの方が速いです。

まあ、どこにいるかは一目瞭然な感じなので先回りしてみようと思

います。

「アル！待ってくれ！！」

そう言つて後ろから両腕で抱き止める。おおっ、なんかドラマの俳優みたいだな俺。

若干身長が足りないのが悔やまれる。せめて150！150あれば！！

「………晋吾。私……怖い。怖い。」

「アル？」

「晋吾の血が……飲みたくて、飲みたくて。でも、そんな自分が怖くて。なら、代わりに志貴のなら……って考えてた自分が怖くて」

「アル………」

少し驚く。アルがこんなことを考えていたなんて……

「アル………お前は優しいのお」

「優しい？私が？」

「ああ。血が飲みたいのに飲みたくないんやろ？それは優しさだと思つて？」

「違う……私は……自分が嫌で、私が………」

「自分を否定すな」

静かな声だが、力強い声を発する晋吾。

「本来食料である血を飲むことを、怖いと感じるのは、人間を『等しく』見とるからやろ？」

「私は………」

「知性と価値観が等しいモノを食料として見たくないんやろ？それは優しさや。」

「なんで？なんで晋吾は私のことが分かるの？」

「当たり前やがな」

泣きそうな震える声でアルクエイドが尋ねると、晋吾は変わらぬ声で答える

「おまえが好きやから」

なぜか顔を真っ赤にして活動停止してしまったアルの再起動を待つこと30分。ようやく落ち着きも取り戻したようだ。

「どうしても我慢できなかつたら俺に言えや。ほかの奴の血なんて飲まれたら、嫉妬でそいつ潰してしまうさないに」

「……もう。晋吾のバカ」

「じゃ、また明日会いまひよ？」

「ええ。また明日。」

「……おっと。忘れるところやった。」

帰ろうとしていた晋吾は、踵を返してアルクエイドに近づき、唇を重ねる。

「また明日」

「……晋吾のバカ」

帰ろうとしたが、ロアの動きを感じ、追いかける。するとなぜかシツキーとバトってるじゃないですか。

さすが主人公ってとこやな。イベントのエンカウント率が異常や

よく見ると変身していないで眼鏡がない。いきなり襲われたのか？

ロアを圧倒するシツキー。うわーやっぱつえー！

しばらく観戦していると、シツキーがロアの胸を突こうとして急に止める。すると逆に反攻に出られピンチに

もしかして死の点突きそうになった？言いつけを守ってもらえて嬉しいが、シツキーがまずいので助けないと

頭上からバットを振り下ろしてロアの腕を弾き、蹴りを入れる。

「助っ人登場！」

「晋吾ー！ー！」

「もう一人いるがな」

「え？」

晋吾が人差し指で空を指す。すると剣が雨のように降り、ロアを襲う。

「だ・誰だ！？」

「キチガイエリート集団所属のコスプレプレイヤー！素晴しき変人さんや！！」

「違います！！」

「シ・シエル先輩！？」

「先輩！？まさかシツキーもプレイヤーだったのか！？」

「だから違います！なんでそうなるんですか！？ていつか戦闘中ですよ！？」

怒涛なるツツコミ。フツ……さすがやな。

新たな乱入者と漫才していたら、ロアが体に突き刺さった剣を抜いてこちらに投げてきた。

「危ない！！」

シエル先輩とやらが叫ぶ

「お？何が？」

と普通に掴んだ。なんとも言えない空気が流れ、いつの間にかロアは消え、シツキーは気絶した。え？この空気のなかで二人つきり？

……アル……カムバアアック！！

第32話 変人と素晴らしき同類。(後書き)

イリヤが怒った(、・・・)でもすぐにデレた。

さすがロリキラーストロング。晋吾じゃなかったらイチコロやな。

今話のツッコミどころ。

>お姉ちゃんオーラ
とりあえずすごい。

>姉ちゃんの赤い眼がスツ・・と細まり、ゴミを見る眼に変わる。
実は、作者的にこの言い回しを気に入っている。

>士郎達連れて城で暮らすから勝手にすれば？
衛宮家の人間にとっては死刑宣告に等しい。

>シヨンポリした晋吾
たぶん癒やし系

>ハートブレイク
動きが止まるアレ。伊達さんが得意。

>せめて150！
切実な願い。

>踵を返してアルクエイドに近づき、唇を重ねる
踵は浮いている。

>イベントのエンカウント率が異常や

お前が言っな

>素晴しき変人さん

シエル先輩のこと。今話のタイトルにもなった。

>アル〜カムバアアックー！

アルクエイドがいたらさらにややこしくなっている空気。

今話は晋吾をイケメンにしてやろうと思って書きました。どうでしたでしょうか？

作者的には微妙。くさいのよあんた。って言われそうww

シエルさん登場。ようやく普通にだせますわ。

今回はここまでで次回のお話。おそらく、アルクエイドとのデート編だと思われる。

シッキーはおやすみ。シエルさんは登場します。それではまた次回
！！

第33話 変人の使命、姫の夢。(前書き)

いやー、タイピングするのめんどくさい症候群にかかってたいへんでした。

困った(; ;) もんだ

内容とか全部出来てるのに打つ気になれなくて。
兎に角！完成！！それではどうぞー！^

第33話 変人の使命、姫の夢。

「御降臨お待ちしております。」

「あー。……大儀であった？」

「ハッ」

ロアが去った後、シエルさんと絶賛気絶中のシッキーを治療等をしてきたのだが、終わったあと、いきなり跪かれて困っています晋吾です。

「もしかして教会じゃ、ガチで父なる神扱い？」

「いえ、主とは厳密には違います。実の話をすると、教会でもこの話は揉めているので……」

「聴きたくないことを聞いたわー」

真面目なシスターさんの返答に困りながら苦笑いを浮かべる。

「そういえば自己紹介がまだやったの。晋吾や。衛宮晋吾」

「名を頂けるとは、感極まる思いです。シエルとお呼びください。」
名前ぐらいで大袈裟な。と思いつつも、おおよ。と返事を返す

「ところで、シエルさんもあいつを追ってんのか？」

「シエルでいいですよ？・・それで？あいつとは？」

「惚けんでもええ。ロアや。」

「……もちろん。それが仕事ですからね。」

そういつてカソツクの胸元を引っ張るシエル。

「じゃ、悪いが俺に任せろや」

「いえ、お手を煩わせる訳にはいきません」

「いや、実際の被害者に会って、余計に思ったわ。あいつの存在は許せん。」

「……分かりますか？」

「違和感は初めて見た時から感じてたが、今分かったわ。可哀想に、魂が燃れてるわ」

「燃れ……ですか」

「ロアに引っ張られての。奴が居る限り死なんだろうさ。」

唇を噛むシエル。どうやら嫌悪感がぬけないらしい。

「まあ、安心せい。ロアは綺麗サツパリ消したるさかい。その後数年もすれば、燃れも元に戻るだろうさ。」

「……」

「それとシッキーは頼んだで？俺はもう家に帰らんといかへん」

「……わかりました」

シエルにシッキーを任せた次の日、授業が終わり放課後。今日は桜ちゃんだけでなく、一成もいます。

「そついえば、噂のご令嬢とはどうなったのだ？」

「ご令嬢？」

「ああ、なんでも商店街のおば様が見たようだ。どこかのお姫様のような金髪美女と会っている姿をな」

「ガチで？商店街のおばはんってどこの？」

「肉屋だ。」

「あいやー。なんという不運」

まあ、あのときは細かく人の気配に注意するつもりはなかったし。

飯食ってただけで疚しいこととしてなかったし。

さすがにキスの瞬間は半径2kmぐらいは、見えないように気を付けたが。

「恐らくだが、まだ知らないのは。晋吾曰く引き籠っているらしい女狐と、鈍感な士郎ぐらいだろう。」

「桜ちゃんも？」

「私はクラスメイトが話しているのを聞いただけですけど、一応は……」

「なんで桜ちゃんのクラスメイトの話題が俺なんよ」

「先輩も学校では有名人ですから」

マジか……。まあ、ぶつちやけどうでもええけどな。

「任せろ。影でうだうだ言われるのは慣れている。」

「そんなのになれるな。」

「ところで先輩！彼女さんとはどこまでいったんですか？」

桜ちゃんがそんなこと聞いてくる。他人の恋愛に興味津々な女の子といった感じだ。

最近の桜ちゃんは普通の女の子っぽくっていい感じです。……その体からほのかに香る匂いがなければ。

「まあ、キスはすませたわ」

サラッと答えたら顔を真っ赤にする桜ちゃん。純情やな。……その体からほのかに香る匂いがなければ。

「ほお。遠坂が聞いたらなんて言うかな？」

せやからなんで凜ちゃんが出てくるねん

「……もしかして遠坂先輩と付き合ってるんですか？」

「んなわけなか」

「友達以上の関係ではあるな」

「そりゃそうやろ。」

マブやからな。

「そうなんですか。……先輩。」

「おん？」

意を決したかの表情を見せる桜。

「二股はいけないと思います!!」

「なんでやねん」

しばらく桜の説教を受けた晋吾であった。

もちろん、暖簾腕押しどころかなんで怒られているか晋吾は理解していなかったが……

その夜。いつもの公園に向かう。今回は一番のりらしい。

「あ・・晋吾。」

「ヤッホー。アル。」

「・・ヤッホー。晋吾」

嬉しそうに手を振って近づくアル。

「待った？」

「いや何、今来たところや。」

「ホント？」

「ほんまや。そういえば、この間俺の街に来たときあったやろ？」

「うん。」

「一緒にピクニックしてたの、知り合いに見られたらしくてな。結構噂になっとるらしんや。」

「見られた？」

「おう。」

「・・・晋吾に食べさせて貰った時？」

「おう。」

恥ずかしいのか真っ赤になるアル。純情やのー。

「嫌々だった？」

「う・・うん。少し恥ずかしいだけ。そっ・・それに、し・・晋吾と愛し合ってるのは事実でしょ？」

そんなことを言ってくるアル。こ・・・これが、萌殺という奴なのか・・ッ!?

その後。しばらくアルとバカップルやっていたが、一向にシッキーが来ない。

「シッキーどうしたんやろ？」

「サボりかしら？・私、約束守らないの嫌いなよね。」

「シッキー貧血持ちっぽいし。昨日も倒れたし」

「ホント？」

「おう。ロアに襲われてな。逃げられたけど。」

「・・・相変わらず晋吾って、さらっと凄いこと言うわね。」

呆れた表情で俺を見るアル。ヤメテッ！そんな顔で俺を見ないでッ！

「とりま、シッキーの家に行くかの。」

「行くの？」

「乗り込みはせんぞ？様子を聞きに行くだけや。」

「志貴くんおります？」

「・・・志貴様は体調がすぐれないようなのでお休みになられています。」

シッキーの家に行ったら、いつぞかのメイドさんが出てきた。

「明日も様子見た方がええ感じですか？」

「はい。」

「分かりました。ほな、体調がよくなったらこの番号にかけてもら

えるように言ってくれますかい？」

そう言っ紙に携帯の番号を書き、それを渡す。

「……分かりました。」

「頼みますわ。」

「……貴方がたは、志貴様のご友人ですよね？」

「そうですが？」

「志貴様と仲良くしてあげてください。お願いします。」

「……メイドさん。良いこと教えてあげますわ」

「なんでしよう？」

「友人はお願いされなくても、仲良くするもんですぜ？」

「……ありがとうございます。」

そう言っ、メイドさんは笑顔を浮かべながら礼をするのであった。

「……晋吾じゃないみたい。敬語使っちゃたりして。」

「アホ、礼儀ぐらい弁えるわ。さーてこの後どうすつかのお？」

「？死者退治するんじゃないの？」

「そんなの俺がやるんや。もう終わったのとおなじやろ。それより、

明日のことや」

「明日？」

「今日で粗方狩ったら明日暇になるしの、シッキー居ないし。……

・デートでもするか？」

軽いノリでそんなことをほざいたら

「え？……でッ、デッ、デート！？」

「何をそんなに驚いてるんや。」

急に落ち着きがなくなるアル。

「あの、その、晋吾が好きになってから、その、何度も想像したとか、そういうんじゃないかって、やってみたいとか、その・・・」

ああ。俺のバカ。勢いに任せてばかりで

「スマン、アル。」

「ふえ??」

「俺がアホやった。・・・明日、絶対デートするわ。」

学校？サボるに決まってるやろがアアアアアア！！

そして次の日。

「お・・・お待ちせ。」

「おはようアル。」

「なんだか晋吾。いつもと違う感じ・・・」

「そうかの?」

実際、いつもと違い服は選んできたし（いつもは適当なTシャツとGパン）

ワックスとやらも挑戦してみた。ツンツン頭は嫌いなのではないが

ちなみに補導される心配はない。

例の如く初対面の人には中々気づいてもらえないし、アルの魔眼使えば一発だしな。

「アルもいつもと違う感じがするの」

「そう?」

「おう。いつも以上に綺麗や」

「……バカ」

そんなこんなで映画を見に行くことにした。なんでか?デートと言えばこれだろ?つまり偏見である。

「そう言えば、俺。この世界では映画館始めてやな。」

「そうなの?」

「おう。俺、DVD派やからの」

「ふーん。じゃ私と一緒にね?」

チケットを受け取ると嬉しそうにクルクル回りながら歩くアル。

「映画館自体は始めてやないから俺の勝ちや。」

「むー!ずるい!..!」

ぼかぼかと叩かれながら始まるのを待つ。もちろんポップコーンとコーラの準備は完璧だ。

せっかくアルと来たからと言ってラブロマンスに挑戦してみたが、主演俳優が微妙過ぎる。

少し萎えた気分が出てきたが、アルは面白かったようだ。

「面白かったよ。暗くなつてさ。あつ！もちろん内容も良かったよ。」

「内容はまあまあだけど、残念ながら俳優が微妙や」

「そうなの？」

「デンゼル・ワシントン、ジュード・ロウ、エドワード・ノートン等と比べたら月とすっぽんや。演技力がダンチよ。今度アルン家で見せてやるさかい」

「ホント!？」

アルは嬉しそうにクルクル回る。どうやら嬉しいと回るのが癖みたいだ。可愛い奴め

「どうしたの？」

「なんでもないさ、姫さん」

「むー。晋吾にそう呼ばれるのなんだかやだ」

「むっ、そうかい。すまん、アルクエイド」

「……晋吾って、私が名前、ちゃんと呼ばれて喜んでるの分かって言ってるでしょ？」

「さてのお？」

そう言つて晋吾は、目を瞑り、頭をかいたのであった。

電車を乗り継ぎ、次にやってきたのは遊園地。てかネズミの国。なんでか？デートと言えばこれだろ？つまり偏見である。

金？舞弥姉ちゃんにデートしに行くって行ったら軍資金くれた。

ジェットコースター、海賊船、メリーゴーランドと、アルが乗りたいを言ったもの、行きたいと言ったもの、やりたいと言ったものを次々とこなしていくのだが

「……………」

「どうしたの？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「……………大丈夫そうには見えないけど」

「大丈夫だ。問題ない。」

現在並んでいるのはコーヒーカップ。そう、ぐるぐる回るアレである。

昔、息子が大好きでで8回連続で回転地獄に晒された悪夢が蘇る。若干及び腰。

分かってやっているのか、我が息子は回転速度をこころ変えながら回っていた。

実は動きと速度が密接な関係にあるコーヒーカップと言う乗り物は、一定の速度で回すより強弱をつけると、不規則な軌道を描くので余計に気持ち悪くなる

いや、今なら、この体ならどんな回転でも大丈夫だ。己の三半規管を信じる。己の三半規管を信じる。

「大丈夫だ。問題ない。」

もう一度自分に言い聞かせる。不安げな心配そうな目で見てくるア

ル。大丈夫だ。問題ない。

自分たちの番になって、アルが動きだす。ゴクリっ、ついに来たか。

「晋吾。止めた方が良かった？」

席に座ってからアルがそんなことを聞いてくる

「いや、俺は過去を打ち破るんや。こんなことで、立ち止まるわけにはいかへん。」

物々しい言い方に不安になるアル。

相変わらずこの乗り物は座ってからの待ち時間がもどかしい。

ビーというブザーがなる。俺にとっては恐怖の音でしかない。

「アハハッ。晋吾、これおもしろーい」

くるくる回るコーヒークップを気に入ったのか、嬉しそうに声をかけるアルクエイド。一方晋吾は

「ハハッ。ハッハッハッハッハッ！」

「ふふっ。晋吾も楽しんでるんだ。ソレーッ！」

勢い良くハンドルを回すアルクエイド。そして晋吾だが、気持ちわるくはなかった、二半規管は晋吾の信頼に答えた。

だが、トラウマがそう簡単に消えたわけではなかった。恐怖を誤魔化すかのように笑い声をあげただけであった

その証拠に晋吾の両手は、コーヒークップの淵を、壊れない程度に強く握っていたのだった。

「晋吾大丈夫？」

「大丈夫だ。問題ない。」

若干疲れた様子の晋吾。少し休憩の意もかねて観覧車に乗り込む。

「ここの乗り物も楽しいわね。どれも同じだと思ってたけど。全然違って」

「まあ、楽しむための乗り物だからの」

アルは外の風景を楽しみながら言う。

「……ねえ。どうしてアポストロスになったの？」

「どうして？」

「私、知ってるわ。元々人だった晋吾を、魂の神がアポストロスにしたって」

「どうしてねえ。俺からしてくれっていったようなもんよ。」

「……」

「俺はの、終わった人生をもう一度くれるって言うんやから。使命をはたさんといかんと思っただけや」

「使命？」

「おう。人をつくることや。機械でな」

そう言うと、アルの、アルクエイドの空気が変わる。ミシリッ。観覧車が悲鳴を上げる。

「あなた本気で言ってるの？人を作るですって？」

「まず、神がどうこう、星がどうこうって話は不要やで？世界を作った神様からのお墨付きや。いい夢やってさ」

「……でも、そんなことをしたら協会や教会が黙っていないわ。」

「正直な話、教会も協会も嫌いや。なんで可能性を制限する？せやから人は成長できへんのや」

アルから睨まれるのは辛い。が、悪いがこれは誰にも譲れない。邪魔はさせない。俺の夢は、邪魔させん

「……はあー。晋吾は人類を信じてるのね。どこまでもいけると」

「なぜいけないと決めつけるんや？逆に俺はそこが理解できん。」

「私は、人をいらないと決めた星が生んだものだから。なんとも言えないわ。」

両手を広げ、天を仰ぐアル。

「でも、どうしようもないわね」

「何がや？」

「どうしようもないくらい、晋吾のことが好き。星なんかには、邪魔させない。人類は信じられないけど、晋吾を信じてみるわ」

「……アル。」

「私も夢、かな？できたみたい。星に人を、認めさせるの。晋吾が正しかったって。可能性は無限大だって。そしたら、人間を律する

存在の真祖はいらなくなる。私は自由だわ。」

「アルクエイド」

「晋吾の夢が私の夢。なんだかそれってすごくロマンチックね」

花のような笑顔を見せるアルクエイド。なんだが眩しくて晋吾は目を閉じた。

第33話 変人の使命、姫の夢。（後書き）

それではいつものごとく、今回の話。

実は派閥抗争が勃発していた教会。

シエルさんはアポストロス派。というよりも直属の上司的存在のナルバレックがアポストロス派。

が、実際問題晋吾とって得は何もない。

ちなみにアポストロスと対立しているのはもちろん例のあの人。簡単に言うと、父、子、聖霊か父、使徒、聖霊かのどっちかって話。これ以上深くは話せないよツ>>

そして冬木では晋吾に春が来たと伝わる。冬木に我が世の春が来たアアアア！！

ヒツキーの凜ちゃんと朴念仁のシロちゃん以外は知っている状態。

凜ちゃんは気づいていない理由としては、アルクエイドが晋吾にバれないように気配を消しながら来たから。結局晋吾にバレたが。

そして桜。強く生きる。

翡翠と晋吾。多分笑いで天下を取れる。

デートの話。定番という名の偏見。しかし、ゲーセンはないと思うわ。彼女もプレイするならええけど、最近ゲーセンに彼女連れてくる男多いくて、彼女さんメチャメチャつまんなそうに待つとるで？他人の俺が心配になってしまっやろ。

まあなにが言いたいかというかと、ゲーセンに女連れてきて待たせてんじゃねえ。

ポップコーンとコーラ。定番だけど、コーラが飲めない僕はジンジャーエール。

ハリウッドスター。評価高いけど、パイレーツ・オブ・カリビアン
のジョニー・デップは俺的に微妙。ブルース・ウィリスとかも好き
よ。

トラウマが意外に多い晋吾。まあ人間誰しもあるのさ。ちなみにコ
ーヒーカップは俺もダメ。サイクロイド曲線の恐怖。ちなみに作者
のトラウマはネズミの国のシンデレラ城ミステリーツアー。幼少の
ころガチ泣きしてションベン垂らした。城の中で・・・アイヤァ。
クローズのことを聞いたとき、思わずガッツポーズした。

姫の夢。夢は生きる原動力なんですよ。

今回ののはなしはここまでにして次回の話。

ロア第一回戦。アル、我慢できずに晋吾をハムハム。シエル「うち
のアポストロスになにしてんじゃああああああ！！」まで行ける
といいかなあ

それではまた次回！！

第34話 変人とシキ。(前書き)

11月に入る前に更新できました。えかったえかった

それではどうぞー

第34話 変人とシキ。

side 遠野志貴

「いつか俺もお前も、バケモノになるのさ」

夢を見ている。記憶に覚えのない少年時代の記憶。

「本物の・・・バケモノにな

」

誰だかわからない少年は語る。

バケモノ。それなんだろう？人智を超えた力を持つモノ？

いや違う。それは意志を無くし、自分を制御出来なくなったもの
ことであろう。

晋吾は言っていた。『殺すコト』とは『意志を潰すコト』だと。つ
まりバケモノになるとは、自らに潜むナニカに殺されることだ。

殺されてバケモノになる。ではそのあとは？

バケモノの手足とされたアイツ。・・・魂をあるべき場所に返す。

バケモノ

救世主

殺人鬼

アポストロス

ああそうか。俺のすべきことは

「志貴様。……志貴様。」
「ん……あつ……」

目覚めも共にと差し込むのは日差しとアノ線。

日光の心地よさと線から伝わる不快感がなんとも言えない、いつもの朝だ。

「おはよう。翡翠。」

「おはようございます志貴様。」

慌ててメガネをかけ、翡翠に挨拶をする。

着替えて時計を見る。8時過ぎ、もう秋葉も学校に行っている時間だ。

「遅いお目覚めですね。兄さん」

「秋葉？学校は？」

「本日は遠野家の用事で10時から予定があります。ですので学校は休みです。」

「……そっか。大変だな。」

「遠野家の当主として当然の務めです。」

そう言う秋葉に、ひどく感心する。俺とそう歳も変わらないのに、立派に当主として務めている。

「・・・秋葉。」

「なんででしょうか？」

「ありがとう。」

「なっ・・・なんですかいきなりっ」

「いや、頑張ってる秋葉に、どうしてもお礼を言いたくっさ」

そう言っつて、志貴は感謝を情を目一杯込めて笑顔を見せた。

感謝を告げただけなのに、なぜか真っ赤になって無言になってしま
う秋葉に疑問を抱きながら朝食を済ませる。

「・・・そういえば志貴様、これを晋吾様から預かっています。」

「晋吾から!？」

「はい、連絡先だそうです。体調が優れたら連絡してほしいとのこ
とです。」

朝食後、翡翠から渡された紙には携帯の電話番号が書かれていた。
早速家の電話から連絡する。

『ハイ、もしもし』

『あ、志貴だけど・・・』

『おっ、シツキー元気になったかー。よかったわー』

『ごめんな。一緒に動けなくて』

『気にすんなや。今日は行けるかい?』

『ああ、大丈夫だ。待ち合わせはいつもと同じかな?』

『そやで。ほな、待ってるでー』

ガチャリと通話が切れる音。まだ話したいことがあったのに・・・

ん?何を?何を話したかったんだ俺は?

オレにアイツをコロサセロ

ビクンツと体が跳ねる

「志貴？」

急に体を震わす志貴に心配そうな表情を向ける翡翠。

「大丈夫だよ。……大丈夫」

そう……志貴は翡翠に言いながら自分に言い聞かせた。

夜の街を歩く。

と、言っても街はまだ、帰宅中の人々で溢れていた。

しかし、この街には人にまぎれて闇が潜んでいる。

志貴が公園に向かう途中、裏路地で死者の気配を感じた。なぜかはわからない。

全身が叫んでいる。ここにいます。そして……コロセと。
慌てて晋吾がくれたカードを探す。

ニヤリと口端が釣りあがる。路地裏にはいりこみ

「変身」

言葉を紡ぐと共に溢れ出す死者達。さらに口端が釣りあがる。

コロセ

脳が言葉を発するかのように幻覚しながら志貴は死者を殺す。

一番太い線を示してくれるゴーグル。かつて裸眼で、ネロ・カオスの獣を切った時のような強い痛みを感じさせない。

コロセ

頭の中はコロセと命じているが、志貴は殺している感覚はない。

これぞ救い。意志を無くし、殺されているながら生かされ続けるバケモノを救う。

タリナイ……タリナイ。

粗方の死者を屠った志貴はフラフラと街を歩き始める。

タリナイ……タリナイ……スクイガ……コロセ

……スクイガ……

呼応するように付けたままのゴーグルが起動し、視界にマップを表示させる。

「神社……」

フラフラとしながら、赤く表示された神社に向かう。

鳥居を超えたそこには、視界を埋めつくさんばかりの死者で溢れていた。

志貴のすることは、ただ線をなぞるだけ。

それだけで死者を『救う』。バケモノをコロセ。バケモノに救いを……

脳裏に浮かぶ記憶にない少年時代の記憶。

殺したくない、殺したくないのに。俺はアイツを……

『頼むよ。ナナヤ……』

バケモノになったら頼む、とアイツは言った。救いを……頼むと……

でも、殺したくなかった。なのに……俺は……

「俺は……」

声を出すと、深い闇の中にいたような心が戻ってくる。

正気に戻ると目の前は血の海と化していた。赤・紅・朱

コロセ

これ以上何を……『救え』と言っのだろう。……動くものなんて何も。

なくはなかった

「……秋・葉？」

目に映ったのは妹。秋葉。どうしてここに？

体を妹のいる方向に向ける。

ナイフを

向ける。

らって探していたら少女を襲ってた

せやからだついてやった。そしたらアミバ様になった。

「兄さん！？兄さん！！どうしてこんなことに……」

妹さんだったらしい。なぜか睨まれています。……俺が殴ったからですねスイマセン。

ザッ・

妹さんの目線が音がする方に移る。そこにはなんとロアがいた。

「ロアかい。ついているっちゃついているの」

「……秋葉。何故ここにいる。どうしてその紛い物に近づくと、何故兄と呼ぶ？」

「そんな兄ちゃんやからに決まっとううに」
「……」

無視された。なんか悲しい(; ;)

「どけ、秋葉。殺された借りを返さなければならぬからな」

「……違う。紛い物は貴方の方だわ。下がちなさい！貴方が兄さんを殺すというのなら、その前に私が貴方を殺します！」

気丈なお嬢ちゃんやな。凜ちゃんに通ずるものがあるわ。

「それに、反転した者を消去するのは当主の義務ですから。でも、貴方は一族のものとすら違う。そんな者に兄さんを侮辱するなんて許せない」

なるほど、妹さんはロアの存在に何となく気づいているのか。

「騙されるな！俺がお前の兄だ！俺が遠野シキだ！！」

「黙りなさい。もう二度と兄さんを貴方に殺させはしない。私の兄さんは・・・私の兄さんは貴方なんかじゃないんだから！！」

逆ギレしたのか、ロアは手を振るい稲妻を秋葉に走らせる。

晋吾は防ごうと前に出ようとするが、目の端で、剣　たしか名は黒鍵　を見た。

「ぎゃー！」

地面に突き刺さった黒鍵は結界を生じさせ、秋葉を守る。

「遠野秋葉さん！遠野君を連れてここを早く離れるんです！！あれが・・・吸血鬼です！！」

口はやに告げるのはカソックを着たシエル。

「お、シエル。」

「晋吾様！？」

「なんか無視されてめっちゃ悲しいやけど、どうしたらええ？」

「ど・・・どうしたらと申しられてもですわっ」

めっちゃ焦ってる。なんかカワええ。

気を取り直してバットを取り出し、魔力を張り巡らせる。

「さて、ロア……ミハイル・ロア・バルダムヨオンだったか？
終演の時間やで？」

「……アポストロス。私を殺しに来たか。」

「殺す？表現が違うの、消しに来たんや。綺麗にのぉ！」

距離を詰める。ロアは稲妻を走らせる。弾く。

「くっ、理不尽めっ!!！」

「お前に言われたくないわ!!！」

ロアは跳躍し、社の屋根に飛び移る。晋吾もそれに続く。

両者は同時に着地し、着地と同時に晋吾は水月部への中段前蹴りを振るっ。

「ぬおおっ!!！」

ドンッ！という鈍い音と共にロアは吹っ飛ぶ。しかし、ロアは空中で稲妻を振るっ。

しかし、その稲妻は晋吾が得物をひと振りするだけで消え去る。

「効くかそんなへナ電気！ピカチュウ連れてこいやぁああ!!！」

「クッ！ならば!!！」

ロアは空中で魔方阵を展開する。その数二つ。その幾何学的な模様

はまさに大魔術。

「ちよつと嘘でしょ!?!」

あまりにももの魔に秋葉は仰天する。

「そこまでやりますか!?!」

さすがのシエルも吃驚。

「カハアアアアアアアアア」

当の晋吾は息吹を吐き、重心を低く、下段の構え。受ける気満々である。

「消え失せる!」

二つの魔方阵が重なり、陣の中央から迸る雷光。それはまさに荷電粒子砲。

「セイヤア!」

切り上げたバットは一筋の光と化した雷を切り裂く。しかし

「ぬおおまじか!?!」

ただの木造建築である社が耐えられず、足元が崩れ落ち、落ちる晋吾。

なんとか着地し、再び跳躍。社の屋根に登るも。

「おんろ？いねえし。」

「ロアなら逃げていきましたよ。少し戦力差を見せ過ぎです」

同じく屋根の上に登ってきたシエルにそう告げられる。えー、なんやそれー

「……まったくもって骨のない奴め。教授のほうはまだ良かったわ」

「貴方には遠慮というものがありませんか。」

「遠慮はするわ。けど自重を捨てた。」

そう告げたらため息をつかれた。

「そっぴやシッキーは？」

「そうでした。秋葉さん。遠野くんは大丈夫でしたか？」

「……外傷はないけど、今車を呼んでいるわ」

「ならー安心です遠野君でいつも無茶ばかりしそうなので」

「俺が一番焦ったのは、教授の獣に身投げし損ねた時です」

「……そんなことがあったんですか？」

「兄さん……」

ため息を吐く妹さん。苦労しとんなー。

「しかしおかしいですね。あの躰は魔術回路もマナの貯蔵料もそんなに多くないのに、なぜあれほどの大魔術を……」

「ふーん。普通に考えれば別電源があるんやろつて。さすがは発電機つてところやな」

「あっ、そうでしたね」

キヨロキヨロと周囲を探し、屋根から降りていくシエル。それに続く俺と妹さん。

シエルが地面に手をかざすと、紫電が飛び散り魔方陣が地面に浮かぶ。

「それは？」

「『式』です。対広域の侵食結界術式。」
「ほーん。まじかー」

晋吾はコキコキと手首や首を回す。

「……何をしていますか？」

「おん？準備体操。」

「なにを」

「せーの、せい！！」

ズガンツ！と言う衝撃と共に消滅する結界術式。なにをしたって？
そらいつもの結界破壊よ

「これで安心やねー！」

「いやいやいやいや。おかしいでしょ。おかしいですって絶対。」

Vサインを見せてくる晋吾に全力で手を振って否定するシエル。

「そう言えば、あの結界どんな術式だったん？」

「……自由な人ですね貴方は。」

「おうさ。フリーダム晋吾と呼んでくんろ。」

「……アレはここから魔力を吸い上げていたんです。」

シエルは純粹に驚いていた。アポストロスはもつと超越した存在だ
と思っていた。

それが何と人間臭いコト。

「マジか。アレいくつか繋がってたばいけど大丈夫なん？」

「・・・そこまで分かるんですかっ？」

「おう。手応え的に」

まあでも、十分に理不尽な存在であることも分かったが。

「恐らくあれと同種のもがこの町にあと十数か所あります。その
集束点がロアの根城です。ですので一つ一つシラミつぶしに・・・」

「その必要はあらへんわ」

「まさかっ!？」

「おう。だいたい検討ついたわ。悪いけど、早いもん勝ちやで？」

「・・・いいでしょう。私としてもまだこの手で討つことを諦めきれ
ません。」

「ええやる。1日ぐらいは待ってやっても構わんよ」

「フフツ。余裕ですね。後で文句は言わないでくださいよ?」

「男に二言はなか」

なにやら楽しそうに笑うシエルに余裕の表情を見せる晋吾。

「秋葉さん。おそらく、この事件はもうすぐ綺麗さっぱり解決しま
す。何せ、神の御使い様がついてらっしゃいますからね」

そういつて晋吾に笑顔を見せるシエル。晋吾は『神の御使い』のセ
リフに露骨に嫌な顔を見せる。

「そう言うことで、遠野君をよろしく」

後ろ向きで跳躍するシエル。そして残された晋吾と秋葉。

「ところで妹さん。」

「・・・なんでしょうか？」

「ケータイとか持ってへん？」

おそらくこの少年は、いつか翡翠が言っていた兄の友人とやらだろ
うが、なんとも変わった子だ。神様の使いらしいし

「何に使うのですか？」

「おっ、あんがとさん。とりあえず待たせてるもんがおるんよ」

そういつて借りた携帯で電話をかける。

『もっ・・・も・・・もしも？』

「おおーアルー。ちゃんと出れたやないか。俺のケータイ壊してへ
んやろな。」

『もー。このぐらい出来るわよ！』

「若干緊張してたやろ？」

『してない！』

「してたやろ？」

『してないもん！』

あれ？なんで私の携帯でイチャイチャしてるんだろ？と秋葉は思っ
た。

「おっ、そうやった。シッキー見つけたで。もっのびてるけど。」

『また？』

「おう。なんか一人で死者狩りしてたみたいや。」
『一人で!? 危ないじゃない!?』
「ところがぎつちよん。危ないのは妹さんだつたてオチよ。」
『妹?』
「まあ、そこはおいといて」

なんか置いてかれたと秋葉は思った。

「ロアと戦いました。」
『また!?』
「んで逃げられました。」
『また!? …… …… なんか疲れてきたわ』
「ツツコミ疲れって奴やな」
『そうなの?』
「おうそうや。初体験やな。」
『え? エへへ。そうだねっ』

なぜか楽しそうな女の声。おかしいだろ! つと秋葉は思った。

「とりあえず今からそっち向かうわー」
『分かったわ。…いつまでも待ってるから』
「ドアホ。俺がお前をいつまでも待たせるか」
『…バカ。待ってるからね』
「おう。またな」

こうして電話を切る晋吾。

「妹さん。電話あんがとな」
「……………ええ」

貸すんじゃないなかつたと秋葉は思った。

妹さん、秋葉と別れて晋吾はいつもの公園に向かっていた。

「あつ晋吾!」

アルが飛びついてきた。なんだがぶんぶん尻尾を振っている犬みただ。

「お、よしよしよし。」

「あつ、やめてよ晋吾。恥ずかしいよお」

ついムツゴロウ撫でをやってたら恥ずかしがっていやいやするアル。可愛すぎだる常識的に考えて。

ハグしてアルの抱き心地を堪能する。今回はアルが腰を折っているから踵は浮いていない。

「晋吾つてあつたかいね。」

「人間湯たんぽ晋吾です」

「湯たんぽ?」

「ぽかぽかするやつです」

「じゃ晋吾は湯たんぽだね。ぽかぽかする。」

「綾波かつ」

「綾波?」

ぽかぽか言って言ったら綾波でしょう。

「んっ……し……晋吾」

「んーどうしたん」

アルも俺の肩を抱く。

「晋吾………放して………」

「自分で肩掴んどいて何言ってるんねん」

アルは俺の肩をしっかりと掴んで放さない。むしろだんだん力が強くなっている。

「アルの抱擁が熱いです。晋吾です」

「………」

ダンマリのアル。あれえー？

「おーいアルー」

無反応。俺の骨がみしみしと悲鳴をあげてきた。

バキィッ

「ちょ……マジか」

慌てて魔力を張る。痛くなくなった。

「アルー。おーいアルー。」

あむっ

・・・噛まれた。

「アレ？もしかして我慢できなくなったん？」

返事をするかのようにあむあむと首筋に歯型を付けるアル。

・・・これ、今魔力硬化やめるとスーパースプラッターな映像が見られるんやろなー

しばらくあむあむと歯型を付けられていたら、ふとやみ、どうしたかと思ったら。

ぺろぺろ。レロレロ

なんか舐められた。ペロペロ。俺、今ペロペロされてるお！シンゴクンペロペロ（＾＾）

ギリイイイ！ギリギリギリッ

今度はめっちゃ強く噛まれてた。めっちゃ痛いえええええ。魔力硬化してるのにめっちゃ痛い。

「くっ、されど今は耐える時！アルやって耐えてきたんや。今一時ぐらい耐えんか！」

しかし硬化を解除する勇氣はない。せやかてしゃーないんや。めっちゃ痛いんやで？

「フツ。フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ」

「な、なんやこの地獄のそこから聞こえてくるような声は」

きよろきよろと周囲を見渡すと、シエルが電灯の上で不気味な笑い声を上げていた。

「なっ、シエルなにしとるんや。」

「何をしているかですって？それは……こっちのセリフですツッ！」

憤怒の表情を浮かべ、狂気の目を宿すシエル。

ヒイイイイイ。

まさお君みたいな悲鳴をあげたくなるけど心の中で我慢。

「うちの御使い様にイイイイイ！何しとんじゃコノボケエエエエエエエエエエ！」

「それって俺のマネっすか？」

カミカミしているアルに渾身の右ストレートを食らわすシエル。

吹っ飛ぶアル。俺の首筋にも激痛が走る。

「ぐおおおお。イタリア以来だぞ痛みを感じるの。」

「ふうふうふう、アポストロスの血を啜るつですって？穢らわしい下衆が！醜い吸血鬼が！！」

「アルは十分綺麗だと思うんだ俺。」

「お黙りなさい！」

「アイマム！！」

信者に黙れと言われる俺って何さ？

いや、別に神になったつもりはないけどさ。宗教はじめようなんて思っていないけどさ

「ゼロ！トロワ！セット！！」

黒鍵を投げているだけなのにクレーターを作るシエル。また吹っ飛ばされるアル。

「ちょ・・・おま・・・アル死んでしまっやる！！」

「吸血鬼には等しき死を！」

そのうち第七聖典すら持ち出しそんな雰囲気である。

「アルー！落ち着くんや！今血を吸おうとしてもシエルさんが危ないわ！いろんな意味で！！」

「失礼な！」

事実やないか！

「う・・・うう晋吾。大丈夫？」

ポロポロの状態で俺の心配をするアル。やばいなんか泣ける。

「アル！」

「行かせません！」

俺の前に立ちふさがるシエル。

「どくんやシエル。他人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて地獄に落ちるんやで？」

「どきません。第一、真祖との恋愛なんて認めません。たとえ主が認めても」

睨み合う二人。だんだんアルに対する仕打ちに怒りを抱いてきた晋吾。

「晋吾・・・ごめんね。ごめんね。晋吾・・・晋吾。晋吾・・・
怖いよお晋吾お」

頭の中でナニカが切れた音が聞こえた。

「速い！？ぐっ」

シエルの後ろに周りこみ、手刀を打ち込み気絶させる。

「アル！もう心配ないぞ！」

「晋吾お。晋吾お」

泣きそうなアル。いや、もう泣いているのか。

「ダメなの。もう我慢できないの。」

「我慢せんでええ。いっぱい我慢したろ？もう楽になり」

「でも、でも、血をのんだらどうなるの？今まで通りに一緒にいられるの？またデートに行けるの？」

「ああ。行けるとも。いられるとも」

アルは、あああ、ああああ、と感嘆をあげ、首筋に近づいてくる。

カリイ

恐らく、絶妙な手加減。肉をちぎることなく、ただ、皮を切り、血を出す。

その行為にアルの愛を感じた。

痛みなく済ませてあげたい。

そんなアルの愛情が、奇跡を産み、魔力硬化を薄皮一枚で破り一滴の血を流す。

そして……

「ゴクリ」

喉をつるわす。舌で舐めとり、喉をつるわす。

「ああ、ああああ。真祖が使徒の血を……」

「あああ、あああああ。晋吾が、晋吾が入ってくる……」

嘆きの声を上げるシエル。晋吾の血の味に溺れるアルクェイド。

「晋吾……晋吾……」

そして真祖の姫は愛しき人の名を呼びながら、眠りについた。

第34話 変人とシキ。（後書き）

シリアスとギャグパートがひっちゃかめっちゃかになってしまった。
・・・
やはりシリアスは難しいわ

ちなみにシッキーの退魔衝動が強まった理由の後付とすれば、ロアに会ったことも一因ですが、根源に繋がった超能力者同士の交配を続けて人間としての純度を極限まで高めた七夜の者なので、『人間以外のモノ』に過剰反応してしまうのですが、根源に近い存在であるアポストロスである晋吾との交流で、さらに過剰になってしまったことも原因です。

そしてロア。さすがはラスボス（笑）と言ったところ。ちなみに四季に憑依したロアでは晋吾の魔力硬化を打ち破ることはできません。シエルなら可能でしたが・・・
ロア涙目。

とうとう晋吾の血を飲んだアル。シンゴクンペロペロ（^ ^）
耐久A+ある晋吾の骨を折るとか真祖怖すぎ。
ちなみに参考として、あのバーサーカーの耐久はAです。推して知るべし。

最後に全国のシエルファンの皆様ごめんなさい（焼き土下座）

今回の話はここまでにして次回の話。そろそろ月姫編の終幕も近い！
またもやフラフラうついてロアにエンカウトするシッキー。そしてロアの根城に踏み込んだ晋吾。ロアは何分持つのか！？
そして晋吾の血を飲んだアルクエイドは！？

それではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3752p/>

こんなチートでもありですか？ そうですかい。

2011年10月28日15時42分発行